

文部科学省特定領域研究

**環太平洋の「消滅に瀕した言語」
にかんする緊急調査研究**

宮島 達夫 編

**長塚節「土」会話部分の
標準語訳と方言による朗読**

長塚節「土」会話部分の標準語訳と方言による朗読

宮島達夫

(京都橘女子大学)

はしがき

「土」は、長塚節(1879-1915)が1910(明治43)年に東京朝日新聞に連載した小説である。舞台は、著者の故郷、茨城県結城郡石下[いしげ]町国生[こっしょう]であり、会話部分には茨城方言がつかわれている。その方言は、自然や農村生活の精密な描写にふさわしく、きわめて忠実なものである。夏目漱石は、この作品が単行本になったときの序文で、「作としての「土」は、寧ろ苦しい読みものである。決して面白いから読めとは云ひ悪い。第一に作中の人物の使ふ言葉が余等には余り縁の遠い方言から成り立つてゐる。」と述べている。

茨城方言は、西関東の群馬・埼玉などの方言とはちがって栃木・福島の方言にちかく、東北方言の系統に属する。発音の面では「イ」と「エ」の区別がなく、語中語尾のカ行・タ行音が濁音になる。表現の面で「(山)サ」「(行く)ベエ」などの形が多用されることも東北的である。なお、この地方がいわゆる無敬語地帯で、デス・マス体がほとんど使われず、男女の言語差がないことに注意していただきたい。直線距離では東京(日本橋)から約40キロしかないのに、漱石が「縁の遠い方言」と感じたのも当然である。

発表後90年をすぎた現在では、工場の進出や交通網の整備にともなって、伝統的な農村が首都圏の一部に組み入れられ、地元の人にとっても、「土」に出てくる方言は、なじみのうすいものになった。それで、会話部分を標準語に訳すとともに、方言の発音で朗読・録音することをこころみた。

参考文献

宮島達夫「長塚節『土』の方言はわかるか」(『国文学解釈と鑑賞』2000年1月号)

目 次

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・iii

章立て	ページ
一 (お品の発病)	1
二 (勘次帰宅)	1
三 (卵買い商人との交渉)	5
四 (お品の死)	8
五 (結婚のころ)	10
六 (おつぎの成長)	11
七 (くぬぎ根を盗む)	16
八 (おつぎと与吉)	20
九 (与吉さつまいもを食う)	22
十 (もろこしを盗む)	22
一一 (おつぎと青年たち)	35
一二 (酒屋での勘次)	35
一三 (村祭の踊り)	37
一四 (宴会と兼ばくろう)	39
一五 (巫女の口寄せ)	48
一六 (卯平同居)	52
一七 (勘次と卯平の不仲)	54
一八 (卯平別居)	57
一九 (おつたとのいさかい)	58
二十 (おつた水害にあう)	66
二一 (勘次, 卯平に打たれる)	70
二二 (卯平の孤独)	75
二三 (老人たちの会合)	75
二四 (卯平の過去)	[地の文だけで会話が ないので不採録]
二五 (火事)	85
二六 (仮住まいでの治療)	86
二七 (卯平, 自殺をはかる)	88
二八 (おかみさんとの会話)	91
あとがき	94
Summary	96

p. 15

お品「おつう」
おつぎ「おつかあか」
与吉「まん／＼ま」

p. 16

お品「おつう、そんな姿（なり）で汝（わり）
や寒かねえか」
おつぎ「寒かあんめえな」
お品「おつう、そこらに砂糖はなかつたつげゝ
え」
おつぎ「そら／＼」

p. 17

お品「こりや芋か何（なん）でえ」
おつぎ「うむ、少し芋足して暖（あつた）め
返（けえ）したんだ」
お品「おまんまは冷たかねえけ」
おつぎ「それから雑炊（おぢや）でも拵（こ
せ）えべと思つてたのよ」

p. 18

お品「おつう、今夜でなくつてもえゝや」
おつぎ「此（これ）へも水入（せえ）て置か
なくつちやなんめえな」
お品「さうすればえゝが大変（たえへん）だ
らえゝぞ」

p. 20

男「どうだね、一燻べあつたらようがせう、
今直（すぐ）に明くから」

二

p. 21

お品「おつう、せかねえでもえゝぞ、俺（お）
ら今朝少し工合（ぐえゝ）が悪（わり）い
から緩（ゆつ）くりすつかんなよ」
おつぎ「おつかあ、寒かなかつたか、俺（お）
ら知らねえで居た」

p. 22

おつぎ「おゝ冷てえ」
おつぎ「今朝は芋の水氷つたんだよ」
お品「うむ、霜も降つたやうだな」
おつぎ「何処でも真白（まつしろ）だよ」
お品「夜明にひどく冷々（ひや／＼）したつ
けかんな」

p. 15

お品「おつう」
おつぎ「おかあさんか」
与吉「まんまんま」

p. 16

お品「おつう、そんなかつこうで、お前寒く
ないの」
おつぎ「寒くなんかないわよ」
お品「おつう、そこらに砂糖はなかつたかな
あ」
おつぎ「そらそら」

p. 17

お品「これは芋？ なに？」
おつぎ「うん、少し芋をたして暖めなおした
の」
お品「ご飯は冷たくない？」
おつぎ「だから、おじやでもこしらえようと
思つてたのよ」

p. 18

お品「おつう、今夜でなくつてもいいよ」
おつぎ「これへも水入れておかなくちゃなら
ないでしょうね」
お品「そうすればいいけど、たいへんだつた
らしなくてもいいよ」

p. 20

男「どうだね、一くべあつたらいいでしょ
う、今すぐに明くから」

二

p. 21

お品「おつう、急がなくてもいいよ。私けさ
少し具合がわるいから、ゆっくりするか
らね」
おつぎ「おかあさん、寒くなかつた？ 私知
らないでいた」

p. 22

おつぎ「おお冷たい」
おつぎ「けさは、イモの水がこおつたんだよ」
お品「うん、霜も降つたやうだね」
おつぎ「どこも真白だよ」
お品「夜明けにひどく冷えたからねえ」

お品「俺（お）ら今朝はたべたかねえかな、
汝（われ）構あねえで出来たらたべた方が
えゝぞ」

おつぎ「おつかあ、ちつとでもやらねえか」

p. 23

おつぎ「切干でも切つたもんだかな」

p. 24

お品「大根（だいご）は分つたのか」

おつぎ「分つてるよ」

おつぎ「さうら、姉（ねえ）が処（とこ）へ
でも来て見ろ」

お品「よきは利口だから姉（ねえ）が処（と
こ）に居るんだぞ」

おつぎ「危険（あぶねえ）よ、さあ此（これ）
でも持つて居ろ」

おつぎ「辛（から）くて仕やうあんめえなよ
きは」

おつぎ「ぼうんとしたか、そらそつちへ行つ
ちやつた」

p. 25

おつぎ「こんだはぼうんとすんぢやねえかん
な」

おつぎ「それ持ち出すんぢやねえ、聴かねえ
と此（これ）で切つてやんぞ、赤まんまが
出るぞおゝ痛（いて）え」

p. 28

勘次「どうしてえ」

お品「勘次さんか」

お品「南のおとつゝあは行（ゆ）き違（ちげ
え）にでもならなかつたんべかな」

勘次「行逢（いきや）つたよ、そんだがお前
（めえ）どんな塩梅（あんべえ）なんでえ」

お品「俺らそれ程でねえと思つて居たが三四
日（さんよつか）横に成つた切でなあ、そ
れでも今日等（けふら）はちつたあえゝや
うだから此分ぢや直（すぐ）に吹つ返（け
え）すかとも思つてんのよ」

勘次「そんぢやよかつた、俺ら只ぢや歩いて
もよかつたが、南こと又歩かせぢや済まね
えから同志に土浦まで汽船（じようき）で
乗つ着けたんだが、南は草臥れたもんだか
ら俺ら先へ出たんだがな、南もあの分ぢや
今夜もなか／＼容易ぢやあんめえよ、それ
に汽船（じようき）が又後れつちやつてな」

p. 29

お品「私けさは食べたくないからね。お前は
かまわずに出来たら食べた方がいいよ」

おつぎ「おかあさん、少しでも食べない？」

p. 23

おつぎ「切り干しでも切ろうかしらねえ」

p. 24

お品「大根は分かったの？」

おつぎ「分かつてるよ」

おつぎ「さうら、おねえさんのところへでも
来てごらん」

お品「よきは利口だから、おねえさんのとこ
ろにいるんだよ」

おつぎ「あぶないよ。さあこれでも持つてい
なさい」

おつぎ「からくて仕方がないでしょう、よき
は」

おつぎ「ぼうんとすてた？ そら、そつちへ
行つちやつた」

p. 25

おつぎ「今度はぼうんとすてるんじゃないか
らね」

おつぎ「それ持ち出すんじゃないよ。聴かな
いとこれで切つちやうよ。血がでるよ。お
お痛い」

p. 28

勘次「どうしたい」

お品「勘次さん？」

お品「南のおとうさんは、行き違いにでもな
らなかつただらうかな」

勘次「出会つたよ。だけどお前はどんな具合
いなんだい」

お品「私はそれほどじゃないと思つていたん
だけど、三四日横になつたきりでねえ。そ
れでも、きょうあたりは少しはいいようだ
から、この分ぢやすぐに治るかとも思つて
るの」

勘次「それじゃよかつた。おれはふつうなら
歩いてもよかつたんだが、南をまた歩かせ
ちやすまないから一緒に土浦まで汽船に乗
つてきたんだが、南はくたびれたもんだか
ら、おれは先に出てきたんだが、南もあの
分ぢや今夜もなか／＼なたいへんだらうよ。
それに汽船がまた遅れちやつてな」

p. 29

勘次「そんなに悪くなくつちやそれでもよかつた、俺（お）らどうしたかと思つてな」

勘次「お品おまんまは喰べてか」

お品「先刻（さつき）おつうに米のお粥（けえ）炊（た）いて貰つてそれでもやつと掻つ込んだところだよ」

勘次「それぢやどうした、途中で見付けて来たんだから一疋やつて見ねえか」

お品「ほんによなあ」

勘次「おつう、其処（そこ）へ火でも吹つたけて見ねえか」

お品「勘次さんそら大変（たいへん）だつてな、俺（お）らそんなにや要（え）らなかつたな」

勘次「今だから何時（いつ）までも保（も）つよ、さうしてお前（めえ）も力つけれな」

お品「汽船（じようき）に乗つて来たつて余つて費用（かゝり）も掛つたんべな」

勘次「さうよ、二人で六十銭ばかりだが此は俺出したのよ、南に出させる訳にも行（え）かねえかな」

お品「それぢや稼えだ銭（ぜね）それだけ立投（たてなげ）にしつちやつたな」

p. 30

勘次「それでも財布（せえふ）にやまあだ有るよ、七日（なぬか）ばかり働（はたら）えてそれでも二両は残つたかな、そんで又行く筈で前借（さきがり）少しして来たんだ、こつちの方から行つてる連中（れんぢう）が保証してくれてな」

お品「俺ら今日見てえだらえゝが、酷く行逢（いきや）ひたくなつてなあ」

勘次「どうせ此処らの始末もしねえで行つたんだから、一遍は途中で帰（けえ）つて見なくつちや成らねえのがだから同じ事だよ」

勘次「それでも俵にしちや置いたな」

勘次「あつちに居ちや銭（ぜに）は要（え）らねえな、煙草一服吸ふべえちやなし、十五日目が晦日でそれまでは勘定なしで其間は米でも薪でもみんな通帳（かよひ）で借りて置く位（くれえ）なんだから、十五日目に成らなくつちや財布（せえふ）も膨れねえが、又百でも出つこはねえかな」

勘次「そんなに悪くないんなら、それでもよかつた。おれはどうしたかと思つてな」

勘次「お品、ご飯は食べたか」

お品「さっきおつうに米のお粥をたいてもらつて、それでもやつと食べたところなの」

勘次「それぢやどうだ、途中で見付けて来たんだから一匹食べてみないか」

お品「ほんとにねえ」

勘次「おつう、そこへ火でもつけてみないか」

お品「勘次さん、それはたいへんだつたねえ。私はそんなには要らなかつたのよ」

勘次「今だから、いつまでももつよ。そしてお前も力つけれよ」

お品「汽船に乗つてきたつて、よほど費用もかかつたでしょうねえ」

勘次「そうさ。二人で六十銭ばかりだが、これはおれが出したのさ。南に出させるわけにもいかないからな」

お品「それぢや、かせいだ金は、それだけすてちやつたわけね」

p. 30

勘次「それでも財布にはまだあるよ。七日ばかり働いて、それでも二両は残つたからね。それで、また行くはずで前借りを少ししてきたんだ。こつちの方から行つてる連中が保証してくれてな」

お品「私、きょうみたいだといいいけど、ひどく会いたくなつてねえ」

勘次「どうせ、ここの始末もしないで行つたんだから、一度は途中で帰つてみなくちやならないんだから、同じことだよ」

勘次「それでも、俵にしておいてはあるんだね」

勘次「向こうにいたら銭はいらないな、たばこ一服吸おうというわけじゃなし、十五日目が晦日で、それまでは勘定なしで、その間は米でも薪でもみんな通帳で借りておくくらいなんだから、十五日目にならなけりや、財布もふくれないが、また百でも出っこないからねえ」

勘次「米ばかり炊いても毎日(まいにち)一升づゝは要(え)る位(くれえ)だから骨も随分折れんが出(で)せえすりや二貫と三貫は残せつから、帰(けえ)るまでにや俺もどうにか成ると思つてんのよ、さうすりや塩鮭位(しほびきぐれえ)は買あことも出来らな」

お品「そんぢやよかつた、土方なんぢや碌な奴等は居(え)ねえつていふからどうしたかと思つてな」

p. 31

勘次「そんな奴等と交際(つきえゝ)した日にや限(かぎり)はねえが、隅(すみ)の方にちぢまつてりや何ともゆはねえな」

勘次「どうした塩辛(しよつば)かあ有んめえ」

お品「有繫(まさか)佳味(うめ)えな」

勘次「此(これ)でもこゝらの商人(あきんど)は持つちや来(き)ねえぞ」

お品「起きて居たら大騒ぎだんべ」

勘次「いまつとたべろな」

お品「沢山だよ、おつうげもやつてくろうな」

勘次「俺も飯でも食はうかえ」

お品「おつう、お茶は冷(つ)めたくなつたつけかな」

勘次「要(えら)ねえぞ仕事に出りや毎日(まえんち)かうだ」

p. 32

勘次「此りや佳味(うめ)えこたあ佳味えが余(あんま)りあまくつて俺(おら)がにや胸が悪くなるやうだな」

勘次「米これだけ残つたから持つて来たんだ、あつちに居(あ)ればえゝが幾日(いつか)でも明けると炊かれつちやつても仕やうねえかんな、そんぢや此りやおつうげやつて置くんだ」

お品「袋なんか又何だと思つたよ」

勘次「それでも薪は持つて来る訳にも行かぬえから置いて来つちやつた」

勘次「お品、足でもさすつてやんべぢやねえか」

お品「えゝよ勘次さん、俺ら今日は日のうちから心持えゝんだから、先刻(さつき)もおつうが揃(さす)つてやんべなんていふもんだから少しもやつてくろつて云つた処

勘次「米ばかり炊いても毎日一升づつは要(え)るくらいだから、骨も随分折れるけど、仕事に出さえすれば二貫や三貫は残せるから、帰るまでには、おれもどうにかなると思つてるんだよ、そうすれば塩びきくらいは買うこともできるさ」

お品「それじゃよかつた、土方なんて、ろくな奴らはいないっていうから、どうだったかと思つてね」

p. 31

勘次「そんな奴らとつきあつていた日には、きりが無いけど、隅の方にちぢこまつていれば何にも言わないよ」

勘次「どうだい、塩辛(しよつば)はないだろう」

お品「さすがにうまいねえ」

勘次「これでもこゝらの商人は持つてこないぞ」

お品「起きていたら大騒ぎだろう」

勘次「もっと食べなよ」

お品「たくさんよ、おつうにもやつてね」

勘次「おれも飯でも食おうかな」

お品「おつう、お茶は冷(つ)たくなつたかな」

勘次「いらぬよ、仕事に出れば毎日こうだ」

p. 32

勘次「これは、うまいことはうまいが、あまりあますぎて、おれには胸が悪くなるやうだな」

勘次「米、これだけ残つたから、持つて来たんだ、あつちにいればいいが、何日でもあけると炊かれちゃつても仕方ないからね、それじゃ、これはおつうにやつておくんだ」

お品「袋なんか、また何かと思つたよ」

勘次「それでも、薪は持つてくるわけにもいかなぬから、おいてきちゃつた」

勘次「お品、足でもさすつてやろうか」

お品「いいよ勘次さん、私きょうは日中からいい気持ちなんだから、さつきもおつうがさすつてあげるなんていうもんだから、ちよつとやつてつていったところだよ、これ

(ところ) だよ、こんぢや二三日 (にさんち) も過ぎたら勘次さんは又行けべえよ」
お品「今夜はひどく心持えゝんだよ、えゝよ 本当 (ほんとう) だよ勘次さん、お前 (めえ) 草臥 (た) べえな」

三

p. 34

勘次「初 (あら) が少しかゝつたな」
お品「さうだつけかな、それでも俺 (俺) 唐箕 (たうみ) は強く立てた積 (た) なんだがなよ、今年 (今年) は赤も夥 (し) 多 (つ) かりだ (だ) が磨 (磨) 白 (するす) の切れ方もどういふもんだか悪 (わり) いんだよ」

p. 35

勘次「尤 (尤) も此 (この) 位 (くれえ) ぢ (ぢ) や且 (且) 那 (那) も大 (大) 目 (目) に見 (見) てくれ (べ) えから心 (心) 配 (配) (しんぺえ) はあ (あ) んめえ (めえ) がなよ」

勘次「此 (此) りや蒟 (蒟) 蒻 (蒻) だな」

お品「俺 (俺) らそれ (それ) 仕 (仕) 入 (入) たつ (つ) きり起 (起) られ (れ) ねえ (え) んだよ」

勘次「どう (どう) した (した) もん (もん) だ (だ) かな、俺 (俺) (おれ) でも担 (か) ついで (いで) 歩 (歩) っ (つ) てん (ん) べ (べ) かな、恁 (か) うして (して) 置 (置) いた (た) ん (ん) ぢ (ぢ) や仕 (仕) やう (う) ね (ね) え (え) かん (かん) な」

お品「さ (さ) う (う) よ (よ) な、それ (それ) より (より) か俺 (俺) らど (ど) つち (ち) か (か) つち (ち) つ (つ) たら (ら) 大 (大) 根 (根) (だいこん) でも (でも) 漬 (漬) て (て) 貰 (も) れ (れ) へ (へ) て (て) え (え) な、毎 (毎) 日 (日) (まいにち) 栗 (栗) の木 (木) 見 (見) て (て) 居 (居) て (て) 干 (干) (ほし) 過 (過) ぎ (ぎ) やし (し) め (め) え (え) か (か) と (と) 思 (思) っ (つ) て (て) 心 (心) 配 (配) (しんぺえ) して (して) ん (ん) だ (だ) から (ら) よ」

お品「自 (自) 分 (分) が (が) 丈 (丈) 夫 (夫) で (で) せ (せ) え (え) あり (り) や疾 (疾) く (く) や (や) つ (つ) ち (ち) ま (ま) っ (つ) た (た) ん (ん) だ (だ) が (が)」

p. 36

お品「勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん) 塩 (塩) 見 (見) て (て) く (く) ん (ん) ね (ね) え (え) か (か)、俺 (俺) ら大 (大) 丈 (丈) 夫 (夫) (だいちよぶ) 有 (有) る (る) と (と) 思 (思) っ (つ) て (て) た (た) つ (つ) け (け) が (が) な (な) よ、それ (それ) から (ら) こ (こ) つ (つ) ち (ち) の (の) 桶 (桶) の (の) 糠 (糠) が (が) え (え) ゝ (ゝ) ん (ん) だ (だ) よ、そ (そ) つ (つ) ち (ち) の (の) が (が) に (に) や (や) 房 (房) 州 (州) 砂 (砂) (ぼうしうずな) 交 (交) っ (つ) て (て) ん (ん) だ (だ) から (ら)」

勘次「おうい」

勘次「房 (房) 州 (州) 砂 (砂) でも (でも) 何 (何) でも (でも) 構 (構) あ (あ) め (め) え (え)、ど (ど) う (う) で (で) 糠 (糠) 喰 (喰) ふ (ふ) ん (ん) ぢ (ぢ) やあ (あ) ん (ん) め (め) え (え) し、それ (それ) に (に) こ (こ) つ (つ) ち (ち) な (な) ち (ち) つ (つ) と (と) 凝 (凝) 結 (結) (ごご) つ (つ) て (て) ら」

お品「勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん) そ (そ) ん (ん) でも (でも) 入 (入) れ (れ) (せ) え (え) ん (ん) な (な) よ、毒 (毒) だ (だ) っ (つ) ち (ち) ん (ん) だ (だ) から (ら)、俺 (俺) 折 (折) 角 (角) 別 (別) に (に) して (して) た (た) ん (ん) だ (だ) から (ら)」

勘次「さ (さ) う (う) か (か) そ (そ) ん (ん) ぢ (ぢ) や (や) さ (さ) う (う) す (す) べ (べ) よ」

ぢ (ぢ) や二 (二) 三 (三) 日 (日) も (も) 過 (過) ぎ (ぎ) たら (ら) 勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん) は (は) ま (ま) た (た) 行 (行) け (け) る (る) で (で) しょう (しょう) よ」

お品「今 (今) 夜 (夜) は (は) ひ (ひ) ど (ど) く (く) い (い) い (い) 気 (気) 持 (持) ち (ち) な (な) の (の) よ、い (い) い (い) よ、本 (本) 当 (当) よ (よ) 勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん)、あ (あ) ん (ん) た (た) も (も) つ (つ) か (か) れ (れ) た (た) で (で) しょう (しょう) ね」

三

p. 34

勘次「も (も) み (み) が (が) 少 (少) し (し) 多 (多) か (か) っ (つ) た (た) な」
お品「さ (さ) う (う) だ (だ) っ (つ) た (た) か (か) し (し) ら (ら) ね (ね) え (え)、それ (それ) でも (でも) 私 (私) 唐 (唐) 箕 (箕) は (は) 強 (強) く (く) 立 (立) て (て) た (た) つ (つ) も (も) り (り) な (な) ん (ん) だ (だ) け (け) ど (ど)、今 (今) 年 (年) は (は) 赤 (赤) 米 (米) も (も) 多 (多) か (か) っ (つ) た (た) け (け) ど (ど)、石 (石) 臼 (臼) の (の) 切 (切) れ (れ) 方 (方) も (も) どう (どう) した (した) の (の) か (か) 悪 (悪) い (い) の (の) よ」

p. 35

勘次「も (も) っ (つ) と (と) も (も)、こ (こ) の (の) く (く) ら (ら) い (い) な (な) ら (ら) 且 (且) 那 (那) も (も) 大 (大) 目 (目) に (に) 見 (見) て (て) く (く) れ (れ) る (る) だ (だ) ろ (ろ) う (う) から (ら)、心 (心) 配 (配) は (は) な (な) い (い) だ (だ) ろ (ろ) う (う) け (け) ど (ど) ね」

勘次「こ (こ) れ (れ) は (は) 蒟 (蒟) 蒻 (蒻) だ (だ) な」

お品「私 (私)、それ (それ) を (を) 仕 (仕) 入 (入) れ (れ) た (た) つ (つ) き (き) り (り)、お (お) き (き) ら (ら) れ (れ) ない (ない) の (の) よ」

勘次「ど (ど) う (う) した (した) も (も) の (の) かな、お (お) れ (れ) でも (でも) 担 (担) い (い) で (で) 歩 (歩) い (い) て (て) み (み) よ (よ) う (う) かな、こ (こ) う (う) して (して) お (お) い (い) た (た) ん (ん) ぢ (ぢ) や (や) 仕 (仕) 方 (方) が (が) ない (ない) から (ら) な」

お品「さ (さ) う (う) ね (ね) え (え)、それ (それ) より (より) も (も)、私 (私)、ど (ど) ち (ち) ら (ら) か (か) と (と) い (い) う (う) と (と) 大 (大) 根 (根) でも (でも) つ (つ) け (け) て (て) も (も) ら (ら) い (い) た (た) い (い) の (の)、毎 (毎) 日 (日) 栗 (栗) の (の) 木 (木) を (を) 見 (見) て (て) 居 (居) っ (つ) て (て)、ほ (ほ) し (し) す (す) ぎ (ぎ) や (や) し (し) ない (ない) か (か) と (と) 思 (思) っ (つ) て (て) 心 (心) 配 (配) して (して) ん (ん) だ (だ) から (ら)」

お品「自 (自) 分 (分) が (が) 丈 (丈) 夫 (夫) で (で) さ (さ) え (え) い (い) れ (れ) ば (ば)、と (と) つ (つ) く (く) に (に) や (や) っ (つ) て (て) しま (ま) っ (つ) た (た) ん (ん) だ (だ) け (け) ど (ど)」

p. 36

お品「勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん)、塩 (塩) 見 (見) て (て) く (く) れ (れ) ない (ない) ? 私 (私)、大 (大) 丈 (丈) 夫 (夫) ある (ある) と (と) 思 (思) っ (つ) て (て) た (た) ん (ん) だ (だ) け (け) ど (ど)、それ (それ) から (ら)、こ (こ) つ (つ) ち (ち) の (の) 桶 (桶) の (の) ぬ (ぬ) か (か) が (が) い (い) い (い) ん (ん) だ (だ) よ、そ (そ) つ (つ) ち (ち) の (の) には (は) 房 (房) 州 (州) 砂 (砂) が (が) 交 (交) じ (じ) っ (つ) て (て) ん (ん) だ (だ) から (ら)」

勘次「おうい」

勘次「房 (房) 州 (州) 砂 (砂) でも (でも) 何 (何) でも (でも) か (か) ま (ま) う (う) も (も) ん (ん) か、ど (ど) う (う) せ (せ) ぬ (ぬ) か (か) を (を) 食 (食) う (う) ん (ん) ぢ (ぢ) や (や) ある (ある) ま (ま) い (い) し、それ (それ) に (に) こ (こ) つ (つ) ち (ち) の (の) は (は)、ち (ち) ょ (ょ) っ (つ) と (と) か (か) た (た) ま (ま) っ (つ) て (て) る (る) よ」

お品「勘 (勘) 次 (次) さ (さ) ん (ん)、それ (それ) でも (でも) 入 (入) れ (れ) ない (ない) で (で) よ、毒 (毒) だ (だ) っ (つ) て (て) い (い) う (う) ん (ん) だ (だ) から (ら)、私 (私)、せ (せ) っ (つ) か (か) く (く) 別 (別) に (に) して (して) た (た) ん (ん) だ (だ) から (ら)」

勘次「さ (さ) う (う) か (か)、それ (それ) ぢ (ぢ) ゃ (や) さ (さ) う (う) す (す) る (る) よ」

勘次「どうしてこれだけ使へ切れるもんけえ」
勘次「どうした幾らか悪（わる）いのか」

p. 37

勘次「蒟蒻はお品がもんだから、銭（ぜに）はみんなおめえげ遣つて置くべ」
お品「勘次さん思ひの外だつてな、まあだあと余程（よつほど）あんべえか」
勘次「幾らでもねえな、はあ此丈ちや又出る程のこつてもあんめえよ」
勘次「菜（な）は畑へ置きつ放しだつてな」
お品「ほんにさうだつてなまあ、後れつちやつたつてな、俺ら忘れてたつてが大丈夫（だえちよぶ）だんべかなあ」
勘次「そんぢや俺ら今つからでも曳ける丈曳くべ」

p. 39

勘次「お品卵欲しいと」
お品「幾らか有つたつてな」
お品「おつう、四五日見ねえで居たつてが時（とや）にも幾らか有つたつて、あがつて見ねえか」

p. 40

お品「掛（かけ）は幾らだね」
商人「十一半さ。近頃どうも安くつてな」
商人「皆掛（みながけ）が四百廿三匁二分だからなそれ」
商人「風袋（ふうたい）を引くと四百八匁二分か、どうした幾つだ廿六かな、さうすると一つが」
お品「幾らなんでえ、この風袋は」
商人「十五匁だな」
お品「大概（てえげえ）十匁ぢやねえけえ」
商人「そんぢら見させえそれ、十五匁だんべ、俺（おら）がな他人（たにん）のがよりや大（え）けえんだかな」
商人「はて、一つ十五匁七分づつだ、粒は小さえ方だな」

p. 41

商人「四十六錢八厘六毛三朱と成るんだが、此りや八厘として貰つてな」
勘次「お品おめえ自分でも喰つたらよかねえけ、幾つでも取つて置けな」
お品「此の銭（ぜに）で外の物買つて喰つた方がえゝからこれ丈は遣るとすべえよ、折角勘定もしたもんだからよ、俺ら大層（た

勘次「どうしてこれだけ使いきれものんか」

勘次「どうだ、少し悪いのか」

p. 37

勘次「蒟蒻はお品のものだから、銭はみんなお前にやっておこう」
お品「勘次さん案内売れたわねえ。まああと大分残ってるんでしょうか」
勘次「そんなにはないな。もうこれだけじゃ、また出るほどのことでもないだろうよ」
勘次「菜は畑へ置きつばなしたつたかな」
お品「ほんとにさうだつたわねえ。遅れちやつたわねえ。私忘れてたけど大丈夫かしらねえ」
勘次「それじゃ、おれが今からでも車で曳けるだけ曳こう」

p. 39

勘次「お品、卵が欲しいって」
お品「いくらかあつたねえ」
お品「おつう、四五日見ないでいたけど、鶏小屋にも少しあつたでしょう。あがつてみて」

p. 40

お品「掛はいくらでしょう」
商人「十一半さ、近ごろ、どうも安くつてな」
商人「皆掛（みながけ）が四百廿三匁二分だからな、それ」
商人「風袋を引くと四百八匁二分か。どうだ、いくつだ。廿六かな、さうすると一つが」
お品「いくらなの、この風袋は」
商人「十五匁だな」
お品「たいがい十匁じゃないの」
商人「それなら見なさいよ、それ。十五匁だ。おれのは他人のよりも大きいんだからな」
商人「はて、一つ十五匁七分づつだ。粒は小さい方だな」

p. 41

商人「四十六錢八厘六毛三朱となるんだが、これは八厘として貰つてな」
勘次「お品、お前自分でも喰つたらよくないか。いくつでも取つておきなよ」
お品「この金でほかの物買つて食べた方がいいから、これだけはやることにするわよ。せつかく勘定もしたんだから。私大分よく

えそ) よくなつたんだから大丈夫(だえちよぶ)だよ」

勘次「そんなことはいはねえで幾つでも取つて置けよ、癒り際が気を付けねえちやえかねえもんだから」

お品「それぢやちつとも残したものかな」

勘次「そんなぢやねえのとれな」

商人「そんぢやそれ掛けてんべ」

商人「こつちなんぞぢや、後幾らでも出来らあな」

お品「誤魔化しちや厭(や)だぞ」

p. 42

商人「どうしておめえ、此の秤なんざあ検査したばかりだもの一分でも此の通り跳ねたり垂れたりして、どうして飛んだ噺だ」

商人「五十匁一分だな、さうすつと一つ十六匁七分づゝだ、大(え)けえからな」

勘次「塩がくつついてつから塩の目方もあんぞ」

商人「五錢五厘六毛幾らつていふんだ、さうすつと先刻(さつき)のは幾らの勘定だつけな」

お品「四十六錢八厘幾らとか言たつけな」

商人「それぢや差引四十一錢三厘小端(こぼし)か、こつちのおつかさま自分でも商(あきねえ)してつから記憶(おべえ)がえゝやな」

商人「どうしたえ、塩梅(あんべえ)でも悪(わり)いやうだが風邪でも引いたんぢやあんめえ」

お品「うむ、少し悪くつて仕やうねえのよ」

お品「小端は幾らになんでえ」

商人「勘定にや成んねえなどうも、近頃は仕やうねえよ文久錢(せん)だの青錢(あをせん)だのつちうのが薩張出なくなつちやつてな、それから何処へ行つても慥して置くんだ」

お品「又憐寸ぢやあんめえ」

p. 43

商人「こまけ勘定にや近頃憐寸と極めて置くんだが、何処の商人(あきんど)もさうのやうだな」

勘次「酷く安くなつちやつたな、寒く成つち

なつたんだから大丈夫よ」

勘次「そんなこと言わないで、いくつでも取つておけよ。治りぎわが気をつけなくちゃいけないもんだから」

お品「それじゃ、少しでも残しておこうかねえ」

勘次「そんなんじゃないの、とれよ」

商人「それじゃ、それを掛けてみよう」

商人「こちらなんぞじゃ、あといくらでもできるよ」

お品「ごまかしちや、いやよ」

p. 42

商人「どうして、あんた、この秤なんぞは検査したばかりだもの、一分でもこのとおり跳ねたり垂れたりして、どうして飛んだ話だ」

商人「五十匁一分だな。そうすると一つ十六匁七分づつだ。大きいからねえ」

勘次「塩がくつついてるから塩の目方もあるぞ」

商人「五錢五厘六毛いくらつていうんだ。さうすると、さっきのはいくらの勘定だったかな」

お品「四十六錢八厘いくらとか言たわねえ」

商人「それじゃ、さしひき四十一錢三厘ちよつとか。こつちのおかあさんは自分でも商いをしてるから記憶がいいねえ」

商人「どうした。具合がわるいようだが、風でも引いたんじゃないかね」

お品「うん、少しわるくつて困ってるの」

お品「半端はいくらになるの？」

商人「勘定にはならないねえ、どうも。近ごろは仕方ないんだよ、文久錢だの青錢だのつていうのがさっぱり出なくなつちやつてね。だから、どこへ行つてもこうしておくんだ」

お品「またマッチじゃないの」

p. 43

商人「こまかい勘定には近ごろマッチときめておくんだが、どこの商人もそうらしいねえ」

勘次「ひどく安くなつちやつたね。寒くなつ

や保存（もち）がえゝのに却（けえつ）て
安いつちうんだから丸で反対（あべこべ）
になつちやつたんだな

商人「上海がへえつちやぐつと値が下つちや
つてな、あつちぢやどれ程安いもんだかよ、
品が少なえ時に安くなるつちうんだから商
人（あきんど）も儲からねえ」

商人「相場が下げ気味の時にやうつかりすつ
と損物（そんなもの）だかん、なんでも百
姓して穀（こく）積んで置く者が一等だよ、
卵拾（ひろ）ひもなあ、赤痢でも流行（は
や）つて来てな、看護婦だの巡査だの役場
員だのつちう奴等病人の口でもひねつてみ
つしり喰つてごも呉んなくつちや商人（あ
きんど）は駄目だよ」

商人「また溜めて置いておくんせえ」

四

p. 44

お品「口が開（あ）けなく成つて仕やうねえ
よう」

勘次「どうしたんだよ大層（たえそ）悪（わ
り）いのか、朝までしつかりしてろよ」

p. 47

お品「野田へは知らせてくれめえか」

勘次「明日（あした）は屹度（きつと）来る
やうにいつて遣つたよ」

p. 48

勘次「何処が痛いんだ、少しさすらせて見つ
か」

お品「背中が仕やうがねえんだよ」

女「お品さん、おとつゝあ来たよ、確乎（し
つかり）しろよ」

卯平「品どうしたえ、大儀（こは）えのか」

お品「おとつゝあ待つてたよ、俺ら仕やうね
えよ」

卯平「うむ、困つたなあ」

お品「先生さん、わたしや此れでもどうした
ものがせうね」

勘次「どうでせうね先生さん」

医者「まあ大丈夫（だいぢやうぶ）だらうつ
て病人へだけはいつて居たらいゝでせう」

p. 49

勘次「お品、大丈夫（だいぢやうぶ）だとよ、
夫（それ）から我慢して確乎（しつかり）してるとよ」

たら持ちがいいのに、かえつて安いつてい
うんだから、まるで反対になつちやつたん
だな」

商人「上海ものが入つたらずつと値がさがつ
ちやつてね。向こうじゃどのくらい安いも
のなのかねえ。品が少ないときに安くなる
つていうんだから商人ももうからない」

商人「相場が下げ気味の時には、うっかりす
ると損するからねえ。なんといつても百姓
をして穀を積んでおく者が一番だよ。卵拾
いもなあ、赤痢でもはやってきてな、看護
婦だの巡査だの役場員だのつていう奴らが
病人の口でもひねつて、しつかり食つてで
もくれなくつちや商人はだめだよ」

商人「また、ためておいておくんせえ」

四

p. 44

お品「口があげなくなって仕方がないよう」

勘次「どうしたんだ。ひどく悪いのか。朝ま
でしつかりしてろよ」

p. 47

お品「野田へ知らせてくれない？」

勘次「あしたはきつと来るやうにいつてやつ
たよ」

p. 48

勘次「どこが痛いんだ。少しさすらせてみる
か」

お品「背中が苦しくて仕方がないのよ」

女「お品さん、おとうさんがきたよ。しつかり
してよ」

卯平「品、どうした。苦しいのか」

お品「おとうさん、待つてたよ。私つらくて
仕方がないの」

卯平「うん、困つたなあ」

お品「先生さん、わたしはこれでもどんな具
合いなんでしょうねえ」

勘次「どうでしょうね、先生さん」

医者「まあ大丈夫（だいぢやうぶ）だらうつて病人にだけは言
つていたらいいでしよう」

p. 49

勘次「お品、大丈夫（だいぢやうぶ）だつてよ。だから我慢し
てしつかりしてろつて」

お品「それでも俺ら明日（あす）の日までは
とつても持たねえと思ふよ。本当に俺ら大
儀（こは）いゝなあ」

お品「勘次さん此処に居てくろうよ」

勘次「おうよ、こゝに居たよ、何処へも行（ゆ
き）やしねえよ」

お品「勘次さん」

勘次「怎的（どう）したよ」

お品「おとつゝあ、俺らとつてもなあ」

お品「おつう汝（われ）はなあ、よきもなあ」

お品「勘次さん、俺（おら）死んだらなあ、
棺桶へ入れてくろうよ……」

p. 50

お品「後（うしろ）の田の畔（くろ）になあ、
牛胡頰子（うしぐみ）のどこでなあ」

お品「風呂敷（ふるしき）、／＼」

p. 51

卯平「勘次もかせえて知らせやがればえゝの
に」

p. 56

女「どうしたつけまあ、酷く棺桶がぐらぐら
したんぢやなかつたつけゝえ」

女「其筈だんべな、後が心配（しんぺえ）で
仕やうねえ仏はあゝえに動（いご）くんだ
つちぞおめえ」

女「勘次さんこと欲しくつて後へ残してくの
が辛（つれ）えんだごつさら」

女「そんだがよ、余（あんま）り欲しがられ
つと遂（しめえ）にや迎（むけえ）に来て
連れ行（ゆ）かれつとよ」

女「おゝ厭（や）だ俺（お）ら」

女「連れてつてくろつちつたつておめえ等こ
た迎（むけえ）に来るものもあんめえな」

女「お品さんも可惜（あつたら）命をなあ」

女「本当（ほんとう）だ他人（ひと）のやら
ねえこつてもありやしめえし」

女「風邪引いたなんてか、今度（こんだ）の
風邪は強（つえ）えから起きらんねえなん
て、しらばつくてな」

女「死ぬ者が貧乏なんだよ」

女「そんだがお品さんは自分のがばかりぢや
ねえつちんぢやねえけ」

女「さうだとよ、大（え）けえ声ぢやゆはん
ねえが、五十銭（ごくわん）とか八十銭（は
ちくわん）とか取つて他人（ひと）のがも

お品「それでも、私、あしたまではとても持
たないと思うよ。ほんとうに私苦しいなあ」

お品「勘次さん、ここにいてよ」

勘次「ああ、ここにいるよ。どこへも行きや
しないよ」

お品「勘次さん」

勘次「どうした」

お品「おとうさん、私とつてもねえ」

お品「おつう、お前はなあ、よきもなあ」

お品「勘次さん、私が死んだらね、棺桶へ入
れてくださいね……」

p. 50

お品「うしろの田のあぜにね、うしぐみのと
こでね」

お品「ふるしき、ふるしき」

p. 51

卯平「勘次も急いで知らせやがればいいの
に」

p. 56

女「どうしたんだい。ひどく棺桶がぐらぐら
したんぢやなかつた？」

女「そのはずでしょうよ。あとが心配で仕方
がない仏は、ああいうふうに動くんだつて
いうのよ、あんた」

女「勘次さんが欲しくつて後へ残していくの
がつらいんでしょう」

女「だけどさ、あんまり欲しがられると、し
まいには迎えにきて連れていかれるんだつ
て」

女「ああいやだ、私」

女「連れてつてくれたつて、あんたなんか
迎えに来るものもないでしょう」

女「お品さんもせつかくの命をなあ」

女「本当だ、他人のやらないことでもありや
あしないのに」

女「風ひいたなんて。今度の風は強いから起
きられないなんて、しらばつくてなあ」

女「死ぬ者が貧乏なんだよ」

女「だけども、お品さんは自分のだけぢやな
いっていう話ぢやない？」

女「そうだつてさ。大きな声ぢやいえないけ
ど、五十銭とか八十銭とか取つて他人のも
やったんだつて」

行(や)つたんだとよ

p. 57

女「八十銭(はちくわん)づゝも取つちやおめえ、女の手ぢやたえしたもんだがな、今度(こんだ)自分で死んちまあなんて、行(や)んねえこつたなあ」

女「罪作つた罰(ばつ)ぢやねえか」

女「そんなことゆつて、今出た仏のことをおめえ等、とつゝかれつから見ろよ」

女「さうえ処(とこ)他人(ひと)に見られたらどうしたもんだえ」

女「見てやあしめえな」

女「俺ら見てえな婆(ば)あはどうぞで此れから娶(よめ)にでも行(い)くあてがあるんぢやなし、構あねえこたあ構あねえがな」

五

p. 60

勘次「どうでもおめえの腹だから好きにした方がえゝやな」

お品「それでも、俺(おれ)がにも困んべな」

p. 61

お品「只かうしてぐづ／＼して居ても仕やうあんめえな」

勘次「俺もさうゆはれても困つから、おめえ好きにしてくろよう」

p. 65

村人「仕事は何でも牝鶏(めんどり)でなくつちや甘(うま)く行(い)かねえよ」

卯平「外聞(げえぶん)曝(さら)しやがつて」

p. 66

卯平「どうでもわしはようがすからえゝ塩梅(あんべい)に極(き)めておくんなせえ」

p. 67

女「腹減つたら此処(こゝ)にあんぞ」

卯平「此の野郎こんな忙(せは)しい時に転がり込みやがつてくたばる積でもあんべえ」

p. 68

お品「勘次さん悪く思はねえでくろようよ、俺(おら)悪くする積はねえが、仕やうねえからよ」

p. 69

卯平「子奴等(こめら)が困るといへばどう

p. 57

女「八十銭づつも取つたら、あんた、女の手じゃたいしたもんだけど、今度自分で死んでしまうなんて、やらないことだねえ」

女「罪作つた罰じゃないの」

女「そんなこと言つて、今出た仏のことを、あんたたち、とりつかれるからみなさい」

女「そういうところを人に見られたらどうなるの」

女「見てやししないでしょ」

女「私みたいな婆は、どうせこれから嫁にでも行くあてがあるじゃなし、構わないことは構わないけどね」

五

p. 60

勘次「どうでもお前の腹だから好きにした方がいいやね」

お品「それでも、私も困るでしょう」

p. 61

お品「ただこうしてぐずぐずしていても仕やうないでしょう」

勘次「おれもそういわれても困るから、お前の好きにしてくれよ」

p. 65

村人「仕事は何でも雌鳥でなくちやうまいかないよ」

卯平「恥をさらしやがつて」

p. 66

卯平「わしはどうでもいいですから、適当にきめてください」

p. 67

女「おなががすいたらここにあるよ」

卯平「この野郎こんないそがしい時にころがりこみやがつて、くたばるつもりなんだろう」

p. 68

お品「勘次さん悪く思わないでね、私悪くするつもりはないけど、仕方ないんだから」

p. 69

卯平「子どもたちが困るつていえば、どうに

でも仕ざらによ、仕ねえでどうするもんか」
勘次「そんぢや、おとつゝあ俺（おれ）行（い）つ来（く）つから」
卯平「おつかあが見（め）えんだかも知んねえ、さうら明るく成つた。汝（わ）りや姉（ねえ）に抱かさつてんだ。可怖（おつかねえ）ことあるもんか」

六

p. 75
卯平「さう疑ぐるならわしは預かりますめえ」
男「まあ其麼（そんな）ことゆはねえで折角（しやくかく）のことに、勘次さんも悪い料簡（りょうかん）でしたんでもなかんべえから」

p. 76
勘次「おとつゝあ居て呉れたなあ」
与吉「まんま」
おつぎ「そんぢや爺（ぢい）が砂糖（さとう）でも嘗（あじ）めろ」
卯平「おつぎみんなでも嘗めさせろ、さうして汝（われ）も嘗めつちめえ、おとつゝあ稼（かせ）えで来たから汝等（わつら）も此れからよかんべえ」

p. 77
卯平「明日（あした）だつてえゝのに」
卯平「勘次等懐（なつか）はよかつぺ」

p. 78
勘次「おとつゝあ、俺（お）らえゝ所（ところ）なもんぢやねえ、やつとのことで逃（に）げるやうにして来たんだ、あんな所へなんざあ決して行くもんぢやねえ、とつても駄目（だめ）なこつた、俺（おら）も懲（おこ）りつちやつたよ」
卯平「うむ、さうかなあ」
卯平「どうで俺ら余計（よけい）者（もの）だ、居（い）やしねえからえゝや、幾（いく）ら持（も）つてたつて構（かま）やしねえ」

p. 79
勘次「なあ、おつかあは居ねえんだぞ、おつかあが乳房（ちつこ）欲（ほ）しがんねえんだぞ」

p. 81
勘次「そんなに可怖（おつか）な（おつか）びつくりやんぢやねえかうすんだ」
おつぎ「それでもおとつゝあ、俺（おら）がにやさういにや出来（でき）ねえんだもの」
勘次「そんな料簡（りょうかん）だから汝等（わつら）駄目（だめ）」

でもしなけりや。しないでどうするもんか」
勘次「それじゃ、おとうさん、おれは行（い）つてくるから」

卯平「おつかあが見（め）えるのかもしれない。さうら明るくなつた。お前（まへ）はおねえさんに抱（か）かれてるんだ。こわいことなんかあるものか」

六

p. 75
卯平「さう疑ぐるならわしは預かりませんよ」
男「まあそんなこといわないで、せつかくのことだから。勘次さんも悪い料簡（りょうかん）でしたんでもないだろうから」

p. 76
勘次「おとうさん、いてくれたなあ」
与吉「うまうま」
おつぎ「それじゃ、おじいさんの砂糖（さとう）でもなめな」
卯平「おつぎ、みんなでもなめさせろ。さうしてお前（まへ）もなめてしまえ。おとうさんがかせいで来たから、お前（まへ）たちもこれからいいだろう」

p. 77
卯平「あしただつていいのに」
卯平「勘次は懐（なつか）はいいだろう」

p. 78
勘次「おとうさん、おれはいいなんてもんぢやない。やつとのことで逃（に）げるようにして来たんだ。あんなところへなんぞ、けっしていくもんぢやない。とてもだめだ。おれもこりちやつたよ」
卯平「うん、さうかなあ」
卯平「どうせおれは余計（よけい）者（もの）だ。いやしないからいいや。いくら持（も）つてたつて、かま（かま）いやしない」

p. 79
勘次「なあ、おつかあさんはいないんだぞ。おつかあさんのおっぱい、ほしがらないんだぞ」

p. 81
勘次「そんなにおつかあなびつくりやるんぢやない。こうするんだ」
おつぎ「それでもおとうさん、私（わたし）にはさういうふうにはできないんだもの」
勘次「そんな料簡（りょうかん）だからお前（まへ）はだめなんだ。」

だ、本当にやつて見る積でやつて見ろ」

p. 82

おつぎ「えんとして居ろ、動(いご)くんちやねえぞ動(いご)くとぼかあんと堀の中さ落(おつ)こちつかんな、そうら蛙(けえる)ぼかあんと落こつた。動くなあ、此処に棒あつた、そうら此(これ)でも持つてろ、泣くんちやねえぞ、姉(ねえ)は此の田ン中に居(ゐ)んだかんな、泣くとおとつゝあにあつぷつて怒(おこ)られつかんな」

与吉「姉(ねえ)よう」

勘次「構あねえで置け、耕(うな)つてあつちへ行つてからにしろ」

勘次「泣くな、今姉(ねえ)が後から来らあ」

おつぎ「よきはどうしたんだ」

p. 83

おつぎ「姉(ねえ)は泥だらけで仕やうあんめえな、汚れてもえゝのかよきは」

おつぎ「どうした、蛙奴(けえるめ)居ねえか、この棒でばた／＼と叩(はた)いてやれ、さうしたら痛(いて)えようつて蛙奴が泣くべえな、泣くな蛙だよう、よきは泣かねえようつてなあ」

おつぎ「おとつゝあ、あつちへ行(え)つちやつた、姉も行かなくつちやなんねえ、おとつゝあに怒られつかんな、又えんとして居ろ」

勘次「かせえてやれ、何してんだ、えゝ加減にしろ」

おつぎ「それ見ろな怒られつから、そら此処にえゝものが有つた」

p. 84

おつぎ「おうい」

おつぎ「沸いたぞう」

おつぎ「どうしたんでえ、よきは」

p. 85

おつぎ「はあ引つ懸けんちやねえぞ大変(たえへん)だかんな」

おつぎ「それでもよきは糸切つちまつたんだもの」

おつぎ「俺らこんなに肉刺(まめ)出つちやつたんだよ」

女「ほんによな、痛かつぺえなそりや、そん

本当にやつてみるつもりでやつてみる」

p. 82

おつぎ「じーとして、動くんじゃないよ。動くとぼかあんと堀の中へ落ちるからね。そうら蛙ぼかあんと落こちた。動くんじゃないよ。ここに棒があつた。そうらこれでも持つてな。泣くんじゃないよ。おねえさんは、この田んぼにいるんだからね。泣くとおとうさんにこらつてしかられるからね」

与吉「おねえちゃん」

勘次「かまわないでおけ。うなつてあつちへ行つてからにしろ」

勘次「泣くな。今おねえさんがあとからくるよ」

おつぎ「よきはどうしたの」

p. 83

おつぎ「おねえさんは泥だらけで仕方ないでしょ。よごれてもいいの、よきは」

おつぎ「どうした。蛙はいないか。この棒でばたばたとたたいてやれ。そうしたら痛いようつて蛙が泣くでしょう。泣くのは蛙だよう、よきは泣かないようつてなあ」

おつぎ「おとうさん、あつちへいつちやつた。おねえさんも行かなくつちや。おとうさんにおこられるからね。またじーとしてなさい」

勘次「急いでやれ。何してるんだ。いいかげんにしろ」

おつぎ「それ見なさい、おこられるから。そら、ここにいいものがあつた」

p. 84

おつぎ「おうい」

おつぎ「わいたよう」

おつぎ「どうしたの、よきは」

p. 85

おつぎ「もう引っかけるんじゃないよ、大変だから」

おつぎ「だって、よきは糸切つちまつたんだもの」

おつぎ「私、こんなにまめが出ちやつたんだよ」

女「ほんとにねえ、痛いでしょうねえそれは。」

でもおつかあが居ねえから働かなくつちや
なんねえな」
おつぎ「おつかあのねえものは厭（や）だな」

p. 86

女「おつう等だつて今に善（え）えこともあ
らな、そんだがおつかど無くつちや衣物（き
もの）欲しくつても此ばかりは仕やうがね
えのよな」

おつぎ「此の肉刺（まめ）はとがめめえか」

勘次「何でとがめるもんか」

おつぎ「しく／＼すんな」

勘次「液汁（みづ）出したばかりにやちつた
痛（えて）えとも、その代（けえし）すぐ
癒（な）つから」

勘次「肉刺（まめ）なんぞ出たらば出たつて
おとつゝあげいふもんだ、他人（ひと）の
げなんぞ見せたりなにつかするもんぢやね
え、汝等（わつら）なんにも知らねえから
仕やうねえ、田耕（たうね）え始まりにや
おとつゝあ等見てえな手だつてかうえに出
んだか見ろ。それ痛えの我慢しい／＼行
（や）りせえすりや固まつちあんだ」

p. 87

勘次「おつかど無くなつて困んな汝（われ）
ばかしぢやねえんだから」

勘次「身上（しんしやう）の為だから汝も我
慢するもんだ、見ろ汝等（わつら）処（と
こ）ぢやねえ、武州の方へなんぞ遣られて
泣き抜いてるものせえあら」

おつぎ「武州つちやどつちの方だんべ」

勘次「あつちの方よ、汝（われ）が足ぢや一
日にや歩けねえ処（ところ）だ」

おつぎ「遠いんだな、其処へ行つたらどうす
んだんべ」

勘次「機織りするものもあれば百姓するもの
あんのよ」

おつぎ「機教（をさ）れぢやよかんべな」

勘次「何でえゝことあるもんか、家（うち）
へなんざあ滅多に来（き）られやしねえん
だぞ、そんで朝から晩迄みつしら使あれて、
それ処（どこ）ぢやねえ病気に成つたつて
余程（よつぼど）でなくつちや葉書もよこ
させやしねえ」

それでもおかあさんがいないから働かなく
つちやならないねえ」

おつぎ「おかあさんのないものは、いやだな
あ」

p. 86

女「おつうなんかだつて、今にいいこともあ
るよ。だけどおかあさんがいなくつちや、
着物がほしくつても、こればかりは仕方な
いねえ」

おつぎ「このまめは、膿まないかしら」

勘次「なんで膿むもんか」

おつぎ「しくしくするなあ」

勘次「水を出したすぐあととは少しは痛いとも。
そのかわり、すぐ治るから」

勘次「まめなんか出たら出たつておとうさん
に言うんだよ。他人になんか見せたりする
もんぢやない。お前はなんにもしらないか
ら仕方がない。田んぼをたがやす最初には、
おとうさんみたいな手だつて、こんなに出
るんだからみろ。それを、痛いのを我慢し
いしいやりさえすれば、かたまってしまう
んだ」

p. 87

勘次「おかあさんがいなくなつて困るのは、
お前だけじゃないんだから」

勘次「財産のためだからお前もがまんするも
んだよ。みろ、お前なんかどころぢやない、
武州の方へなんかやられて泣きぬいてるも
のさえあるんだ」

おつぎ「武州ってどつちの方なの」

勘次「あつちの方さ。お前の足じゃ一日では
歩けないところだ」

おつぎ「遠いのね。そこへいったらどうする
の」

勘次「機織りするものもあれば百姓するもの
もあるのさ」

おつぎ「機が教われるんなら、いいでしょう
ねえ」

勘次「何でいいことがあるもんか。家へなん
かめつたにこれやしなないんだぞ。それで
朝から晩までしつかり使あれて、それど
ころぢやない、病気になつたつてよほど悪く
ならなけりや葉書もよこさせやしなない」

おつぎ「そんぢや、さうえ処（とこ）へ行つちやひでえな、逃げて来ること出来ねえんだんべか」

勘次「直ぐ捉めえられつちあからそんなに遁げられつかえ」

おつぎ「巡査に捉まんだんべか」

勘次「さうなもんか、巡査でなくつたつて遁げ出せば直ぐ捉めえるやうに人が番してんのよ、なあ、そんでもなくつちや遠くの者ばかり頼んで置くんだもの仕やうあるもんか」

p. 88

おつぎ「そんでも厭（や）だつちつたらどうすんだんべ」

勘次「厭（や）だなんていつた位（くれえ）ひでえとも立金（たてきん）しなくつちやなんねえから」

おつぎ「どういにすんだんべそら」

勘次「そらなあ、幾ら勤めたつて途中で厭だからなんて出つちめえば、借りた丈の給金はみんな取つくる返（け）えされんのよ、なあ、それから泣き／＼も居なくつちやなんねえのよ」

おつぎ「そんぢや俺らさうえ処（とこ）へ行かねえでよかつたつね」

勘次「そんだから汝等（わつら）こた遣りやしねえ。汝こと奉公にやれば其の錢（ぜね）で俺ら借金も無くなるし、よきことだつて軽業師（かるわざ）げでも出しつちめえばそれこそ楽になつちあんだが、おつかゞ無くつちや辛（つれ）えつて後で泣かれんの厭（や）だから俺ら土（ち）囓（かち）つてもそんな料簡は出さねんだ」

おつぎ「おとつゝあ、奉公すれば借金なくなんだんべか」

勘次「おつかせえ居（え）れば汝ことも奉公に出して、おとつゝあ等もえゝ錢（ぜね）捉（つか）めえんだが、おつかゞ無くなつておとつゝあだつて困つてんだ、それから汝だつて奉公に行つた積で辛抱するもんだ、なあ、俺ら汝等（わつら）げみじめ見せてえこたあ有りやしねえんだから」

p. 89

勘次「さあ、飯（おまんま）出来たぞ」

p. 90

おつぎ「それじゃ、そういうところへ行つたらひどいわねえ。逃げて来ることできないんでしょうか」

勘次「すぐつかまえられるから、そんなに逃げられるもんか」

おつぎ「巡査に捉まるんでしょうか」

勘次「そうじゃないさ。巡査でなくつたつて逃げ出せばすぐ捉まえるやうに人が番してのさ。なあ、そうでもしなくつちや遠くの者ばかり頼んでおくんだもの、仕方あるもんか」

p. 88

おつぎ「それでもいやだつて言つたら、どうするんでしょう」

勘次「いやだなんて言つたらひどいよ。立金しなけりゃならないんだから」

おつぎ「どんなにするの、それは」

勘次「それはね、いくら勤めたつて途中で嫌だからって出てしまえば、借りただけの給金はみんな取りかえされるのさ。なあ、だから泣き泣きもいなくちゃならないのさ」

おつぎ「それじゃ、私、そういうところへ行かなくてよかつたわねえ」

勘次「だから、お前をやりはしない。お前を奉公にやれば、その金でおれは借金もなくなるし、よきだつて軽業にでも出してしまえば、それこそ楽になつてしまうんだが、おかあさんがいなくてつらいつて後で泣かれるのがいやだから、おれは土をかじつても、そんな料簡はおこさないんだ」

おつぎ「おとうさん、奉公すれば借金なくなるんでしょうか」

勘次「おかあさんさえいれば、お前も奉公に出して、おとうさんもいい金をつかめるんだが、おかあさんがいなくなつて、おとうさんだつて困つてんだ。だからお前だつて奉公に行つたつもりで辛抱するんだよ。なあ、おれもお前たちにみじめな思いをさせたくなかないんだから」

p. 89

勘次「さあ、ご飯ができたぞ」

p. 90

勘次「此のざまはどうしたんだ、こんなことで生計（くらし）が出来つか」

勘次「大概（てえげえ）解り相なもんぢやねえか、こんなざまぢや種ばかりしやつて仕やうありやしねえ」

男「勘次さんどうしたもんだいまあ、其麼（そんな）荒つべえことして」

男「おつぎ泣かねえでさあ起きて仕事しろ、おとつゝあげは俺謝罪（あやま）つてやつかんなあ、与吉（よきち）が泣（ねえ）てら、さあ行つて見さつせ」

p. 91

男「お袋もねえのにおめえいゝ加減にしろよ、可哀想（かあいさう）ぢやねえか、そんなことしておめえ幾つだと思ふんだ、さう自分の気のやうに出来るもんぢやねえ、仏の障（さはり）にも成んべぢやねえか」

女「能くなあ、おつうはよきこと面倒見んな、女の子は斯うだからいゝのさな、直ぐ役に立つかな」

女「おつぎはどうしたんでえ、今夜ひどく威勢（あせえ）悪（わり）いな」

勘次「先刻（さつき）俺に打（ぶ）つとばされたかんでもあんべえ」

女「何でだつべなまあ、おめえそんなに仕ねえで面倒見てやらつせえよ、此れがおめえ女（おんな）つ子でもなくつて見さつせえ、こんな小（ちひせ）えの抱（だけ）えて仕やうあるもんぢやねえな」

p. 92

女「さうだともよ、こらおつうでも無くつちや育たなかつたかも知んねえぞ、それこそ因果見なくつちやなんねえや、なあおつう」

おつぎ「俺（おら）がとこちつともこら離んねえんだよ仕やうねえやうだよ本当（ほんたう）に」

女「今ぢや、まるつきしおつかのやうな気がしてんだな、屹度」

勘次「おつう、手ランプ持つて来て見せえ、汝（われ）げ見せるものあんだから」

勘次「汝（われ）げ此（これ）遣んべと思つて持つて来たんだ。此んでもなよ、おつかが地糸で織つたんだぞ、今ぢや糸なんぞ引くものなあねえが、おつか等（ら）毎晩のやうに引いたもんだ、紺もなあ能うく染まつ

勘次「このざまはどうしたんだ。こんなことで暮らしができるか」

勘次「だいたい解りそうなものじゃないか。こんなざまぢや種ばかりいって仕方ありません」

男「勘次さん、どうしたんだい、まあ。そんな荒つぽいことして」

男「おつぎ、泣かないでさあ起きて仕事しろ。おとうさんにはおれがあやまってやるからな。与吉が泣いてるよ。さあ、行つて見なさい」

p. 91

男「お袋もいないのに、お前いい加減にしろよ。かわいそうじゃないか。そんなことしてお前、いくつだと思ふんだ。そう自分の思いのままにできるもんぢやない。仏の障りにもなるだろうよ」

女「よくねえ、おつうはよきの面倒をみるね。女の子はこうだからいいのよ。すぐ役に立つからねえ」

女「おつぎはどうしたの。今夜はひどく元気がないね」

勘次「さつき、おれにぶんなぐられたからだろうよ」

女「何でだろうね、まあ。あんた、そんなにしないで面倒見てやりなさいよ。これが、あんた、女の子でなかったら、こんな小さいのかかえて仕方がないじゃないの」

p. 92

女「さうだともさ。これはおつうでなかったら育たなかつたかもしれないよ。それこそひどい目にあうよ。ねえ、おつう」

おつぎ「私のところ、ちつともこれは離れないんだよ。仕方がないんだよ、ほんとうに」

女「今ぢや、まるつきりおかあさんのような気がしてるんだね、きっと」

勘次「おつう、手ランプ持つてきてみなさい。お前に見せるものがあるんだから」

勘次「お前にこれをやろうと思つて持つて来たんだ。これでもなあ、おかあさんが地糸で織つたんだぞ。今ぢや糸なんぞ引くものはいないが、おかあさんなどは毎晩のやうに引いたもんだ。紺もなあ、よく染まつ

てつから丈夫だぞ、おつかは幾らも引つ掛ねえつちやつたから、まあだまるつきり新しいやうだ見ろ、どうした手ランプまつとこつちへ出して見せえまあ」

p. 93

勘次「ちつたあ黴臭くなつたやうだが、それでも此位（このくれえ）ぢや一日（いちんち）干せば臭（くさ）えな直つから」

勘次「どうした、それでも汝りや気につつか、おつかゞ物はみんな汝がもんだかんな、俺ら汝（わ）ツ等がだとなりや幾ら困つたつて、はあ決して質になんぞ置かねえから、大事（でえじ）にして汝（われ）能うく蔵つて置いたえ」

おつぎ「俺（おら）がにや此んぢや引きじるやうぢやあんめえか」

おつぎ「蔵つて置いて、俺らいまつと大（え）か く成つてから着べかな」

勘次「どうでも汝（われ）がもんだから汝が好きにしろな」

勘次「汝（われ）うっかりして、そうれ燃えつちまあぞ」

七

p. 98

勘次「えゝ、篋棒（べらぼう）、一日（いちんち）の手間鍛冶屋へ打（ぶ）つ込んぢあなくつちやなんねえ」

勘次「わし行つて来あんすから、此等（こつら）こと見てゝおくんなせえ」

勘次「他（ほか）へは行くんぢやねえぞ、えゝか、よきは泣かさねえやうにしてんだぞ」

鍛冶「随分荒（あれ）えことしたと見（め）えつけな、俺らも近頃になつて此の位（くれ）えな唐鍛減多打（ぶ）つたこたあねえよ」

鍛冶「こんだこさ大丈夫だ、先（せん）にやどうして罅（ひゞ）なんぞいつたけかよ」

鍛冶「柄が折つちよれねえうちは動（いご）きつこねえから」

鍛冶「身体（からだ）の割にしちや図無（づね）えな」

p. 100

勘次「どうするんだね」

女「此れ干して置いて燃（も）すのさ」

るから丈夫だぞ。おかあさんはそんなに着なかつたから、まだまつたく新しいやうだ。見ろ、どうした、手ランプをもつとこつちへ出して見なさい」

p. 93

勘次「少しは、かびくさくなつたやうだが、それでもこのくらいなら一日干せば、くさいのはなおるから」

勘次「どうだ。それでもお前は気にいつたか。おかあさんのものはお前のものだからな。おれはお前のものとなれば、いくら困つたつて、もう決して質になんぞおかないから、大事にして、お前はよくしまつておきなさい」

おつぎ「私にはこれじゃ引きずるようじゃないかしらね」

おつぎ「しまつておいて、私、もっと大きくなってから着ようかな」

勘次「どうにでも、お前のものだからお前の好きにしろよ」

勘次「お前、うっかりして、そら、もえてしまふぞ」

七

p. 98

勘次「ええ、べらぼうな、一日の手間賃を鍛冶屋へほうりこまなけりやならない」

勘次「わしは行つてきますから、この子どもたちの様子をみておくんなさい」

勘次「よそへは行くんぢやないぞ、いいか、よきは泣かさないようにしてるんだぞ」

鍛冶「随分あらいことをしたと見えるなあ、おれも近ごろになつてこれほどの唐鍛はめつたに打つたことはないよ」

鍛冶「今度こそは大丈夫だ、まえには、どうしてひびなんかはいつたのかな」

鍛冶「柄が折れないうちは動きつこないから」

鍛冶「からだの割には大きいな」

p. 100

勘次「どうするんだね」

女「これをほしておいて燃やすのよ」

勘次「どうしても斯う成つちやべろ\燃えて飽気なかんべえね」

女「赤(あけ)え灰に成つてな、火も弱(よ)えのさ、それでも籠篋買あよりやえゝかな、松籠篋だちつたつてこつちの方へ来ちや生で卅五把だの何だのつて、ちつちえ癖にな、俺らやうな婆(ばゝあ)でも十把(ば)位(ぐれえ)は脊負(しよ)へんだもの、近頃ちや燃(もう)す物が一番不自由(ふじよう)で仕やうねえのさな」

勘次「松籠篋で卅五把ちや相場はさうでもねえが、商人(あきんど)がまるき直すんだから小さくもなる筈だな」

女「さうだごつさらよなあ、そりやさうとおめえさん何処だね」

勘次「俺ら川向(かはむかう)さ」

女「そんぢや燃(もう)す木は有つ処(とこ)だね」

p. 101

女「たいした唐鍬(か)だが余つ程(ほど)すんだつべな」

勘次「さうさ今打(ぶ)たせちや三十掛(さんじふがけ)は屹度(いど)だな」

女「三十掛(さんじふがけ)つちや幾(いく)らすごつさら、目方もしつかり掛(か)んべな」

勘次「一貫目(いっかんめ)もねえがな」

女「おういや、俺(俺)らにや引(ひ)つたゝねえやうだ、おめえさん自分で使(つか)あのけまあ、何(なに)にしたごつさらよ此(こ)んな道具(どうぐ)なあ」

勘次「毎日(まいにち)木根(きね)つ子(こ)起(た)してたんだが、唐鍬(か)のひつ痛(いた)めつちやつたから直し来た(きた)処(とこ)さ」

女「そんぢやおめえさん燃(もう)す物(もの)にや不自由(ふじう)な(な)しでえゝな」

p. 104

勘次「何処(どこ)でも見た(みた)方が(が)よ(よ)うが(が)す、わ(わ)しは決(決)して運(運)んだ覚(覚)えなんぞ(ぞ)ねえから」

巡査(じゆんさ)「雨(あめ)で困(こ)つた(た)な、勘次(かんとし)は大分(おほい)勉強(べんきやう)する相(あ)だ(だ)な」

勘次「へえ」

巡査「大分(おほい)有(あ)る(る)な、此(こ)れは又(また)わ(わ)しの来(き)る(る)まで動(うご)かしちや(や)な(な)ら(ら)ない(ない)から(ら)な」

勘次「此(こ)らわ(わ)しが貰(もら)つて掘(ほ)つた(た)んで(で)が(が)す(す)から(ら)何(なに)処(ところ)と(と)何(なに)処(ところ)つて(つて)穴(あな)つ(つ)子(こ)ま(ま)で(で)ち(ち)や(や)ん(ん)と(と)分(わ)つ(つ)て(て)る(る)で(で)す(す)から(ら)」

勘次「どうしてもこうなつちや、べろべろ燃えて、あつけないだろうね」

女「赤い灰(あせ)になつてね、火(か)もよ(よ)わ(わ)いの(の)さ。そ(そ)れ(れ)で(で)も(も)そ(そ)だ(だ)を(を)買(か)う(う)よ(よ)り(り)は(は)い(い)い(い)か(か)ら(ら)ね。松(ま)そ(そ)だ(だ)だ(だ)と(と)い(い)つ(つ)た(た)つ(つ)て(て)、こ(こ)つ(つ)ち(ち)の(の)方(かた)へ(へ)き(き)た(た)ら(ら)、生(なま)で(で)卅(さん)五(ご)把(ば)だ(だ)の(の)何(なに)だ(だ)の(の)つ(つ)て(て)、ち(ち)い(い)さ(さ)い(い)く(く)せ(せ)に(に)、私(わたし)み(み)た(た)い(い)な(な)婆(ば)で(で)も(も)十(じゅう)把(ば)ぐ(ぐ)ら(ら)い(い)は(は)し(し)よ(よ)え(え)る(る)ん(ん)だ(だ)も(も)の(の)。近(き)ごろ(ろ)じ(じ)や(や)燃(も)やす(やす)も(も)の(の)が(が)一(いち)番(ばん)不(ふ)自(じ)由(ゆう)で(で)仕(し)方(かた)な(な)いの(の)さ」

勘次「松(ま)そ(そ)だ(だ)で(で)卅(さん)五(ご)把(ば)じ(じ)や、相(あ)場(ば)は(は)そ(そ)ん(ん)な(な)で(で)も(も)な(な)い(い)け(け)れ(れ)ど(ど)、商(あ)人(にん)が(が)し(し)ば(ば)り(り)直(な)す(す)ん(ん)だ(だ)か(か)ら(ら)小(こ)さ(さ)く(く)も(も)な(な)る(る)は(は)ず(ず)だ(だ)な」

女「そ(そ)う(う)な(な)ん(ん)で(で)し(し)ょう(う)ね(え)、そ(そ)れ(れ)は(は)そ(そ)う(う)と(と)、お(お)前(まへ)さ(さ)ん(ん)は(は)ど(ど)こ(こ)だ(だ)ね」

勘次「お(お)れ(れ)は(は)川(か)向(むか)う(う)こ(こ)う(う)さ」

女「そ(そ)れ(れ)じ(じ)や(や)燃(も)やす(やす)木(き)は(は)あ(あ)る(る)と(と)こ(こ)ろ(ろ)だ(だ)ね」

p. 101

女「す(す)ご(ご)い(い)唐(か)鍬(か)だ(だ)が(が)、よ(よ)ほ(ほ)ど(ど)す(す)る(る)ん(ん)だ(だ)ら(ら)う(う)ね(え)」

勘次「そ(そ)う(う)さ(さ)ね(え)、今(いま)作(つく)ら(ら)せ(せ)た(た)ら(ら)三十(さんじふ)掛(がけ)は(は)た(た)し(し)か(か)だ(だ)な」

女「三十(さんじふ)掛(がけ)つ(つ)て(て)ど(ど)の(の)く(く)ら(ら)い(い)す(す)る(る)ん(ん)だ(だ)ら(ら)う(う)。目(め)方(かた)も(も)大(おほ)分(ぶん)重(おも)い(い)ん(ん)だ(だ)ら(ら)う(う)ね」

勘次「一(いっ)貫(かん)目(め)は(は)な(な)い(い)が(が)ね(え)」

女「あ(あ)ら(ら)ま(ま)あ、私(わたし)に(に)は(は)も(も)ち(ち)上(あ)げ(げ)ら(ら)れ(れ)ない(ない)み(み)た(た)い(い)だ。お(お)前(まへ)さ(さ)ん(ん)は(は)自(じ)分(ぶん)で(で)使(つか)う(う)の(の)か(か)い(い)ま(ま)あ。ど(ど)う(う)す(す)る(る)ん(ん)で(で)し(し)ょう(う)ね、こ(こ)ん(ん)な(な)道(どう)具(ぐ)を(を)ね」

勘次「毎(まい)日(にち)木(き)の(の)根(ね)こ(こ)を(を)起(た)こ(こ)し(し)て(て)る(る)ん(ん)だ(だ)が(が)、唐(か)鍬(か)の(の)ひ(ひ)つ(つ)を(を)痛(いた)め(め)ち(ち)や(や)つ(つ)た(た)か(か)ら(ら)直(な)し(し)に(に)き(き)た(た)と(と)こ(こ)ろ(ろ)さ」

女「そ(そ)れ(れ)じ(じ)や(や)お(お)前(まへ)さ(さ)ん(ん)は(は)燃(も)やす(やす)物(もの)に(に)は(は)不(ふ)自(じ)由(ゆう)な(な)し(し)で(で)い(い)い(い)ね(え)」

p. 104

勘次「ど(ど)こ(こ)で(で)も(も)見(み)た(た)方(かた)が(が)い(い)い(い)で(で)す(す)よ。わ(わ)し(し)は(は)決(決)して(して)運(運)んだ(だ)覚(覚)え(え)なん(なん)ぞ(ぞ)ない(ない)ん(ん)だ(だ)か(か)ら(ら)」

巡査「雨(あめ)で(で)困(こ)つ(つ)た(た)な。勘次(かんとし)は(は)大(おほ)分(ぶん)が(が)ん(ん)ば(ば)つ(つ)て(て)い(い)る(る)そ(そ)う(う)だ(だ)な」

勘次「へえ」

巡査「大(おほ)分(ぶん)あ(あ)る(る)な。こ(こ)れ(れ)は(は)、ま(また)わ(わ)し(し)が(が)来(き)る(る)ま(ま)で(で)動(うご)かし(し)ち(ち)や(や)い(い)け(け)ない(ない)か(か)ら(ら)な」

勘次「こ(こ)れ(れ)は(は)、わ(わ)し(し)が(が)も(もら)つ(つ)て(て)掘(ほ)つ(つ)た(た)ん(ん)で(で)す(す)か(か)ら(ら)。ど(ど)こ(こ)と(と)ど(ど)こ(こ)つ(つ)て(て)穴(あな)ま(ま)で(で)ち(ち)や(や)ん(ん)と(と)分(わ)か(か)つ(つ)て(て)る(る)ん(ん)で(で)す(す)か(か)ら(ら)」

巡查「そんなことはどうでもいゝんだ、動かすなといつたら動かさなけりやいゝんだ」
巡查「櫟の根が大分あるやうだな」

p. 105

おつぎ「おとつゝあ」
おつぎ「そんだから俺ら持つて来んなつてゆつたのに」
おつぎ「おとつゝあ、どうしたもんだべな」

勘次「俺ら旦那に見放されちや、逆（とつて）も助かれめえ」

おつぎ「おとつゝあ、それぢや旦那げ謝罪（あやま）つたらどうしたもんだんべ」

勘次「そんなことゆつたつて、聴くか聴かねえか分るもんか」

おつぎ「南のおとつゝあげでも頼んで見たらどうしたもんだんべ」

勘次「汝等（わつら）頼まなくつたつてえゝから」

おつぎ「そんぢやおとつゝあ、櫟の根つ子せえなけりやえゝんだんべか」

勘次「そんだつて汝（われ）は駐在所に見られつちやつたもの仕やうあるもんか」

p. 106

おつぎ「おとつゝあ」
おつぎ「俺ら櫟根つ子うつちやつたぞ」

巡查「此りや櫟がもつと有つた筈ぢやないか
勘次はどうかしやしないか」

巡查「勘次、それぢや此れを持つて跟いて来るんだ」

巡查「草刈箆でも何でもいゝ、此れを入れて後から跟いて」

勘次「へえ、何処まで持つて行くんでがせう」

p. 107

巡查「何処までゝもいゝんだ」
内儀「勘次、お前まあそれを置いて此処へ掛けて見たらどうだね」

内儀「品物は此だけなんでしたらうか」
巡查「此の位のものらしいやうでしたな、案外少かつたんですな」

内儀「さうでございますか」
内儀「どうしたね勘次、恙うして連れて来（こ）られてもいゝ心持はすまいね」

内儀「こんなことでお前世間が騒がしくて仕

巡查「そんなことはどうでもいいんだ。動かすなといつたら動かさなけりやいいんだ」

巡查「くぬぎの根が大分あるやうだな」

p. 105

おつぎ「おとうさん」
おつぎ「だから私持つて来るなつて言ったのに」

おつぎ「おとうさん、どうしたらいいんでしょうね」

勘次「おれは旦那に見放されちや、とても助からないだろう」

おつぎ「おとうさん、それぢや旦那にあやまつたらどうでしょうねえ」

勘次「そんなこと言つたつて、聴くか聴かないか分かるものか」

おつぎ「南のおとうさんにでも頼んで見たらどうでしょうねえ」

勘次「お前は頼まなくつたつていいから」

おつぎ「それぢやおとうさん、くぬぎの根っこさえなけりやいいんでしょうか」

勘次「だつてお前、駐在所に見られちやつたもの、仕方あるもんか」

p. 106

おつぎ「おとうさん」
おつぎ「私、くぬぎの根っこ、すてちやつたわよ」

巡查「これは、くぬぎがもつとあつたはずぢやないか。勘次はどうかしやしないか」

巡查「勘次、それぢやこれを持つてついて来るんだ」

巡查「草刈箆でも何でもいい。これを入れて後からついて」

勘次「へえ、どこまで持つて行くんでしよう」

p. 107

巡查「どこまででもいいんだ」
内儀「勘次、お前まあそれを置いて、ここへ腰掛けて見たらどうだね」

内儀「品物はこれだけでしたでしょうか」
巡查「これくらいのものらしいやうでしたな。案外少かつたんですな」

内儀「さうでございますか」
内儀「どうしたね勘次、こうして連れてこられても、いい心持はしないだろうね」

内儀「こんなことでお前、世間が騒がしくて

やうがないのでね、私の処（ところ）でも
本当に困つて畢ふんだよ」

内儀「これから屹度やらないなら今日の処だ
けは大目に見て戴いて警察へ連れて行かれ
ないやうに伺つて見てあげるがね、どうし
たもんだね」

p. 108

勘次「何卒（どうぞ）はあ、決してやりませ
んから、へえお内儀さんどうぞ」

内儀「如何（いかに）なもんでござんせうね
これは」

巡查「さうですなあ」

巡查「どうだ勘次、以来慎めるか、此の次に
こんなことが有つたら枯枝一つでも赦さな
いからな、今日はまあこれで帰れ、その櫟
の根は此処へ置いて行くんだぞ」

巡查「そんなもの此の庭へ置けといふんぢや
ないんだ、置く処（ところ）は知つてるん
だろう、解らない奴だな、それうっかりし
ないで足下（あしもと）を気をつけるんだ」

勘次「よき泣かねえで帰（け）えれ」

おつぎ「おとつゝあ、どうしたつけ」

勘次「それでもまあ大丈夫になった、櫟根つ
子なくつて助かった」

おつぎ「俺ら昨日（きのう）は重たくつて
酷かつたつけぞ、其の所為か今日は肩痛（い
て）えや」

p. 109

勘次「俺（おら）こゝで居なくなつちや汝等
（わつら）も大変（たえへん）だつけな」

勘次「おつう、汝（われ）もこれからお針に
いけつかんな、そら此れ持つて行（え）ぐ
んだ、おつかゞ持つてた古いのなんざあ外
聞（げえぶん）悪くつて厭だなんていふか
ら、此んでもおとつゝあ等酷（ひで）え銭
（ぜね）で買って来たんだぞ、それから善
えだの悪（わり）いだのつて膨れたり何つ
かすんちやねえぞ、なあ」

勘次「よき汝（われ）はおとつゝあが側に居
るんだぞ、えゝか、姉（ねえ）は此（これ）
から汝が衣物（きもの）拵（こせ）えんで
お針に行くんだかな、聴かねえと酷（ひ
で）えぞ」

p. 110

しようがないのでね。私のところでも本当
に困ってしまうんだよ」

内儀「これからきつとやらないなら、きょう
のところだけは目に見ていただいて、警
察へ連れて行かれないやうに、うかがって
みてあげるがね。どうしたもんだね」

p. 108

勘次「どうかもう、けっしてやりませんから。
へえ、おかみさん、どうぞ」

内儀「どんなものでございましょうかね、こ
れは」

巡查「さうですなあ」

巡查「どうだ勘次、以後つつしめるか。この
次にこんなことがあつたら枯枝一つでもゆる
さないからな。きょうはまあ、これで帰
れ。そのくぬぎの根はここへ置いて行くん
だぞ」

巡查「そんなもの、この庭へ置けというんじ
ゃないんだ。置くところは知ってるんだろ
う。解らない奴だな。それ、うっかりしな
いで足もとを気をつけるんだ」

勘次「よき、泣かないで帰れ」

おつぎ「おとうさん、どうだった」

勘次「それでもまあ大丈夫になった。くぬぎ
の根っこがなくて助かった」

おつぎ「私、きのうは重たくてひどかったわ
よ。そのせいかきょうは肩が痛いわ」

p. 109

勘次「おれがここでいなくなつたら、お前た
ちも大変だったな」

勘次「おつう、お前もこれからお針に行ける
からな。そら、これを持つていくんだ。お
かあさんが持つてた古いのなどは外聞（げえぶん）が悪
くつて嫌だなんていうから、これでもおと
うさんはたいへんな金で買って来たんだ
ぞ。だからいいの悪いのつて、ふくれたり
なんかするんじゃないぞ、なあ」

勘次「よき、お前はおとうさんの側にいるん
だぞ。いいか、おねえさんはこれからお前
の着物をこしらえるんで、お針に行くんだ
からな。聴かないとひどいぞ」

p. 110

おつぎ「俺らいつその日なんぞ無(ね)え方がえ、さうでせえなけりや出てえた思はねえから」

勘次「どうにか俺らだつて成つから」

おつぎ「お針出来なくつちや仕様ねえなあ」

勘次「お針にでも何でも遣れる時にや遣つから、奉公にでも行つて見ろ、幾つに成つたつて碌なこと出来るもんか、十六位(ぐれえ)ちや貧乏人はまあだ行けねえたつて仕方があるもんか、さう汝見てえに瘦虱(やせじらみ)たかつたやうにしつきりなし云ふもんぢやねえ」

p. 111

おつぎ「おとつゝあはそんだつて奉公にでも行つてるものげは家(うち)で拵(こせ)えてやんだんべな」

勘次「そんだつてなんだつて遣れつ時でなくつちや遣れねえから」

勘次「春にでもなつたらやれつかも知んねえから」

おつぎ「井戸へ落(おつこと)した櫓根つ子は梯子掛けても取れめえか」

勘次「何故(なぜ)そんなこといふんだ」

おつぎ「そんでも可惜(あつたら)もんだからよ」

勘次「汝(われ)自分で梯子掛けて這入(へえ)んのか」

おつぎ「俺ら可怖(おつかねえ)から厭(や)だがな」

勘次「そんなこといふもんぢやねえ、又拘引(つゝてか)れたらどうする、そんな時は汝(われ)でも行(え)くのか」

八

p. 112

おつぎ「堀の側へは行(え)ぐんぢやねえぞ、衣物(きもの)汚すと聴かねえぞ」

p. 114

与吉「姉(ねえ)よう見ろよう」

おつぎ「汝(われ)あんまりうっかりしてつかんだわ」

p. 115

おつぎ「泣かさねえでよきことも連れてつてくろうな」

与吉「よう」

おつぎ「私は、いっそ、もの日なんぞない方がいい。そうでせえなけりや出たいとは思われないから」

勘次「おれだけでも、どうにかなるから」

おつぎ「お針ができなくちやあ仕方ないねえ」

勘次「お針にでも何でも、やれる時にはやるから。奉公にでも行つてみる、いくつになつたつて、ろくなことできるもんか。十六くらいじゃ貧乏人はまだ行けなくたつて仕方あるもんか。そうお前みたいに、やせじらみがたかつたやうに、ひつきりなしに言うもんぢやない」

p. 111

おつぎ「おとうさんは、だつて、奉公にでも行つてるものには、家でこしらえてやるんでしように」

勘次「そうだつてなんだつて、やれる時でなくちややれないから」

勘次「春にでもなつたら、やれるかも知れないから」

おつぎ「井戸へ落とたくぬぎの根っこは、はしご掛けても取れないでしょうか」

勘次「なぜそんなこと言うんだ」

おつぎ「だつて、もつたいないから」

勘次「お前、自分ではしご掛けて入るのか」

おつぎ「私はこわいからいやだけど」

勘次「そんなこと言うもんぢやない。また連れてかれたらどうする。その時はお前でも行くのか」

八

p. 112

おつぎ「堀のそばへは行くんぢやないよ。着物よごすと許さないよ」

p. 114

与吉「おねえちゃん、見なさいよう」

おつぎ「お前、あんまりうっかりしてるからだよ」

p. 115

おつぎ「泣かさないで、よきも連れてつてくさいね」

与吉「ようよう」

おつぎ「そんなに焼けめえな、そんぢや姉(ねえ)は構あねえぞ」

p. 116

おつぎ「そうら見ろ、大(え)けえ姿(なり)していふこと聴かねえから」

与吉「姉(ねえ)よ、よう」

おつぎ「汝熱えぞ」

おつぎ「よきげ此煮てやつぺか、砂糖でも入(せえ)たら佳味(うま)かつぺな」

与吉「煮てくろうよう」

おつぎ「おゝ痛えまあ」

勘次「其麼(そんな)もの塩でども茹(ゆ)でてやれ」

勘次「砂糖だなんて、黙つてれば知らねえでるもの、泣かれたらどうすんだ、砂糖だの醤油だのつてそんなことしたつ位(くれえ)なんぼ損だか知れやしねえ、おとつゝあ等そんな錢(ぜね)なんざ一錢(ひやく)だつて持つてねえから、塩だつて容易なもんぢやねえや、そんな余計なもの何になるもんぢやねえ」

p. 117

おつぎ「どうしたもんだんべまあ、ちつき怒(おこ)んだから」

勘次「そんだつて、おとつゝあ等そんな処(とこ)ぢやねえから」

p. 122

女「何ちう、おつかさまに似て来たこつたかな、歩きつきまでそつくりだ」

女「雀斑(そばかす)がぼち／＼してつ処(とこ)までなあ」

女「勘次さん訳のねえもんだな、まあだ此間(こねえだ)だと思つてたのにな、嫁にやつてもえゝ位(くれえ)ぢやねえけえ、お品さんもおめえ此位(このくれえ)の時ぢやなかつたつけかよ」

p. 123

女「勘次さんどうしたい、えゝ塩梅(あんべえ)のがあるんだが後(あと)持つてもよかねえかえ」

勘次「まゝよう、まゝようでえ、まゝあな、ら、ぬう」

p. 126

女「どうしたえ、勘次さん彼女(あれ)げ焦(こが)れたんぢやあんめえ、尤も年頃は

おつぎ「そんなに焼けるはずないじゃない。それじゃ、おねえさんはかまわないわよ」

p. 116

おつぎ「そうら見なさい。大きいなりして、いうこと聴かないから」

与吉「おねえさん、よう」

おつぎ「お前熱いわよ」

おつぎ「よきにこれ煮てあげましょうか。砂糖でも入れたら、うまいでしょうねえ」

与吉「煮てよう」

おつぎ「おお痛いまあ」

勘次「そんなもの、塩ででもゆでてやれ」

勘次「砂糖だなんて、黙つていれば知らないでいるものを、泣かれたらどうするんだ。砂糖だの醤油だのつて、そんなことしたらどんなに損になるかしれやしない。おとうさんは、そんな錢なんか一錢だつて持つていないから。塩だつて簡単に手に入るものじゃないよ。そんな余計なもの、何になるもんか」

p. 117

おつぎ「どうしたんでしょう、すぐおこるんだから」

勘次「だつて、おとうさんは、それどころじゃないんだから」

p. 122

女「何て、おかあさんに似てきたことかねえ。歩きつきまでそつくりだ」

女「そばかすがぼちぼちしてるところまでねえ」

女「勘次さん、訳のないもんだねえ、まだこの間だと思つてたのにね。嫁にやつてもいいくらいじゃないかい。お品さんもお前、このくらいの時ぢやなかつたかねえ」

p. 123

女「勘次さん、どう? いいぐあいのあるんだけど、あとを持つてもいいんじゃない?」

勘次「ままよ、ままよで、ままな、ら、ぬう」

p. 126

女「どう、勘次さん、あの女にこがれたんぢやないの。もっとも年ごろは似合いだから、

持つゝけだから連つ子の一人位（ぐれえ）
は我慢も出来らあな、そんだがあれつ切り
来（き）なくなつちやつて困つたな

九

p. 130

与吉「こらどうしたんでえおとつゝあ」
勘次「弄（いぢ）んぢやねえ」
おつぎ「佳味（うめ）えな」
勘次「メ粕で作つからよ」
おつぎ「旦那ぢや、メ粕許り使あんだつぺか」

勘次「甘藷（さつま）喰（くつ）たなんてい
ふんぢやねえぞ」

p. 131

与吉「俺らあ家（うち）で甘藷くつたなんて
ゆはねえんだ」
男「何故（なぜ）ゆはねえんだ」
与吉「何故でもだ」
男「そんぢやえゝ、其（その）甘藷取つ返（け
え）しつちまあから」
与吉「それでも俺家（おらぢ）のおとつゝあ
甘藷喰つたなんてゆふんぢやねえぞつて云
（ゆ）つたんだ」
男「よき家（へ）の甘藷うめえか」
与吉「旦那のがはうめえつて云（ゆ）つた
んだ」
男「おとつゝあ云（ゆつ）たのか姉（ねえ）
云（ゆつ）たのか」

p. 132

与吉「姉ぢやねえ、おとつゝあだ」
男「おとつゝあは家（うち）で甘藷くつて旦那
のがうめえつちつたのか」
与吉「さうなんだわ」

一〇

p. 134

男「癖になつから、みつしら懲りらかした方
がえゝ、俺方（おらほう）は畑が五月蠅く
つて本当に仕やうねえ」
男「見せしめに行（や）つ時にや、こつびど
く行（や）んなくつちやえかねえよ」
男「村落（むら）の内よく見せえすりや直
（すぐ）に分らな、蜀黍（もろこし）なん
ぞ何処へ隠せるもんぢやねえ」

連れ子の一人くらいは我慢もできるわね。
だけど、あれつきりこなくなちやつて困つ
たわね」

九

p. 130

与吉「これはどうしたの、おとうさん」
勘次「いじるんじゃない」
おつぎ「おいしいね」
勘次「メ粕で作るからさ」
おつぎ「旦那のところじゃ、メ粕ばかり使う
んでしょうか」
勘次「サツマイモ食つたなんて、言うんじや
ないよ」

p. 131

与吉「おれは家でサツマイモ食つたなんて言
わないんだ」
男「なぜ言わないんだ」
与吉「なぜでもだ」
男「それじゃいい。そのサツマイモ取り返し
ちやうから」
与吉「それでも、うちのおとうさん、サツマ
食つたなんて言うんじやないぞつて言つた
んだ」
男「よきの家のサツマイモ、うまいか」
与吉「旦那の家のほうまいって言つたんだ」
男「おとうさんが言つたのか。おねえさんが
言つたのか」

p. 132

与吉「おねえさんじゃない。おとうさんだ」
男「おとうさんは家でサツマイモ食つて旦那
の方がうまいって言つたのか」
与吉「そうなんだ」

一〇

p. 134

男「癖になるから、みっちりこらした方がい
い。この辺は畑が荒らされて本当にしよう
がない」
男「見せしめにやる時には、こつびどくやら
なくちやいけないう」
男「村の内よく見せえすりや、すぐに分かる
わな。モロコシなんぞ、どこへ隠せるもん
じやない」

p. 135

巡査「数が分つたらもう後へ手を付けてもえよ」

男「わしも行つて見あんせう、自分の畑のは一目見りや分りあんすから」

巡査「此りやどうするんだい」

男「はてな」

男「蜀黍粒（もろこしつぶ）落（おっこ）つてあんすぞ、さうすつと此処へ引つ懸けたの又何処へか持つてつちやつたな」

男「此の粒でがすから、わしがに相違ありあせん、彼等（あつら）がな此んなに出来つこねえんですから、それ証拠にや屹度自分の畑のがな一つ穂（ぼ）でも伐（と）つちやねえから見さつせ、わしが此んでもゞ粕（しめかす）入（せ）えて作つたんでがすから」

p. 136

巡査「勘次、此の竹はどうしたんだな」

勘次「わし此らあ、蜀黍（もろこし）伐（き）つて引つ懸けべと思つたんでがす」

巡査「うむ、此の粒の零（こぼ）れたのはどうしたんだ、蜀黍（もろこし）なんだらう此れは」

勘次「へえ、なに、わしが一攫み引つ抜（こ）いて来て見たの打棄（うつちや）つたんでがした」

男「これだからわし云つたんでがす、ねえそれ、此の粒でがすかんね」

男「稲（いね）つ束担ぐんだつて、わし等口へ出しちや云（ゆ）はねえが、ちゃんと知つてんでがすから、さう云（い）つちや何だが其麼（そんな）ことするもなあ、極つたやうなもんですかんね」

巡査「もう解つたから、それぢや自分の仕事をするがいい、後（のち）にわしが申報書を拵（こしら）へて来て遣るから、それへ印形（いんぎやう）を捺せばそれで手続は済むんだからな」

p. 137

男「そんぢや、わし蜀黍（もろこし）隠して置く処（どこ）見出（めつけ）あんすから、屹度有んに極つてんだから」

男「今度（こんだ）こさあ、捕縛（つかま）つちや一杯（いつぺえ）に引つ喰らあんだ

p. 135

巡査「数が分かつたら、もうあとへ手をつけてもいい」

男「わしも行つて見ましよう。自分の畑のは一目見れば分かりますから」

巡査「これは何に使うんだい」

男「はてな」

男「モロコシのつぶが落つちちてますぞ。そうするとここへ引つ掛けたのを、またどこかへ持つてつちやつたな」

男「この粒ですから、わしのに相違ありません。あいつのは、こんなにできっこないんですから。その証拠には、きつと自分の畑のは穂一つも切つてないから見てください。わしのは、これでもゞ粕入れて作つたんですから」

p. 136

巡査「勘次、此の竹はどうしたんだな」

勘次「わし、これは、モロコシ切つて引つ掛けようと思つたんです」

巡査「うん、この粒のこぼれたのは、どうしたんだ。モロコシなんだらう、これは」

勘次「へえ、なに、わしが一つかみしごいてきてみたのを、うつちやつたんでした」

男「これだから、わしは言つたんです。ねえそれ、この粒ですからね」

男「稲束担ぐんだつて、わしら、口へ出しちや言わないが、ちゃんと知つてるんですから。そう言つちや何だが、そんなことをするものは、決まつたやうなもんですからね」

巡査「もう解つたから、それぢや自分の仕事をするがいい。あとでわしが申報書をこしらえてきてやるから、それへはんこを押せば、それで手つづきは済むんだからな」

p. 137

男「それぢや、わしは、モロコシを隠しておくところを見つけますから。きつとあるに決まつてるんだから」

男「今度こそは、つかまつちや重い罪をくらうんだらう」

んべ」

勘次「おつう俺らとつても今度（こんだあ）

駄目だよ」

勘次「お内儀さん、わしも又間違（まちがえ）しあんしてどうも此れお内儀さん処（とこ）へは鬨（かり）が高くつて何ですが、わし居なくでも成つちや子奴等（こめら）仕やうがありませんから、助かれるもんならわしもはあ…

…」

p. 139

男「泥棒なんぞする奴（やざ）あ、わし大嫌（だいきれえ）ですがから、わし等畑の茄子引んもぎつたんだつてちやんと知つちや居んですがから、いや全くですが、お内儀さん処（とこ）の甘藷（さつま）も盗りあんしたとも、ぐうづら蔓引つこ抜いて打棄つて、いや本当ですが、わしや嘘（ちく）なんざあいふな嫌（きれえ）ですがから、其れ処（どこ）ぢやがあせんお内儀さん、夜伐（き）つて来て、朝つばらに成つたらはあ引つ懸けたに相違（あひだ）ねえつちんですがから、なにわしも筵打（ぶつ）つ掛けた処（ところ）見あんした、筵で分るから駄目（だめ）ですが、いや全く酷（ひで）え野郎（やろう）ですがどうも」

内儀「そりやさうさね、此の前も私（わたし）の処（ところ）で救つて遣つたのにそれに復（ま）たかうなだから、まあ病気（びやま）さね此も、困つたもんだが然しあれを懲役（ちやうやく）に遣つて見た処（ところ）で子供等（こどもら）が泣くばかりだからね、それにまあ本當（ほんとう）いへば一つ村落（むら）に斯うして居るんだから先（さき）が困り切つてる内に勘弁（かんべん）して遣つたと成ると一生（いっせい）先は身（み）がひけて居る道理（道理）だがそれが一杯（いっぱい）の罪（つみ）にでも落（お）して見ると、先では帳消（ちやうしょう）しにでも成つたやうな積（つみ）で居まいものでもなし、さうすると敵（かたき）一人拵（こしら）へて置くやうなものだしね、他人（ひと）に叩（たた）かれたのでは眠（ね）れるが、叩いたのでは眠れないとさへいふんだから、何でも後腹（ごはら）の病（や）めない方が善（い）いやうだがどうだね」

p. 140

男「それでもお内儀さん、わしや卯平（うしへい）ことみじめ見せてんのが他人（ひと）のこつても

勘次「おつう、おれはとつても今度はだめだよ」

勘次「おかみさん、わしも、また間違いをしまして、どうもこれ、おかみさんのところへは敷居（しきい）が高くつて何ですが、わしがいなくなつたら子どもたちが仕方がありませんから、助かるものなら、わしもはあ……」

p. 139

男「泥棒なんぞする奴（やざ）は、わし大嫌（だいきれえ）ですから。わしらの畑のナス引きむしつたのだから、ちゃんと知ってるんですから。いや全くです。おかみさんのところのサツマイモも、とりましたとも。ぐうづら、つる引つこ抜いて、うっちゃって。いや本当です。わしは嘘（ちく）なんぞいうのは、きらいですから。それどころじゃありません、おかみさん。夜切（よきり）つてきて、朝（あ）になつたら、もう引つかけたに相違（あひだ）ないというんですから。なに、わしも、むしろ引つかけたところを見ました。むしろで分かるからだめです。いや全くひどい野郎（やろう）です、どうも」

内儀「そりやさうさね。この前も私のところで救つてやったのに、それにまたこうなんだから、まあ病気（びやま）さね、これも。困つたものだが、しかし、あれを懲役（ちやうやく）にやってみたとこで子どもらが泣くばかりだからね。それにまあ、本當（ほんとう）言（い）え、一つ村（むら）にこうして居るんだから、先（さき）が困りきつてるうちに勘弁（かんべん）してやったとなると、一生（いっせい）先（さき）は氣（き）兼ね（かね）をするわけだが、それが重い罪（つみ）にでも落（お）してみると、先（さき）では帳消（ちやうしょう）しにでもなつたやうなつもりで居るかもしれないし、そうすると、かたきを一人（ひとり）こしらえておくやうなものだしね。人に叩（たた）かれたのでは眠（ね）れるが、叩いたのでは眠れないとさへ言うんだから、何でも後腐（ごふ）れのない方がいいやうだが、どうだね」

p. 140

男「それでもおかみさん、わしは卯平（うしへい）にみじめなようすをさせているのが、人のことで

忌々敷（いめえましい）んでさ、わしや血気の頃から卯平たあ棒組で仕事もしたんですが、卯平はあんでもあれが鼻等育つ時分の事なんぞ思つちや疎末にや成んねえんでがすかんね、それお内儀さん卯平は幾つに成りあんすね、わし等だらなあに、あゝた野郎なんざあ槍でゝも何でも突つ刺（ぶ）しつちあんでがすがね」

内儀「尤もさねそりや、それだが腹の立つ時は憎い奴だと思つても後悔する時が無いともいひないしね、少しのことで二代も三代も仲直りが出来ないやうな実例（ためし）が幾らも世間には有るもんだからね」

内儀「遠くの方へ遣つたなんていつたつげがおりせは又孫が出来た相だね、今度（こんど）のは男だつてそれでも善かつたねえ」

女「はあいさうでござりますよ、お内儀さんの厄介（やつけえ）に成りあんしたつげが、あれも今ぢや大層（たえそう）えゝ塩梅（あんべい）でがしてない、四人目（よつたりめ）漸（やつ）とそんでも男でがすよ、お内儀さんに云（や）あれた時にやわし等もはあ波（しび）れえて居たんでがしたが、身上もあん時かんぢやよくなるしね、兄弟中（きやうでえぢう）で今ぢやりせが一番だつて云（ゆ）つてつ処（とこ）なのせ、お内儀さんあれなら大丈夫（でえぢよぶ）だからつて云（ゆ）つて呉れあんしたつげが婿も心底が善くつてね、爺婆（ぢゝばゝあ）げつて、わし等げ斯うた物遣（よこ）しあんしたよ」

p. 141

内儀「それでも孫抱きには行つたかね」

女「ほんに、わしや今日らお内儀さん処（とこ）さ行（え）くべと思つて居たら、何ちこつたか恠んな騒ぎではあ行くも出来ねえで、わしや昨日帰（けえ）つて来た処（とこ）なのせえ、お内儀さん」

女「うむ、さうだともよ」

男「それぢや、お内儀さん、先刻（さつき）のがなお内儀さんえゝやうに行（や）つて見ておくんせえ」

男「わしや、一剋者（いつこくもの）だからお内儀さん悪く思はねえでおくんせえ」

p. 142

もいまいましいんですよ。わしは血気のころから卯平とは相棒で仕事もしたんですが、卯平はあれでもあいつの嫁さんが育つたときのことなんぞ思つたら、粗末にはできないんですからね。それ、おかみさん、卯平はいくつになりますね。わしなかならなあに、あんな野郎なんぞ槍（やり）でも突き刺（さ）してしまふんですがね」

内儀「もつともね、そりや。だけど腹の立つ時は憎い奴だと思つても後悔する時がないとも言えないしね。少しのことで二代も三代も仲直りができないやうなためしが、いくらも世間にはあるもんだからね」

内儀「遠くの方へやつたなんていつたけれど、おりせはまた孫が出来たそうだね。今度（こんど）のは男だつて、それでもよかつたねえ」

女「はい、そうでござりますよ。おかみさんの厄介（やくわい）になりましたが、あれも今ぢや大層（おほい）よい塩梅（しんばい）でしてね。四人目（よににんめ）目がやつとそれでも男ですよ。おかみさんに言われた時には、私らもう、しぶっていたんですが、財産もあのと看から見ればよくなるしね、兄弟中（けいだいちゆう）で今ぢやりせが一番だつていつてるところなんですよ。おかみさんが、あれなら大丈夫（だいじゆう）だからつて言つてくれましたが、婿（むこ）も心がけがよくてね。爺婆（ぢいばあ）に、わしらにこんなものをよこしましたよ」

p. 141

内儀「それでも、孫抱きには行つたかね」

女「ほんとに、私は、きょうあたり、おかみさんのところへ行こうと思つていたら、何ということか、こんな騒ぎでもう行くこともできないで。私はきのう帰つて来たところなんですよ、おかみさん」

女「うん、さうだとも」

男「それぢや、おかみさん、さっきの話は、おかみさんがいいように、やってみてください」

男「わしは、一剋者（いつこくもの）だから、おかみさん悪く思わないでください」

p. 142

女「どうぞねえお内儀さん」

おつぎ「おとつゝあ」

p. 143

内儀「旦那がまだ帰らないのでね、警察の方(ほう)の断(つ)が出来ないで困(こ)つて居(ゐ)るんだが、どうだねお前(まへ)警察(けいさつ)へ出(で)ても盗(ぬ)らないといひ切(き)れるかね、さうすりや私が始(は)末(まつ)をして遣(や)るがね」

勘次(かんじ)「へえ」

内儀「どうだね」

勘次「わしがにや、とつても持ち切れあんせん」

おつぎ「おとつゝあは何(なに)ちんだんべな」

おつぎ「おとつゝあ」

おつぎ「盗(ぬ)らねえつて云(い)ふ(ゆ)へよ、おとつゝあ」

勘次「それでも俺(おら)、あすこへ出(で)ちや、とつても白(しろ)状(じやう)しねえ訳(わけ)にや行(い)く(ゆ)かねえよ」

内儀「そんな料簡(りょうかん)でなく私は自(じ)分の(ぶん)のが伐(き)つたんですつていへば、そんでいゝやうに始(は)末(まつ)してやるだから」

おつぎ「さう云(い)ふ(ゆ)へせえすりやえゝつちの(の)になあ、おとつゝあは」

p. 144

内儀「さむしくないかい」

おつぎ「大丈夫(だいじゆう)ですよ、お内儀(ないぎ)さん」

内儀「おやもうそつちの方(かた)へ行(い)つたのかい、それぢやあそこをたたくんだよ」

p. 147

男(おとこ)「行(い)く(え)くのかあ」

男「油断(あぶ)なんねえ」

内儀「どうしたい、大(お)変(へ)遅(おそ)かつたね」

おつぎ「お内儀(ないぎ)さんいふ通(とお)にしあんしたよ」

内儀「其(その)の蜀黍(しよこし)はもろこしは何(なに)処(ところ)へ遣(や)つたかい」

おつぎ「わたしやどうしてえゝか知(し)んねえから川(か)へ持(も)つて行(い)つて打(う)棄(す)る(ちや)りあんした」

p. 148

内儀「さうかい、能(よ)く行(い)く(や)つて来(き)たね、まあ上(う)がりな」

内儀「どうしたんだえ、おつぎはまあ、其(その)

女(め)「どうぞねえ、おかみさん」

おつぎ「おとうさん」

p. 143

内儀「旦那(だんな)がまだ帰(か)らないのでね、警察(けいさつ)の方(かた)の話(わ)がでできないで困(こ)つて居(ゐ)るんだが、どうだねお前(まへ)、警察(けいさつ)へ出(で)てもとらないと言(い)ひきれるかね。そうすりや私が始(は)末(まつ)をしてやるがね」

勘次(かんじ)「へえ」

内儀「どうだね」

勘次「わしには、とつても辛(こ)抱(ぼ)しきれません」

おつぎ「おとうさんは何(なに)てことなんでしょうねえ」

おつぎ「おとうさん」

おつぎ「とらないつて言(い)いなさいよ、おとうさん」

勘次「それでもおれは、あそこへでたら、とつても白(しろ)状(じやう)しない訳(わけ)には行(い)かないよ」

内儀「そんな料簡(りょうかん)でなく、私は自(じ)分の(ぶん)のを切(き)つたんですつていへば、それでいゝやうに始(は)末(まつ)してやるんだから」

おつぎ「そう言(い)いさえすればいいつていうの(の)になあ、おとうさんは」

p. 144

内儀「さみしくないかい」

おつぎ「大丈夫(だいじゆう)ですよ、おかみさん」

内儀「おや、もうそつちの方(かた)へ行(い)つたのかい、それぢやあそこをたたくんだよ」

p. 147

男(おとこ)「行くのかあ」

男「油断(あぶ)ならない」

内儀「どうしたの。大(お)変(へ)遅(おそ)かつたね」

おつぎ「おかみさんが言(い)うとおりにしましたよ」

内儀「そのモロコシは、どこへやつたの」

おつぎ「わたしは、どうしていいか分からな(い)から、川(か)へ持(も)つて行(い)つてすてちやいました」

p. 148

内儀「さうかい。よくやつてきたね。まあ上(う)がりな」

内儀「どうしたの、おつぎはまあ、その着(き)物(ぶつ)

衣物(きもの)は
おつぎ「本当にまあ」
おつぎ「先刻(さつき)土手さ行(え)く時、堀(ほり)つ子ん処(とこ)へ這つたんですが、其ん時かうえに汚したんでせうよ」
おつぎ「お内儀さん、わたしや飛んだことを仕あんした」
内儀「どうしたんだえ」
おつぎ「わたしや、鎌何処へ遣つちやつたか分んなく仕つちやつたんでさ」
内儀「今夜持つてつたのかえ」
おつぎ「さうなんでさ、わたしや蜀黍(もろこし)打棄(うつちや)つ時まで有つと思つてたら見(め)えねえんでさ、私等家(わたしらぢ)のおとつゝあは道具つちと酷く怒(おこ)んですから」
内儀「草刈鎌の一挺や二挺お前(まへ)どうするもんぢやない、あつちへ廻つて足でも洗つてさあ」

p. 149

男「どうもわし等分署へなんぞ出んな、なんぼにも厭(や)でがすかんね、屹度怒られんでがすからはあ」
内儀「さうだがね、此処まで漸がついて居るんだから此方(こつち)でそれだけのことは仕て呉れなくつちや此れまでのことが水の泡なんだからね」
男「盗らつた上に懲うして暇潰して、おまけに分署へ出て怒られたり何つかすんぢや、こんな詰んねえこたあ滅多ありあんせんかんね、それに書付だつてどうしてえゝんだか分んねえし」
内儀「そりや書付なんぞは、旦那が書いて遣るから心配にや成らないがね」
内儀「どうしたつね」

p. 150

男「髭のこう生えた部長さんだつていふ可怖(おつかね)え人でがしたがね、盗まつたなんて届けしてゝさうして警察へ余計な手間掛けて不埒な奴だなんて呶鳴らつた時にやどうすべかと思つて、そんぢや其の書付持つて帰(けえ)りますべつて云ふべかと思ひあんしたつけ、さうしたら暫く書付見てたつけが此は誰(た)れが書いたつて聞くから、わし等方(ほう)の旦那でがすつ

は」
おつぎ「本当にまあ」
おつぎ「さっき土手へ行くとき、堀のところで滑つたんですが、そのときこんなに汚したんでしようよ」
おつぎ「おかみさん、わたしはとんだことをしました」
内儀「どうしたの」
おつぎ「わたしは、鎌をどこへやつちやつたか分からなくなつたんです」
内儀「今夜持つてつたのかい」
おつぎ「そうなんです。わたしはモロコシを捨てる時までであると思つてたら見えないんですよ。うちのおとうさんは道具つていうとひどく怒るんですから」
内儀「草刈鎌の一挺や二挺、お前、どうするもんぢやない。あつちへ廻つて足でも洗つて、さあ」

p. 149

男「どうも、わしは、分署へなんぞ出るのは、どうにもいやですからね。きつとおこられるんですから」
内儀「そうだけど、ここまで話がついているんだから、こつちでそれだけのことはしてくれなくつちや、これまでのことが水の泡なんだからね」
男「とられた上にこうして暇つぶして、おまけに分署へ出ておこられたりなどするんぢや、こんなつまらないことは、めつたにありませんからね。それに書付けだつてどうしていいか分からないし」
内儀「そりや書付けなんぞは、旦那が書いてやるから心配はいらないがね」
内儀「どうしたね」

p. 150

男「髭のこう生えた、部長さんだつていう、おつかない人でしたがね、盗まれたなんて届けをしていて、そうして警察へ余計な手間をかけて、不埒な奴だ、なんてどなられた時にはどうしようかと思つて、それじゃその書付持つて帰りますつて言おうかと思つたんです。そうしたら、しばらく書付見てましたが、これはだれが書いたつて聞くから、わしの方の旦那ですつて言つたら、

て云つたら、さうかそんぢやよし／＼／帰(けえ)れなんていふもんだからほつと息つきあんした、癩(おこり)落ちたやうでさあはあ、そんだからわし等なんぼにもあゝい処(ところ)へは出んな厭(や)で」

男「そんだが、旦那はたいしたもんでがすね、旦那書いたんだつて云(ゆ)つたらなあ」

勘次「わしもこれからは決して他人の物は塵つ葉一本でも盗りませんからどうぞ」

p. 151

内儀「あれでなか／＼おつぎにも驚いたもんだね」

勘次「はあどうか仕あんしたんべか、お内儀さん」

内儀「どうしたつていふんぢやないが、此の間の晩のことを知ってるかね」

勘次「何でがせうね、お内儀さん」

内儀「夜中にあの蜀黍(もろこし)伐らせたことだがね、実はあの時はね、警察の方が間に合はなければお前に盗らないと何処までもいはして置いて、さうして旦那が帰つてからのことと思つたもんだから、それによお前が白状して畢つても困るし、自分の畑がそつくりして居ても不味(まづ)いからね、それも今に成つちや何もそんなこと仕なくつても善かつたやうなものだが、其の時は私もどうかしてと思つてね、それだがおつぎが度胸のあるのぢや私も喫驚(びつくり)したよ」

勘次「へえわしもおつぎに聞きあんした、鎌一挺見(め)えねえもんだからどうしたつちつたら、お内儀さんいふから伐つたんだなんて、それでも鎌は笹(さ)の中に有りあんしたつけや」

内儀「さうかい、どんな鎌だかおつぎは心配して居たからね」

勘次「なあにはあ、減(へ)つちやつた鎌だから惜しかあねえんですがね」

p. 152

内儀「おつぎのことはそんなことでは無闇に怒らないやうにしなよ、面倒見てね」

勘次「それからわしもお内儀さん、恚(いら)うして独(ひとり)で辛抱(しんぱう)してんですがすが、わし等(わし等)鼻(はな)も死ぬ(しぬ)時にや子奴等(こめら)こたあ心配(しんぺえ)したんですがすがかんね、夫

そうかそれじゃよしよし帰れなんていうもんだから、ほつと息つきました。おこりが落ちたようですよ、もう。だから、わしは、どうにもああいうところへは出るのは厭(や)で」

男「だけど、旦那はたいしたものです。旦那が書いたんだつて言つたらね」

勘次「わしも、これからは決して他人の物は塵つ葉一本でもとりませんから、どうぞ」

p. 151

内儀「あれで、なかなか、おつぎにも驚いたものね」

勘次「はあ、どうかしましたでしょうか、おかみさん」

内儀「どうしたつていうんぢやないが、この間の晩のことを知ってる？」

勘次「何でしょうね、おかみさん」

内儀「夜中にあのモロコシ切らせたことだけど、実はあの時はね、警察の方が間に合わなければ、お前にとらないとどこまでも言わしておいて、さうして旦那が帰つてからのことと思つたもんだから、それによお前が白状してしまつても困るし、自分の畑がそのままでもまずいからね。それも今になつちや何もそんなことしなくつてもよかつたやうなものだが、その時は私もどうかしてと思つてね。しかし、おつぎが度胸のあるのには私もびつくりしたよ」

勘次「へえ、わしもおつぎに聞きました。鎌一丁(いちぢょう)みえないもんだから、どうしたつていつたら、おかみさんが言うから切つたんだなんて。それでも鎌は笹(さ)の中(なか)にありましたよ」

内儀「さうかい。どんな鎌だか、おつぎは心配して居たからね」

勘次「なあにもう、減(へ)つちやつた鎌だから惜しくはないんですがね」

p. 152

内儀「おつぎのことは、そんなことではむやみに怒らないやうにしてよ。面倒見てね」

勘次「だから、わしも、おかみさん、こうして独(ひとり)で辛抱(しんぱう)してんですがすが、わしの女房(にやぼう)も、死ぬ(しぬ)ときには子どもたちのことは心配(しんぺえ)したんですからね。だから、わしも、おつ

(それ) からわしもおつうが行きてえつちもんだからお針にも遣りあんすしね、襷(たすき) なんぞも欲しい、つちもんだからわし等見てえな貧乏人にや余計なものぢやありあんすが赤(あけ) えの買つて遣つたんでがさ、此(これ) さうだことしてお内儀さん処(とこ) へも小作の借(さがり) も持つて来(き) ねえで済まねえんですが、嚙(は) が単衣物(ひてえもの) も質(せ) に入(い) えてたの出して遣つたんですがね、畑(はたけ) へなんぞ出(い) くのや余(あま) り過ぎ物(もの) なんだが、それ一枚(めい) 切りだからわしも構(かま) ねえで見てんのせ、そんだがお内儀さん奇態(きたえ) に汚(よご) しあんせんかんね

内儀「さうだよ、さうして遣れば励(はげ) むが違(ちが) うからね」

内儀「おつぎも能く働(はたら) けるやうに成(な) ったね、それだが此(こ) の間のやうな処(ところ) を見ると死(し) んだお品(しな) が乗(の) り移(うつ) ったかと思(おも) うやうさね」

勘次「わしもはあ、あれがこたあ魂消(たまげ) てつことあんですがね」

内儀「さういつちや何(なに) だがお品(しな) も随分(ずいぶん) お前(まへ) ちや意地焼(いぢや) いて苦勞(くろう) したことも有(あ) るからね」

勘次「へえ、わしやはあ可怖(おつか) なくつて仕(し) やうねえんですから、わし出(い) らんねえ処(ところ) へは嚙(は) ばかり出(い) えて、仕(し) たんでがすから」

p. 153

内儀「さうだつねえ」

内儀「おつぎは心持(こころもち) までお袋(ふくろ) の方(かた) だね、お前(まへ) の姉(あね) がおつたはあいふ性質(しやうせつ) (たち) なのに一つ腹(はら) から出(い) ても違(ちが) ふもんだね」

勘次「わし等姉(あね) はお内儀(うちぎ) さん、碌(ろく) でなしですからね」

内儀「おつたは今(いま) 何処(どこ) に居(い) るね」

勘次「下(しも) の方に居(い) るんですがね、わしは往來(いき) なしでさ、同胞(どうぼう) (きやう) だえ) だたあ思(おも) はねえからつてわし断(こと) ったんでがすから、わし等嚙(は) 死(し) んだ時(とき) だつて来(き) もしねえんですからね、お内儀(うちぎ) さんさうえ者(もの) (もな) あ有(あ) りあんすめえね」

内儀「さうだつねえ」

うが行きたいって言うもんだからお針にもやりますしね。たすきなんぞも欲しい欲しいって言うもんだから、わしらみたいな貧乏人(ひんぱん) には余計(よけい) なものですけど赤(あか) いのを買(か) ってやっただすよ。これ、そんなことしておかみさんとこへも小作(せうさく) の借(かり) も持つてこないですまないんですが、女房(にようばう) の単衣物(たんいぶつ) も質(しつ) に入れてたのを出(い) してやっただすがね。畑(はたけ) へなんぞ出(い) るのはよすぎるものなんだが、それ一枚(めい) きりだから、わしもかまわなくて見てるんですよ。だけど、おかみさん、ふしぎによごしませんからね」

内儀「そうよ、さうしてやれば励(はげ) むが違(ちが) うからね」

内儀「おつぎもよく働(はたら) けるよになつたね。けども、この間のやうなところを見ると、死(し) んだお品(しな) が乗(の) り移(うつ) ったかと思うやうね」

勘次「わしももう、あいつのことでは、たまげてることあるんですがね」

内儀「さういつちや何(なに) だが、お品(しな) も随分(ずいぶん) お前(まへ) のことではいらして苦勞(くろう) したこともあ

るからね」
勘次「へえ、わしはもうこわくつてしようがないんですから。わしが出(い) られないところへは、女房(にようばう) ばかり出(い) ていたんですから」

p. 153

内儀「さうだつねえ」

内儀「おつぎは心持(こころもち) までお袋(ふくろ) の方(かた) だね。お前(まへ) の姉(あね) なのに、おつたはああいうたちなのに、おなじ腹(はら) から出(い) ても違(ちが) うもんだね」

勘次「わしの姉(あね) はおかみさん、ろくでなしですからね」

内儀「おつたは今(いま) どこに居(い) るね」

勘次「下(しも) の方に居(い) ますがね、わしは行き来(いき) なしですわ。兄弟(けいぎ) だとは思(おも) わないからつて、わし断(こと) ったんですから。わしの女房(にようばう) が死(し) んだ時(とき) だつて来(き) もしないんですからね。おかみさん、さういう者(もの) はないでしょうね」

内儀「さうだつねえ」

勘次「わしや、姉にや到頭小作に持つてくべ
と思つてたの一俵ぺてんに掛けられたこと
あんですから、自分のが始末すれば直（す
ぐ）返（けえ）すから持つて行つてそ
れつ切りなんでさ、わし等鼻生きてる頃な
もんだから、鼻とろつぴ催促（せえそく）
に行き\／したんだが、無くつちや遣らん
ねえからつて喧嘩吹つ掛るつちんだから鼻
も忌々敷（えめえがし）がつて居たが先が
不法なんだから駄目でさね、それ処（どこ）
ぢやねえ、盲目（めくら）に成つた自分の
餓鬼の錢（ぜに）せえ騙して叩（はた）く
んだから」

p. 154

内儀「盲目といふのはどうしたんだねそれは」

勘次「野田へ醤油屋奉公に行つてゝ余（あん
ま）り飯食ひ過ぎたの原因（もと）で眼へ
出たなんていふんですが、廿位（はたちぐ
れえ）で潰れつちやつたんでさ、さうした
らそれ打棄つて夜逃げ見てえせまるで、自
分の村落（むら）にだつて居らんなく成つ
たんでがすから」

内儀「さういふことがねえ、能く出来たもん
だね、自分の本当の子をねえまあ、おつた
は酷いといふことは聞いてちや居たがねえ」

勘次「そんだがお内儀さん其盲目（めくら）
奇態（きたえ）で、麦搗でも米搗でも畑耕
（はたけうねえ）でも何でも百姓仕事は行
（や）んでさ、薄ら明りにや見（め）えん
だなんていふんだがそんでも奇態なのせど
うも、そんで極く堅（か）てえもんだから
他人（ひと）にも面倒見られて其の位（く
れえ）だから錢（ぜに）も持つてんでさ、
さうしたら何処で聞いたか来て騙して連れ
てつてね、えゝわしら等姉せお内儀さん」

勘次「盲目（めくら）も有繫（まさか）お袋
だから畸形（かたわ）に成つちや他人（ひ
と）の処（どこ）なんぞよりやえゝと思つ
たんでがせうね、さうしたらお内儀さん盲
目（めくら）が錢（ぜに）叩（はた）いつ
ちやつたら又打棄つて、聞いて見ちや酷で
え嘶（な）のせ本當に、そんな時にや盲目（めく
ら）もわしが処（どこ）へ泣きついて来て、

勘次「わしは、姉にはとうとう小作に持つて
いこうと思つてたのを一俵ぺてんにかけら
れたことがあるんですから。自分のを始末
すればすぐ返すから持つて行つて、そ
れつきりなんですよ。わしの女房が生きて
いるころなもんだから、女房がしょちゅう
催促に行き行きしたんですが、なくちやや
れないからつて喧嘩吹かけるつていうん
だから、女房もいまいまがっていたが、
先が不法なんだから駄目ですわね。それど
ころじゃない、盲になった自分の子どもの
錢さえだましてとるんだから」

p. 154

内儀「盲というのは、どうしたんだね、それ
は」

勘次「野田へ醤油屋奉公に行つててあまり飯
を食ひ過ぎたのがもとで眼へ出たなんてい
うんですが、二十くらいでつぶれちゃつた
んですわ。そうしたら、それをうっちゃつ
て夜逃げみたいなんですよ、まるで。自分
の村にだつていられなくなつたんですか
ら」

内儀「そういうことがねえ、よくできたもの
だね。自分の本当の子をねえ、まあ、おつ
たはひどいということは聞いてはいたがね
え」

勘次「だけどもおかみさん、そのめくらが不
思議で、麦つきでも米つきでも畑耕しでも
何でも百姓仕事はやるんですよ。薄ら明か
りには見えるんだなんていうんだが、それ
でも不思議なんですよ、どうも。それでご
く堅いものだから、ひとにも面倒見られて、
そのくらいだから錢も持っているんです
よ。そうしたら、どこで聞いたか来てだま
して連れてつてね。いい姉ですよ、お内儀
さん」

勘次「めくらも、さすがに母親だから、かた
わになつちや他人のところなんぞよりはいい
と思つたんでしょうね。そうしたらおか
みさん、めくらの錢をとつちやつたら、ま
たうっちゃつて。聞いてみるとひどい話な
んですよ、本當に。その時には、めくらも
わしのところへ泣きついてきて、わしもも
う、二十すぎにもなつて、いくらなんだつ

わしはあ、二十先（はたちさき）にも成
つて幾らなんだつて騙さつるなんて盲目こ
とも忌々敷（えめえましい）やうでがした
が、わしも其ん時や鼻に死なれた当座なも
んだからさう薄情なことも出来ねえと思つ
て、そんでも一晚泊めて、わしも困つちや
居たが穀（こく）もちつたあ遣つたのせ、
わしやお内儀さん鼻おつ殺してからつちも
のは乞食（こじき）げだつて手攫（てづか）
みで物出したこたあねえんでがすかね、
そらおつうげもはあ断つて置くんでがすか
ら、わしやお内儀さん其れ丈は心掛けてん
でがすよ」

p. 155

内儀「さうだともさね、さういふ心掛けて居さ
へすりや決して間違はないからね」

内儀「そりやさうと其（その）盲目（めくら）
はどうしたね」

勘次「村落（むら）に居あんさ、何処つちつ
たつて行き場所はねえんですから、なあに
独りでせえありや却（けえ）つて懐はええ
んでがすから」

内儀「それはまあ、おつたはさうとしても、
それがさ、彦次はどうしたんだね、私もお
つたのことは暫く前に見たつ切だが」

勘次「お内儀さん、夫婦揃つてなくつちや行
（や）れるもんぢやありませんぞ、親爺
だつてお内儀さん自分の女つ子（あまつこ）
女郎（ぢよらう）に売つて百五十両とかだ
つていひあんしたつけがそれ帰（けえ）り
に軍鶏喧嘩（しやもげんくわ）へ引つ掛つ
て、七十両も奪（と）られて来たつちんで
がすから漸にや成んねえですよ、そつから
わしや姉等夫婦のこたあ大嫌（だえきれえ）
なんでさあ」

内儀「本当とは思へないやうなことだね」

p. 156

勘次「お内儀さん本当ですともね、わしあ嘘
（ちく）なんぞお内儀（かみ）げいひあん
せんから」

内儀「そりや本当にや相違ないだらうがね」

勘次「そんだがお内儀さん、其女つ子（あま
つこ）も直（すぐ）遁げて来つちめえあん
したね、今ぢや何とか云つて厭（や）だら

て、だまされるなんて、めくらの奴もいま
ましいようでしたが、わしもそのときは、
女房に死なれた当座なものだから、そう薄
情なこともできないと思って、それでも一
晩泊めて、わしも困つてはいたが穀物も少
しはやったのですよ。わしはおかみさん、
女房を殺してからというものは、こじきに
だつて手づかみで物をやったことはないん
ですからね。それはおつうにも、もう断つ
ておくんですから。わしはおかみさん、そ
れだけは心掛けているんですよ」

p. 155

内儀「さうだとも。そういう心掛けていさえ
すれば決して間違いはないからね」

内儀「そりやさうと、そのめくらはどうした
ね」

勘次「村にいますよ。どこと行ったって行き
場所はないんですから。なあに独りでさえ
あれば、かえつて懐はいいんですから」

内儀「それはまあ、おつたはさうとしても、
それがさ、彦次はどうしたんだね。私もお
つたのことはしばらく前に見たつきりだけ
ど」

勘次「おかみさん、夫婦そろつてなくつちや、
やれるもんじゃありませんぞ。おやじだつ
ておかみさん、自分の娘を女郎に売つて百
五十両とかだつて言いましたが、それを帰
りに軍鶏喧嘩に引つ掛かつて、七十両もと
られてきたつていうんですから、お話にも
ならないんですよ。だからわしや姉たち夫
婦のことは大嫌いなんですわ」

内儀「本当とは思えないやうなことだね」

p. 156

勘次「おかみさん、本当ですとも。わしは、
嘘なんぞ、おかみさんに言いませんから」

内儀「そりや本当にや相違ないだらうがね」

勘次「だけどおかみさん、その女の子もすぐ
逃げて来てしまったんですよ。今じゃ何と
か言つて、いやならかまわないそうすね」

構あねえ相でがすね」

内儀「私もそんなことは知らないが、新聞で騒ぎはあつたやうだつね」

内儀「おつたも見た処（ところ）ぢや体裁がよくてね」

勘次「さうなんでさ、うまいもんだからわしも到頭米一俵損させられちやつて」

内儀「さういつちやお前の姉のこと悪くばかりいふやうだが、舅が鬼怒川へ落ちて死んだなんて大騒ぎしたことが有つたつねえ」

勘次「さうでさ、余つ程に成りあんすがね、ありや鬼怒川へ蚤（のみ）叩（はた）くつて行つてそれつ切りに成つちやつたのせ」

内儀「彦次は実子なんだね」

勘次「え、暫く目が不自由で別に小さく作つて隠居してたんですが、蚤は居た容子なんでがすね、一度なんぞあ畑の側で叩（たて）えたら其処ら通つた人みんなぞよ／＼／偃ひ上られて酷でえ目に逢つちんですから、そんで其処らで叩（たて）えちや仕やうねえからなんて云はれたんでがせうね、それから何でも葦（ござ）持つて鬼怒川さ行く積に成つたんでがすね、鬼怒川までは有繫（まさ）が余つ程ありあんさね、足もとが本当ぢやねえからずんぶらのめつちやつたもんでさ、本当に飽気ねえ嘶で、それお内儀さんわし等姉は他人（ひと）が死骸（しげえ）見付（めつ）けて大騒ぎして知らせに来たら、直（すぐ）はあ死人の衣物（きもの）から始末して掛つたつちんですから」

p. 157

内儀「自分で取つて畢ふ積（つもり）なんだね」

勘次「兄弟等（きやうでえら）げ分けてなんぞあ遣んねえ積（つむり）なんでさね」

内儀「衣物だつて幾らも無いんだらうがね、それにまあどうして川へなんて其麼（そんな）遠くへ葦（ござ）ばかり持つてね、行くうちにや居た蚤もみんな飛んで了ふだらうがね、まあさういのも運（めぐ）り合せだね」

勘次「はあ、耨碌してたんではがすから、余（あ

内儀「私もそんなことは知らないが、新聞で騒ぎがあつたようだったね」

内儀「おつたも見たところじゃ体裁がよくてね」

勘次「そうなんです。うまいもんだから、わしもとうとう米一俵損させられちやつて」

内儀「そういつちやお前の姉のこと悪くばかり言うようだが、しゅうとが鬼怒川へ落ちて死んだなんて大騒ぎしたことがあつたつねえ」

勘次「そうですよ。よほど前になりますがね。あれは鬼怒川へノミをはたくつて行つてそれきりになつちやたんですよ」

内儀「彦次は実子なんだね」

勘次「ええ、しばらく目が不自由で別に小さく作つて隠居していたんですが、ノミは、いたようすなんです。一度なんぞは畑の側で叩いていたら、そこら通つた人みんな、ぞよぞよ這い上がられて、ひどい目にあつたつていうんです。それで、そこらで叩いてはいけなからなんて言われたんでしようね。それでどうやらゴザを持つて鬼怒川へ行くつもりになつたんです。鬼怒川までは、さすがに大分ありますよ。足もとが本当ぢやないから、ずんぶらのめつちやつたもんでさ。本当にあつけない話で。それをおかみさん、わしの姉は、ひとが死骸を見つけて大騒ぎして知らせに来たら、すぐにもう死人の着物から始末して掛かつたつていうんですから」

p. 157

内儀「自分で取つてしまふつもりなんだね」

勘次「兄弟たちに分けてなんぞは遣らないつもりなんです」

内儀「着物だつて、いくらもないんだらうけど。それにまあどうして川へなんて、そんな遠くへゴザばかり持つてね。行くうちにやいたノミもみんな飛んでしまふだらうけど。まあさういのも、めぐりあわせね」

勘次「もう、もうろくしてたんではがすから。あ

ん) まり毫碌しちや厭(や) がられあんす
かんね」

内儀「厭(いや) がられるつてお前そんなものぢやないよ、舅だもの、婿だの娘だのといふものは余計気をつけなくちや成らないものなんだね」

勘次「そりやさうですがね、お内儀さん」

p. 158

内儀「おつたは本当に舅は善くしなかつた相だな、自分等の方の館へは砂糖を入れても舅の方へは砂糖を入れなかつたなんて暫く前に聞いたつけが」

勘次「どうでしたかねそれは」

内儀「そんなに仕なかつたつて幾らも生きやしない老人(としより)のことをな」

内儀「勘次も銭は自分の手から湧(わか)すやうにして辛抱してりや辛いことばかり無いから、何でも人間は子供次第だよ、後で厄介に成らなくちや成らないんだから子供の面倒は見ないな間違だよ」

勘次「お内儀さん変なこと聞くやうですがが帯にする布片(きれ)はどの位(くれえ)有つたらえゝもんでがせうね」

内儀「おつぎにでも締めさせるのかい」

勘次「へえ、今のが古くつて厭(や) だなんて強請(ねだ) れんで、何時でもわし怒(おこる) んですが、お内儀さん処(ところ) へも不義理ばかりしてそんな処(ところ) ぢやねえつて云(ゆ) つて聞かせても、みんな赤(あけ) えの締めてるもんだから欲しくつて仕やうねえんでさ」

p. 159

内儀「さうだね、帯はまあ一丈つていふんだが、其処らの子の締めるのは什麼(どんな) ものだからさね」

勘次「わしやおつうはそれ四尺もあればえゝつちんですがね、それだからわしお内儀さんにでも聞かねえぢや分ねえと思つて」

内儀「さうさ成程、外へ出る処だけ有れば善いんだから、それにや四尺もあつたら沢山だね、斯うこつちばかり付けられね」

勘次「それお内儀さん、両方へ附けんだつて恁(か) ういに縛つて中へたぐめた端(は

ん) まりもうろくしちや、いやがられますからね」

内儀「いやがられるつてお前、そんなものぢやないよ、しゅうとだもの。婿だの娘だのといふものは余計気をつけなくちやならないものなんだよ」

勘次「そりやさうですがね、おかみさん」

p. 158

内儀「おつたは本当にしゅうとにはよくしなかつたそうね。自分等の方の館へは砂糖を入れても、しゅうとの方へは砂糖を入れなかつたなんて、しばらく前に聞いたけれど」

勘次「どうでしたかね、それは」

内儀「そんなにしなかつたつて、いくらも生きやしない年寄りのことを」

内儀「勘次も銭は自分の手から湧かすやうにして辛抱してりや、つらいことばかりじゃないから。とにかく人間は子ども次第よ。後で厄介にならなくちやならないんだから子どもの面倒を見ないのは間違いよ」

勘次「おかみさん、変なこと聞くようですが、帯にする切れはどのくらいあったらいいもんでしようね」

内儀「おつぎにでも締めさせるの？」

勘次「へえ、今のが古くつて嫌だなんてねだるんで、いつでもわしは怒るんですが、おかみさんのところへも不義理ばかりして、そんなところじゃないって言つて聞かせても、みんなが赤いのを締めてるもんだから、欲しくてしようがないんですよ」

p. 159

内儀「さうだね、帯はまあ一丈つていうんだけど、そこらの子の締めるのはどんなものかね」

勘次「うちのおつうは、それが四尺もあればいいつて言うんですがね。だから、わしはおかみさんにでも聞かなくちや分からないと思つて」

内儀「さうさ、なるほど、外へ出るところだけあればいいんだから、それには四尺もあつたら沢山ね。こうこつちばかり付けられね」

勘次「それはおかみさん、両方へ付けるんだつて、このように縛つて中へ丸めた端(は

じ) つ子が赤くなくつちや見つともねえつてね、そんな処(ところ) どうでもよかんべと思ふんだが、尤も其処は一尺でえゝなんて云(いふ) んでさ」

内儀「成程ね、私等今までさういふことにや気が附かなかつたが、結び目も仕事するんだから其麼(そんな) に大きくなくつたつて構はないし、四尺五寸もあれば丸で新しいやうに見えるんだね」

勘次「そんでお内儀さん、どの位(くれえ) したもんでがせうね錢(ぜに) は、たんと出んちやはあ仕やうねえが」

内儀「幾らしもないね、其れ丈ぢや」

勘次「そんでも大凡(おほよそ) まあどの位(くれえ) したもんでがせうね」

内儀「唐縮緬も近頃ぢや廉くなつたから一尺十二三錢位(ぐらゐ) のものかね、上等で十四五錢しかしないだらうね」

p. 160

勘次「さうですが、わしやまた大変(たいへん) 出んだとばかり思つてあんした」

内儀「それも反物に成つてるのを切らしてさうだよ、それからもつと廉くも出来るのさ、村の店なんぞぢや錢ばかりとつて虱(しらみ) が潜り相なのでね」

内儀「さういふ短いのは端布片(はしぎれ) で買うに限るのさ、幾らにもつかないもんだよ、私が近頃出る序もあるから買つて来て遣つても善(い) いよ」

勘次「さうですか、そんぢやお内儀さんどうかさうしておくなせえ、お内儀さんに見て貰(もれ) えせえすりや大丈夫(だえぢようぶ) ですが、なにあに赤くせえありや什麼(どんな) んでも構あねえんですがね」

内儀「一日お前が日傭(ひよう) に来さへすりやそれ丈は出て畢(ひ) ぶから、欲しいといふものなら拵(こしら) へて遣るが善(い) いよ、そりや欲しい筈(はず) おつぎも明ければ十八に成るんだつてね」

勘次「わしに怒らつるもんだから陰(いん) でぐず／云(ゆ) って困んでさ」

勘次「そんぢやまあ善(い) かつた、わし等そんなことあちつとも分(わ) ねえから、夫(それ) からはあお内儀さんに聞いてんべと思つて

が赤くなくつちや見つともないつてね。そんなところ、どうでもいいだろうと思ふんだが、もっともそこは一尺でいいなんて言うんですよ」

内儀「なるほどね。私等今までそういうことにや気がつかかなかつたが、結び目も仕事するんだから、そんなに大きくなくつたつてかまわないし、四尺五寸もあれば、まるで新しいやうに見えるんだね」

勘次「それでおかみさん、どのくらいするんでしょうね、錢(ぜに) は、たくさん出るんじやもう仕方がないが」

内儀「いくらもしないね、それだけじゃ」

勘次「それでもおおよそ、まあどのくらいするんでしょうね」

内儀「唐縮緬も近ごろぢややすくなったから一尺十二三錢ぐらゐのものかね。上等で十四五錢しかしないだらうね」

p. 160

勘次「そうですか、わしはまた大変(たいへん) 出るとばかり思つていました」

内儀「それも反物になつてるのを切らしてさうだよ、だから、もっとやすくも出来るのさ。村の店なんぞぢや錢ばかりとつてシラミ(しらみ) がもぐりそうなのでね」

内儀「そういう短いのは端布片(はしぎれ) で買うに限るのさ、いくらにもつかないもんだよ。私が近頃出る序でもあるから買つてきてやつてもいいよ」

勘次「そうですか、それじゃおかみさん、どうかさうしておくなさい。おかみさんに見てもらいさえすれば大丈夫(だいじょうぶ) ですから。なにあに赤くさえあれば、どんなのでもかまわないんですがね」

内儀「一日お前が日傭(ひよう) に来さえすりや、それだけは出てしまうから、欲しいというものなら、こしらえてやるがいいよ。そりや欲しいはずさ、おつぎも明ければ十八になるんだつてね」

勘次「わしに怒られるものだから、陰(いん) でぐず／云(ゆ) っ言(い) って困るんですよ」

勘次「それじゃまあよかつた。わし等そんなことは少しも分(わ) からないから、だからもうおかみさんに聞いてみようと思つてたんで

たのせ」
内儀「女の子はこれで飾だから他人（ひと）にも見られるからね」

p. 161

勘次「わし等自分ぢや什麼（どんな）襦袢（ぼろ）だつて構あねえが此れで女（あま）つ子にやねえ、わしもこんでお内儀さんに聞く迄にや心配（しんぺえ）しあんしたよ」

—

p. 171

勘次「おつう」

勘次「何してけつかつたんだ」

勘次「さあ云（ゆ）つて見ろ、嘘（ちく）云（ゆ）つたつて知つてつゝお」

勘次「汝（わ）りや何時（いつ）でも何ちつた、おとつゝあげは決して心配（しんぺえ）掛けねえからつて云つたんぢやねえか、そんでも汝りや心配掛けねえのか、掛けねえつちんだら云つて見ろ」

—

p. 174

女「どうえ嫁様だんべな」

女「善（え）え女だんべえな」

女「早く来ればえゝな、俺ら見てえな」

女「白粉（おしろい）付けて来んだな」

p. 175

女「どうしたもんだえ、白粉附けんだんべかとまあ」

女「水白粉持つて来んだか知んねえぞ」

女「只の水見てえな白粉（おしろい）も有（あ）んだつて云（ゆ）つけぞ」

女「俺らお給仕に出なくつちや成んねえか知んねえが、耻かしくつて厭（や）だな」

女「嫁様まつと耻かしかつべな」

女「そんだが俺ら嫁様の衣物（きもの）どういんだか見てえもんだな」

p. 178

男「勘次さん等見てえなゝ、ありや勘定にやへえんねえもんだんべか」

男「勘次さんに聞いて見ろ」

男「其麼（そんな）こと云（ゆ）つたつ位（くれえ）、打（ぶ）ん擲（な）つら箆棒（べらぼう）臭（くせ）え」

すよ」

内儀「女の子はこれで飾だから他人にも見られるからね」

p. 161

勘次「わしは自分ぢやどんなぼろだつてかまわなないが、これで女の子にはねえ。わしもこれでおかみさんに聞くまでは心配しましたよ」

—

p. 171

勘次「おつう」

勘次「何していやがつたんだ」

勘次「さあ言つてみろ。嘘ついたつて知つてゑぞ」

勘次「お前はいつでも何て言つた。おとうさんには決して心配掛けないからつて言つたんじゃないか。それでもお前は心配掛けないのか。掛けないつていうんなら言つてみろ」

—

p. 174

女「どういうお嫁さんだろね」

女「いい女だろね」

女「早く来ればいいな。私見たいな」

女「おしろい付けて来るんだな」

p. 175

女「どういうんだろ。おしろいつけるんだろかって、まあ」

女「水白粉持つて来るかもしれないよ」

女「ただの水みたいなおしろいもあるんだつて言つたよ」

女「私お給仕に出なくちゃならないかもしれないけど、恥かしくていやだな」

女「お嫁さんはもっと恥かかしいでしょうね」

女「だけど私、お嫁さんの着物がどういのか見たいものね」

p. 178

男「勘次さんみたいなのは、あれは勘定には入らないんだろか」

男「勘次さんに聞いてみろ」

男「そんなこと言つたら、ぶんなぐられるよ、べらぼうめ」

男「そんぢや、おつぎに聞いて見ろ」
男「足でも打折（ぶつちよ）られんなえ」
男「薪雑棒（まきざつぼう）ふられてか」
男「今日（けふ）も見ろ、角の店で自棄酒（やげざけ）飲んで怒ってたつげぞ」
男「どうしてよ」

p. 179

男「おつぎことお針つ子等と一緒に手伝（てつでえ）に遣つたの知つてべな」
男「知つてらなそら」
男「そんでよ、手伝（てつでえ）に遣つてゝも、はあ、日暮（ひぐれ）に成つたら、あつかもつかして凝然（ぢつ）としちや居らんねえんだ、そんで愚図（おもしろ）云（ゆ）つてんの面白（おもしろ）えから俺（おれ）に聞いてたな、丁度（ていど）えゝ塩梅（あんべえ）に俺（おれ）草履（くさり）買ひに行つて出つかせてな」
男「毎日暮（まいひぐれ）ぢやねえけ徳利（とっくり）おつ立てゝんな」
男「さうなんだ、近頃（ちかごろ）唐鍬（からくわ）使（つか）つてえ骨折（こつげ）つからつて仕事（しごと）畢（しま）つちや一合位（ぐれえ）引つ掛けて直ぐ行つちやあんだつちけが、それ今日は早くから来てたんだつちきや、店のおとつゝあに聞いたな俺（おれ）ら」
男「俺（おれ）ら今日（けふ）うめえ処（ところ）聞（き）いつちやつたな」
男「何（なに）だつて云（ゆ）つけ」
男「酷（こつ）でえ阿魔（あま）だ、夕飯（ゆふめし）も何も仕（つか）やうありやしねえなんてな、独（ひとり）りでぐうづ云（ゆ）つてな、そんで与吉（よきち）こと何（なん）遍（びん）も迎（むか）へに遣（つか）つてな、さうすつとあの与吉（よきち）の野郎（やろう）また、今（いま）直（すぐ）に饅頭（まんじゅう）饗（か）（ふるま）つてよこすとう、なんてのたくり云（ゆ）つて来（き）んだ、さうすつと又駄目（まただ）だ汝（おれ）や復（また）行（い）つて来（き）う、直（すぐ）に来（き）うつて云（ゆ）ふんだぞなんて怒（おこ）つた見てえになあ、俺（おれ）ら可笑（おかし）くつて仕様（しやう）（しやう）無（な）かつたつげぞ」

p. 180

男「そんぢや直ぐよこしたつべ」
男「うむ、途中で行逢（いきや）つたんだんべ、直ぐ来（き）たつちきや」
男「あつちだつて其（その）位（くらい）（くれえ）知（し）つてらな」

男「それじゃ、おつぎに聞いてみろ」
男「足でも折られるぞ」
男「薪でなぐられてか」
男「きょうなんかも見ろ、角の店でやけ酒飲んで怒ってたぞ」
男「どうして」

p. 179

男「おつぎをお針つ子らといっしょに手伝いにやったの知ってるだろう」
男「知ってるよ、それは」
男「それでさ、手伝いにやっても、もう、日暮（ひぐれ）になつたら、むずむずしてじっとしてられないんだ。それで、ぐずぐず言ってるのが面白いから、おれは聞いていたよ。ちょうどいいあんばいに、おれ草履（くさり）買（か）ひに行（い）つて出（で）つておしてなあ」

男「毎夕（まいゆふ）方（かた）じゃないのか、徳利（とっくり）を立ててるのは」
男「さうなんだ。近（ちか）ごろ唐鍬（からくわ）使（つか）いが骨折（こつげ）れるからつて仕事を終（お）えると一合（いちが）くらい引（ひ）つ掛けて、すぐ行（い）つちやうんだつていう話（はなし）だが、それがきょうは早くから来てたんだそう。店のおやじさんに聞いたんだよ、おれは」
男「おれは、きょう、うまいところを聞（き）いたやつたよ」
男「何（なに）だつて言（い）つてた」
男「ひどい女（おんな）だ、夕飯（ゆふめし）も何もしょうがないなんてな、独（ひとり）りでぐずぐず言（い）つてな、それで与吉（よきち）を何（なん）遍（びん）も迎（むか）へにやつてな。そうすると、あの与吉（よきち）の野郎（やろう）がまた、今（いま）すぐ（すぐ）にうどんをこちそうしてよこすつてさあ、なんて、のろのろ帰（か）つてくるんだ。そうするとまた、だめだお前（おれ）また行（い）つてこい、すぐ（すぐ）に来（き）いつていうんだぞ、なんて怒（おこ）つたみたいになあ。おれはおかしくつてしょうがなかつたぞ」

p. 180

男「それじゃ、すぐによこしたつべ」
男「うん、途中で出逢（い）つたんだらう。すぐ来たよ」
男「むこうだつてそのくらい知（し）つてらあな」

男「おつぎは店へよつたつかけか」
男「寄らねえや、さうしたらおつう、なんておとつゝあ喚ばつたんだ、たいした声してな、それでもおつうは行つちまあのよ、さうしたら又、おつうなんて唸鳴つてな、勘定すんのものにも慌（あわ）くつて銭（ぜに）落つことしたり何（なん）かして後（あと）から駆けてつたんだ、五合も飲んだつべつちけな、可怖（おつかね）え目つきしつちやつてな、そんだがおつぎは聴かねえぞな
か＼、つツ＼と行つちやつてな」

男「今日は若（わけ）え衆（し）等（ら）行くと思つてはあ、夜まで置けねえんだな」

男「極つてらあな」

男「そんだつて籠棒（べらぼう）、若（わけ）え衆（し）等（ら）だつてさうだことばかりするものぢやねえ、詰んねえ」

男「外聞（げえぶん）悪（わり）いも何（なん）にも知んねえんだな」

p. 181

男「おつぎはそんだが頭髮（あたま）てか＼／光らかせた処（とこ）ら善く成つちやつたつげぞ」

男「そんで、おとつゝあ余計仕やう無くなつちやつたんだんべえ」

一三

p. 185

おつぎ「おとつゝあ、あの太鼓は何処だんべ」

勘次「どれ、あの遠くのがゝ、分るもんか何処だか」

おつぎ「俺ら方（ほう）へはまあだ、他村（ほかむら）から来る頃ぢやあんめえな」

勘次「おとつゝあ等がにや分るもんかよ、そんなこと」

おつぎ「それでも、他村（ほかむら）から来んだつて云（ゆ）つけぞ、支度して来んだつて俺ら今日頭髮（あたま）結（ゆ）つてゝ聞いたんだぞ」

勘次「さうえ者（も）な、さうえ者よ」

おつぎ「俺ら行つてんべ、よきも行つて見ろなあ、姉（ねえ）と一緒に」

勘次「汝（わ）ツ等（ら）ことばかし遣れつかえ」

男「おつぎは店へよつたか」

男「寄らないよ。そうしたら、おつう、なんておやじが呼んだんだ、すごい声でな。それでもおつうは行ってしまうのさ。そうしたらまた、おつうなんて唸鳴つてな。勘定するのにもあわてて銭落としたり何かして後から駆けてつたんだ。五合も飲んだろうというような、こわい目つきをしちやつてな。それでもおつぎは聞かないよ、なかなか。つっつと行っちゃつてな」

男「きょうは若い衆が行くと思つてもう、夜まで置けないんだな」

男「きまつてらあな」

男「だつて、べらぼう、若い衆だつてそんなことばかりするものじゃない。つまらない」

男「外聞悪（わり）いも何も知らないんだな」

p. 181

男「おつぎは、だけど頭をてかてか光らせたところは、よくなつちやつたぞ」

男「それで、おやじは余計仕方なくなつちやつたんだろうな」

一三

p. 185

おつぎ「おとうさん、あの太鼓はどこでしょう」

勘次「どれ、あの遠くのか。分かるもんか、どこだか」

おつぎ「うちの方へはまだ、ほかの村から来るころじゃないでしょうねえ」

勘次「おとうさんなんかには分かるもんかよ、そんなこと」

おつぎ「でも、ほかの村から来るんだつていつたわ。支度して来るんだつて、私きょう頭結つてて聞いたんだよ」

勘次「そういう者は、そういう者よ」

おつぎ「私行つてみよう。よきも行つてみなさいよ、お姉さんといっしょに」

勘次「お前たちだけ、やれるかい」

おつぎ「それでも、南のおつかさん行（ゆ）きたけりや連れてくつちつたんだぞ」
勘次「箆棒（べらぼう）、そんなことされつかえ、踊なんぞあ後（あと）幾日（いくか）だつてあらあ、今夜らつから行（え）かねえつたつてえゝから、他人（ひと）に云（ゆ）われつとはあ、其れに乗つてあふりゝ出たがんだから」

p. 186

勘次「おつう支度して見ろ、俺連れてんから」

p. 187

男「太鼓が疎（おろ）かちや踊もおろかだ」

p. 188

女「おつぎさん能く来たつけな」

女「おゝ暑いやまあ、咽（むせ）つ返（けえ）る様だ」

p. 189

女「おつぎさん、踊んねえか」

おつぎ「俺ら厭（や）だよ、おとつゝあ居（え）つから」

p. 190

おつぎ「此らまあ、どうしたもんだ」

おつぎ「他人（ひと）の櫛（かみ）まあ」

勘次「どうして汝（わ）りや、櫛（かみ）なんぞ取らつたんだ」

勘次「こうれ、此阿魔奴、しらばくれやがつて、どうしたんだよ」

p. 191

おつぎ「何為（す）んだな、おとつゝあ」

勘次「何為（す）んだと、づうゝしい阿魔だ、櫛（かみ）何故（どう）して取らつたんだか云（ゆ）つて見ろつちんだ、此んでも分んねえのか、云（ゆ）つて見ろよ」

勘次「云（ゆ）つて見ろつちのに、云（ゆ）つて見ろよ」

おつぎ「どうしてつちつたつて、俺らがにや分んねえよ」

勘次「分んねえと、何（なん）にも知らねえ者（もの）で他人（ひと）の櫛（かみ）なんぞ取つか」

勘次「そんたら汝（わ）りや」

男「おゝ痛てえまあ」

男「櫛（かみ）とつたな此処（こゝ）に居たよう」

男「持つてたら、やつちめえ」

おつぎ「それでも、南のおかあさんが行きたければ連れていくつて言つたんだよ」

勘次「べらぼう、そんなことされるもんか。踊りなんぞは、あと幾日（いくか）だつてあるさ。今夜あたりから行かなくなつていいから。他人（ひと）に言われるともう、それに乗つかつて、ふらふら出たがるんだから」

p. 186

勘次「おつう支度してみろ。おれが連れていくから」

p. 187

男「太鼓がそまつじゃ踊もそまつだ」

p. 188

女「おつぎさん、よく来たなあ」

女「おお暑いや、もう、むせかえるようだ」

p. 189

女「おつぎさん、踊らないか」

おつぎ「私（わ）いやよ。おとうさんがいるから」

p. 190

おつぎ「これはまあ、どうしたことだ」

おつぎ「他人（ひと）の櫛（かみ）まあ」

勘次「どうしてお前は、櫛（かみ）なんぞ取られたんだ」

勘次「こうれ、このあまめ、しらばくれやがつて、どうしたんだよ」

p. 191

おつぎ「何（なん）するのよ、おとうさん」

勘次「何（なん）するんだと。ずうずうしいあまだ。櫛（かみ）をどうして取られたのか言つてみろつていうんだ。これでも分からないのか。言つてみろよ」

勘次「言つてみろつていうのに、言つてみろよ」

おつぎ「どうしてつて言つたつて、私（わ）には分からないわよ」

勘次「分からないだと。何（なん）にも知らない者（もの）で他人（ひと）の櫛（かみ）なんぞ取るか」

勘次「それならお前は」

男「おお痛いまあ」

男「櫛（かみ）とつたのは、ここにいたよう」

男「持つてたら、やつちめえ」

p. 192

男「厭（や）だよ、おとつゝあに打（ぶ）ん擲られつから、おとつゝあ勘弁してくるよう」

男「おとつゝあ明り点けべえかあ」

勘次「汝（われ）何処さ行（え）くんだ。こうれ」

勘次「おつう」

男「焼餅焼くとて手を焼いてえ、其の手でお釈迦の団子捏ねたあ」

p. 193

女「櫛なんぞ持つてゐねえぞはあ、それよりやあ、帰（けえ）つて柿の木のざく股でも見た方がえゝと」

p. 194

女「勘次さんもどうしたつちんだんべ、俺ら可怖（おつかね）えやうだつけぞ」

女「本当に、丸つきり狂気（きちげえ）のやうだものなあ」

女「唯たあ思へねえよ、勘次さんもあゝいに仕ねえでもよかんべと思ふのになあ」

女「厭（や）だゝ／＼」

一四

p. 197

男「燻（けぶ）つてえのそつちへおん出さなくつちや仕やうねえや」

博勞「なあにかまわな」

博勞「此りや燻（けぶ）つてえ」

博勞「あゝ善え処（とこ）だ、よう、おつぎ、少（ちつ）と此処まで来てくんねえか」

おつぎ「どうしたもんだんべ、兼さん等自分で這入（へえ）んのに燻（けむ）つたけりや、おん出してからへえつたら善かんべなあ、それに怎的（どう）したもんだ一同（みんな）居て、水汲みに来たものなんぞ使あねえたつてよかんべなあ」

p. 198

男「おつぎに搔（か）ん出して貰あんでなくつちや厭（や）だつちから俺ら管（かま）あねえんだな、そんでなけりや幾らでも出して遣らざらによ」

博勞「燻（けぶ）つてえの無く成つたら酷く晴々（せいゝ／＼）してへえつてる様ぢやな

p. 192

男「いやだよ、おとうさんにぶんなぐられるから。おとうさん勘弁してくれよう」

男「おとうさん、明かりつけようか」

勘次「お前どこへ行くんだ。これ」

勘次「おつう」

男「焼餅焼くとて手を焼いてえ、その手でお釈迦の団子こねたあ」

p. 193

女「櫛なんぞ持っていないよ、もう。それよりも、帰つて柿の木の股のところでも見た方がいいよ」

p. 194

女「勘次さんも、どうしたつていうんだらう。私こわいみたいだったわ」

女「本当にねえ。まるつきり気ちがいのやうだものねえ」

女「ただごととは思えないわよ。勘次さんもあんなにしないでいいだろうと思うのにねえ」

女「いやだいやだ」

一四

p. 197

男「煙いのを、そちらへ出さなくちゃいけないや」

博勞「なあにかまわな」

博勞「こりや煙い」

博勞「ああいいとこだ。よう、おつぎ、ちょっとここまで来てくれないか」

おつぎ「どうしたんでしょう、兼さんは自分で入るのに煙けりやあ出してから入ったらいいでしょうに。それにどうしたのよ。みんないて、水汲みに来たものなんぞ使わなくたっていいでしょう」

p. 198

男「おつぎに搔きだしてもらうんでなくつちやいやだつて言うから、おれはほっておくんだよ。そうでなけりや、いくらでも出してやるのに」

博勞「煙たいのがなくなったら、ひどくせいせいして、入っているような気がしなく

くなつた。俺ら莫迦な目に逢つちやつたえ」

おつぎ「どうしたもんだ、他人（ひと）のこと使つて小憎らしいこと、そんなこと云（い）ふとおつけて遣つから」

博勞「謝罪（あやま）つた\」

博勞「ああ、おつぎ\少（ちつ）と待つてくろえ、俺れえ\物出すから」

おつぎ「お\厭（や）なこつた、要（え）らねえよ」

博勞「え\、これ出すべつちのに」

おつぎ「憎らしいことまあ、悪戯（いたづら）ばかし仕て」

男「後（うしろ）見せえすりやそんでえ\んだ」

p. 199

博勞「俺ら其の雀斑（そばつかす）見せえすりや気が済んでんだよ」

おつぎ「何程（なんぼ）すれつからしなんだんべ兼さんは、他人（ひと）のこと本当に」

男「兼さんすつかり惚（ほれ）られつちやつた」

男「お蔭でどうも捗行（はかゆ）きあんした。どうぞゆつくり行（や）つておくんせえ」

p. 200

男「はい」

女「あれ待つてくくんねえか」

女「おとつ\あん、お竈様（かまさま）忘れたつけべな」

男「さうだつてな、ほんに」

博勞「酒そつちの方へたんと掛けねえで貰（え）えてえな」

おつぎ「酒飲む者（も）な、さうだに惜しいもんだんべか」

博勞「そんだつて酒つちや人の口さ入（せ）える様に出来てんだから、それ証拠（しんこ）にや俺らが口さ入（せ）えりやすぐ利くから見ろえ」

博勞「どうれ、おめえ等饅頭粉（うどんこな）少（ちつ）と持つて来て見せえ、一ツ爪尻（つまじり）でえ\んだ、お\え持つて来うな、おつぎでもえ\や、よう」

p. 201

おつぎ「どうしたもんだ、大威張（おほえばり）して」

なつた。おれはばかな目に合つちやつたなあ」

おつぎ「どうしたのよ。ひとのこと使つて小憎らしいこと。そんなこと言うとおつてやるから」

博勞「あやまつた、あやまつた」

博勞「ああ、おつぎおつぎ、ちょっと待つてくれや。おれがいい物をやるから」

おつぎ「おおいやなこつた。いらないよ」

博勞「ええ、これをやろうつていうのに」

おつぎ「憎らしいことをまあ、いたずらばかりして」

男「うしろを見せえすりや、それでいいんだ」

p. 199

博勞「おれはそのそばかす見せえすりや気がすんでるんだよ」

おつぎ「なんてすれつからしなんでしょう、兼さんは。ひとのこと本当に」

男「兼さん、すつかりほれられちやつた」

男「お蔭でどうもはかどりました。どうぞゆつくりやつてください」

p. 200

男「はい」

女「あれ、待つててくださいよ」

女「おとうさん、お竈様忘れたでしょうね」

男「そうだったね、ほんに」

博勞「酒そつちの方へたくさん掛けないでもらいたいな」

おつぎ「酒を飲む者は、そんなに惜しいものでしょうか」

博勞「だつて酒つていうのは口の中へ入れるようにできてるんだから。その証拠（しんこ）におれの口へ入れりやすぐ利くから見ろよ」

博勞「どうれ、お前たち、うどん粉（うどんこな）ちょっと持つて来てみな。一つまみでいいんだ。おうい持つて来いよ。おつぎでもいいや。よう」

p. 201

おつぎ「どうしたのよ。大いばりして」

博勞「さうら此れ掛けて、此れが晩稲（おくいね）の花だ」

女「何処にもさういに掛けるもな有んめえな」

博勞「俺ら晩稲（おくいね）作んだから、役場の奴等作つちやなんねえなんちつたつて、俺ら見てえな、うっかりすと乳ツ岸までへえるやうな深ん坊の冷えつ処（とこ）ぢやどうしたつて晩稲（おくいね）でなくつちや穫れるもんぢやねえな、それから俺れ役場で役人が講釈すつから深ん坊ぢや斯うだつち嘶したら、はつきり悪りいたあ云（ゆ）はねえんだから、夫から俺れ糞攫んで見ねえ奴ぢや駄目だつちんだ」

女「根性振れてつからだあ、晩稲（おくいね）は作んなつちのに」

博勞「俺れか、いやどうも振れてんにもなんにも」

博勞「さうれ見ろえ、稲へ白（しれ）え花が咲えたぞ、白坊主（しろぼうず）の花だこりや」

女「厭（や）だよ、白坊主ツち稲はあんめえな」

p. 202

博勞「それでも俺ら勘次さんに聞いたぞ」

勘次「此は白坊主」

男「白坊主等夫婦して耕（うな）つてら」

女「恁んな物でよけりや、夥多（みつしら）やつておくんせえ、まあだ後にも有りやんすから」

p. 203

男「さあ、何卒（どうぞ）ずん／＼干しておくんせえね」

男「はい」

男「おめえ、さういに自分の処（とこれ）えばかり置かねえで干せな」

勘次「俺ら、匏（かんな）の持たねえ大工（でえく）だ、鑿（のみ）一方つちんだから」

p. 204

男「篋棒（べらぼう）に大（え）かく成つたつけな、此の馬鈴薯（じやがいも）はなあ」

男「此んでも桑の間さ作つたんだが、思ひの外だつけのさ」

男「桑の間でかう出来つかな、そりやさうと何処さ作つたんでえまあ」

博勞「そうら、これ掛けて。これが晩稲の花だ」

女「どこにもそんなに掛けるものはいないでしょう」

博勞「おれは晩稲を作るんだから。役場の奴ら作つちやならないなんて言つたつて、おれみたいな、うっかりすと乳のあたりまで入るやうな深い田んぼの冷えるところぢや、どうしたつて晩稲でなくつちやとれるものじゃないよ。だからおれは、役場で役人が講釈をするから、深いところじゃこうだつていう話をしたら、はつきり悪いとは言わないんだから。だからおれは糞をつかんでみない奴じゃだめだつていうんだ」

女「根性がねじれてるからよ。晩稲は作るなつていうのに」

博勞「おれか。いやどうも、ねじれてるにもなんにも」

博勞「そうれ見ろ。稲へ白い花が咲いたぞ。白坊主の花だ、こりや」

女「いやだよ、白坊主つていう稲はないでしょう」

p. 202

博勞「それでも、おれは勘次さんに聞いたぞ」

勘次「これは白坊主」

男「白坊主たちが夫婦して耕してるよ」

女「こんな物でよければ、十分にやっておくんさい。まだ後にもありますから」

p. 203

男「さあ、どうぞずんずん干してくださいね」

男「はい」

男「お前、そんなに自分のところにばかり置かねいで干せよ」

勘次「おれは、かんなを持たない大工だ。のみ一方つていうんだから」

p. 204

男「べらぼうに大きくなつたなあ、このジャガイモはなあ」

男「これでも桑の間に作つたんだが、案外とれたのさ」

男「桑の間でこんなにできるかなあ。そりやさうと、どこへ作つたんだい、まあ」

男「裏の垣根外（くねそと）さ、土はかたで赤つぼうろくだが、掃溜（はきだめ）みつしら掘つ込んで置いた処（ところ）だから、其れが出たと見（め）えんのさ、思ひの外土地は嫌あねえもんだよ、此んなもんでも作つちや桑にや悪かんべが」

男「大丈夫（だいぢやうぶ）だとも、馬鈴薯（じやがいも）が大（え）かく成る様ぢや其肥料（こやし）は桑も吸ふから、いや桑の根つ子の遠くへ踏ん出すんぢや魂消たもんだから、目も有りもしねえのに肥料の方へ真直にずうつと来つかんな」

男「これでどの位（くれえ）殖えるものだと思つたら一ツ株で一升位（ぐれえ）づゝも起せるよ」

男「うむ、さうかな、さうすつと割の善（え）えもんだな」

p. 205

男「能く牛蒡は保（も）たせたつけな」

男「なあに、踏ん固める処（ところ）へ活けてせえ置けば大丈夫（でえぢやうぶ）なものさ、俺ら家（ぢ）や田植迄は有るやうに庭へ埋（う）めて置くのよ」

男「さうだが、俺ら家（ぢ）なんぞぢや、それまでにや無く成つちまあから一度でもさういに活けて置いたことあねえな」

博勞「俺らなんぞ、腹さ蔵つて置くから盗られつこなしだ」

勘次「牛蒡もうつかりして縄で縛つて活けちや、其処から腐れがへえつて酷（ひで）えもんだな、藁は余つ程嫌（きれ）えだと見（め）えんのさな」

男「どうしたかよ」

勘次「どうしたかなもんぢやねえ、俺ら家（ぢ）で行（や）つたこと有んだもの」

勘次「なあおつう、さうだな」

女「おつうとそれ、返辞するもんだ」

p. 206

女「おつぎは居るよおめえ、さういに見ねえでも」

博勞「はてな、懐（ふとこれ）え入（せ）えた筈だつげが」

博勞「こうれ、うめえ物見ろえまあ」

博勞「へへえ、此ん畜生奴（ちきしよめ）こんでも怒つてらあ」

男「裏の垣根の外さ。土はまるつきり赤土だが、はきだめをしっかりと掘り込んでおいたところだから、それが出たと見えるのさ。案外土地は嫌わないものだよ。こんなもんでも作ると桑には悪いだろうけど」

男「大丈夫だとも。ジャガイモが大きくなるようじゃ、そのこやしは桑も吸うから。いや桑の根つこの遠くへ踏みだすのは、たまげたもんだから。目もありもしないのに肥料の方へ真直にずつとくるからな」

男「これでどのくらいふえるものかと思つたら、一株で一升ぐらいづつも起せるよ」

男「うん、さうかな。そうすると割のいいもんだな」

p. 205

男「よくゴボウはもたせたな」

男「なあに、踏ん固めるところへ活けてさえおけば大丈夫なものさ。おれの家では田植えまではあるように庭へ埋めておくのよ」

男「だけでも、おれの家なんぞじゃ、それまでになくなってしまふから、一度もさういうふうに活けておいたことはないな」

博勞「おれなんぞは、腹へしまっておくから、とられつこなしだ」

勘次「ゴボウもうつかりして縄で縛つて活けると、そこから腐つてきて、ひどいもんだな。藁はよっぽど嫌いだと見えるねえ」

男「どうかな」

勘次「どうかななんてもんぢやない。おれの家でやったことあるんだもの」

勘次「なあおつう、さうだな」

女「おつうって、それ、返事しなさいよ」

p. 206

女「おつぎはいるよ、あんた、そんなに見なくても」

博勞「はてな、懐へ入れたはずだったが」

博勞「これ、うまい物みろよ、まあ」

博勞「へへえ、こんちくしょうめ、これでも怒つてらあ」

女「どうしたもんだんべ大（え）けえ姿（なり）して」

与吉「あれ俺ら知つてら」

与吉「鴉のきんたまから出んだぞこら」

勘次「汝（わ）ツ等知りもしねえで」

与吉「そんだって俺ら見た、笹つ葉の枝にくっついてた処（ところ）から出たんだ」

p. 207

男「勘次さん駄目だよ、学校へ遣つちや半年たあ云（ゆ）はんねえから、下手んすつと今の子奴等（こめら）にや遣り込められつちやからおとつゝあこれ知つてつかなんちあれたつて、困らなどうもなあ」

男「博勞（ばくろう）なんちい奴等は泥棒根性無くつちや出来ね商売（しやうべえ）だな、嘘（ちく）らつぼう打（ぶ）んぬいて、兼等（かねら）汝（わ）りや、俺れことせえおつ嵌める積しやがつて」

博勞「笹棒（べらぼう）、おつ嵌めんなものやねえ、それ厭（や）だら銭（ぜに）出せよ銭、なあ、銭出さねえ積すのが泥棒より太（ふて）えんだな、西のおとつゝあ等躊躇逡巡（しつゝくむつゝく）だから、かたで」

男「そんだから見ろえ、博勞で蔵建てた奴ありやしねえ、罰（ばち）たかつてつから」

p. 208

博勞「どうした、そんだが此間（こねえだ）の白は善かつたんべ、彼（あ）れさ打（ぶ）てな、あゝ西のおとつゝあ、白ぢや徴発はさんねえぞ」

男「えゝから、それよりか、そんなに不廉（たけ）えこと云（ゆ）はねえで、なあ、米一俵打（ぶ）つべえぢやねえか」

博勞「徒勞（だめ）だよそんぢや、あんでも六銭の横薦（よこども）乗つけて曳いて来たんだぞ、血統証まで有んぞ、あゝ、彼（あ）の手はねえぞ」

男「何んで汝（われ）がまた、牡馬（をんま）と牝馬（めんま）だけの血統証だんべ、そんなもの何に成るもんぢやねえ、俺れ知らねえと思つて、俺ら白河の市で聞いてらあ」

男「博勞うまく練れねえ様だな、ようしそん

女「どうしたっていうのかしら、大きいなりをして」

与吉「あれ、おれは知ってるよ」

与吉「カラスのきんたまから出るんだぞ、これ」

勘次「お前なんか知りもしないで」

与吉「だっておれは見た。笹つ葉の枝にくっついてたところから出たんだ」

p. 207

男「勘次さん、だめだよ。学校へやつちや半年とも言われなから。下手をすると、今の子どもたちには、やり込められちゃうから。おとうさん、これ知ってるかなんて言われたつて、困るわな、どうもなあ」

男「ばくろうなんて奴らは泥棒根性がなくちゃできない商売だな。嘘をついて。兼なんかお前、おれまでだますつもりしやがつて」

博勞「べらぼう、だますなんてとんでもない。それがいやなら銭を出せよ、銭。なあ、銭出さないつもりなのが泥棒より太いんだな。西のおとうさんなんか、ぐずぐずしてるからなあ、まるで」

男「だから見ろ。ばくろうで蔵建てた奴はありやしない。罰があたってるから」

p. 208

博勞「どうした。だけどこの間の白はよかつただらう。あれにしろよ。ああ西のおとうさん、白ぢや徴発はされないぞ」

男「いいから、それよりも、そんなに高いこと言わないで、なあ、米一俵出そうじゃないか」

博勞「だめだよそれじゃ。あれでも六銭の横薦乗つけて曳いて来たんだぞ。血統書まであるぞ。ああ、あの手はないぞ」

男「何でお前がまた、牡馬と牝馬だけの血統証だらう。そんなもの何になるもんぢやない。おれが知らないと思つて。おれは白河の市で聞いてらあ」

男「ばくろう、話がうまくいかないようだな。

ぢや俺れ一つ打(ぶ)つてやんべ

男「そんぢや、それ干せな、兼(かね)さんもそれ」

男「どうだえ、博(はく)うまく打(ぶ)てたんべ、どつちも依(よ)怙(こ)最(さい)厭(えん)(えこひいき)なしつち処(とこ)だ」

男「こつちのおとつゝあ、幾(いく)つだつけな、少(す)ち)つと白(しろ)く成(な)つたな」

男「さうよな」

p. 209

女「おめえ、俺(おれ)家(ぢ)のおとつゝあもどうしてか酷(こ)く白(しろ)く成(な)つたんだが、斯(す)んで年(とし)齢(れい)はさういとつちや居(ゐ)ねえんだぞ」

勘(かん)次(じ)「俺(おれ)と同(お)年齢(ねえどし)だよ」

女「どうだかよ」

勘(かん)次(じ)「なあに、どうだかなもんぢやねえ」

女「本当にさうなんだよおめえ」

男「そんぢや勘(かん)次(じ)さんおめえ幾(いく)つでえ」

勘(かん)次(じ)「さうよ、俺(おれ)らこつちのおとつゝあと同(お)年齢(ねえどし)だつけな」

男「えゝ笹(さ)棒(ぼう)(べらぼう)な」

女「そんだが勘(かん)次(じ)さんは本当に若(わか)けえな。俺(おれ)ら家(ぢ)のおとつゝあ等(ら)たあ、たえした違(ちが)い(ちげ)えだな」

博(はく)勞(らう)「勘(かん)次(じ)さん等(ら)まあだ十七(じゅうしち)だな」

p. 210

博(はく)勞(らう)「香(か)煎(せん)嘗(ちやう)めんのにや、笑(わ)つちやいかねえつちけぞ、おめえ等(ら)」

女「おゝ、酷(こ)い(ひで)え目に逢(あ)つた。粉(こな)鼻(び)の方(かた)さへえつて鼻(び)つん／＼して仕(し)やうありやしねえや、本当に兼(かね)さんは人(ひと)が悪(わる)いや、なんぼ憎(にく)らしいか知(し)れやしねえ、其(その)処(ところ)らに薪(き)棒(ぼう)(まきざつぼう)でも有(あ)れば打(ぶ)つ飛ば(とば)して遣(や)りてえ様(さま)だ」

博(はく)勞(らう)「そんだから俺(おれ)、笑(わ)つちやえかねえつて云(い)つたんだな、それ聴(き)かねえから」

博(はく)勞(らう)「博(はく)勞(らう)さん一つやつゝけつかな」

博(はく)勞(らう)「三(さん)春(しゅん)から白(しろ)河(が)の方(かた)へこんでも横(よこ)薦(せん)乗(のり)つたのをつないで曳(ひ)いて来(き)つ処(ところ)らえゝかんな、能(よ)く聞(き)いて見(み)せえ、此(この)手(て)にや行(い)かねえぞ」

博(はく)勞(らう)「どう／＼どうよ、ほうい、ほいとう」

p. 211

ようし、それじゃおれが一つとりなしてやろう」

男「それじゃ、それを干(ぬ)せよ。兼(かね)さんも、それ」

男「どうだい、ばくろう、うまくいったらう。どつちもえこひいきなしつてところだ」

男「こつちのおとうさん、いくつだつたつ。すこし白(しろ)くなつたな」

男「さうよな」

p. 209

女「あんた、うちのおとうさんも、どうしてかひどく白(しろ)くなつたんだけど、これで年はそんなに取(と)つちやいないんだよ」

勘(かん)次(じ)「おれと同(お)いどしだよ」

女「どうかねえ」

勘(かん)次(じ)「なあに、どうだかなんてもんぢやない」

女「本当にそうなのよ、あんた」

男「それじゃ勘(かん)次(じ)さん、お前(まへ)いくつだい」

勘(かん)次(じ)「さうだな、おれはこつちのおとうさんと同(お)いどしだつたな」

男「ええ、べらぼうな」

女「だけど勘(かん)次(じ)さんは本当に若(わか)いのね。うちのおとうさんなどは大(お)違(ちが)い(ちげ)ね」

博(はく)勞(らう)「勘(かん)次(じ)さんはまだ十七(じゅうしち)だな」

p. 210

博(はく)勞(らう)「香(か)煎(せん)なめるのには、笑(わ)つちやいけなつてさ、お前(まへ)ら」

女「おお、ひどい目に逢(あ)つた。粉(こな)が鼻(び)の方(かた)へ入(い)つて鼻(び)がつんつんして仕(し)やうがありはしない。本当に兼(かね)さんは人(ひと)が悪(わる)いや。どれだけ憎(にく)らしいか知(し)れやしない。そこらに薪(き)でもあればなぐつてやりたいくらい」

博(はく)勞(らう)「だからおれは、笑(わ)つちやいけなつていったんだな。それを聴(き)かないから」

博(はく)勞(らう)「ばくろうさん、一つやつつけるかなあ」

博(はく)勞(らう)「三(さん)春(しゅん)から白(しろ)河(が)の方(かた)へこれでも横(よこ)薦(せん)乗(のり)つたのをつないで曳(ひ)いてくるところはいいからな。よく聞(き)いてみるよ。こうはいかないぞ」

博(はく)勞(らう)「どう／＼どうよ、ほうい、ほいとう」

p. 211

博勞「はあえゝえゝえゝ」
博勞「枯芝あえにいゝゝゝえゝ、はあえ、
止るうえ、てふ／＼のおゝゝゝえ、はあ、
ありや気があゝゝゝえ、え、はあ知れえゝ
ぬうよおうゝゝ」

博勞「えゝ傍にえゝ、菜種えのおゝゝゝえ、
えゝ花があえ、あゝえるうゝゝゝえゝ、
ほういほい」

男「篋棒（べらぼう）に迂遠（まだる）つけ
え唄だな、此の夜（よ）の短けえのに眠つ
たく成つちやあな」

博勞「えゝから西のおとつゝあ、耳糞ほじく
つて聞いてろえ」

博勞「はあえゝえゝ、えゝ朝のうゝゝえゝえ、
はあ出掛えにいゝゝゝえ」

博勞「朝の出掛けにどの山見ても雲の掛らぬ山
はない」

博勞「ばか／＼／＼ばか／＼となあ斯う、廿三坂
越えて引く処（とこ）だぜ、畜生（ちきし
やう）あばさけんええ」

博勞「ひゝいん」

博勞「廿三坂か、白河のこつちだ、畢（しめ
え）の坂が篋棒に長くつてな」

p. 212

博勞「はあえゝえゝえゝ」

博勞「奥の博勞さん何処で夜が明けた、廿三
坂七つ目で」

博勞「夜引（よびき）すつ時にや人間も眠つ
たく成りや馬も眠つたく成つてな、石坂だ
から畜生等（ちきしやうら）がくたり／＼
はあ、なんぼにも歩かねえな、そんな時にや、
おうい一つどうだね遣つゝけちやあと許
（ばかり）でなあ、博勞等ぞろ／＼繼（つ
なが）つて来んだから、峯の方でも谷底の
方でも一度に大変だあ、さうすつと駒つ子
奴（め）等ひゝんなんてあばさけてばか／
／＼ばか／＼と斯う運びが違つて来らな、皆
（みんな）おつかげばかし喰つ附いたの
引つ放して来んだから足が不揃ひだなどう
しても、それに坂が急だつちと倒施毛（さ
かさつむじ）おつ立てる様だから畜生（ち
きしよう）なんぼにも足が出ねえな、其奴
へ合せて唄あんだからゆつくり行（や）ん
なくちやなんねえな」

博勞「此処らの馬だつて見ろえ、博勞節門ツ

博勞「はあええええ」

博勞「枯芝に、はあえ、止まるチョウチヨの、
はあ、ありや気が、え、はあ知れぬよ」

博勞「ええ、そばに、菜種の、花がある、ほ
ういほい」

男「べらぼうにまだるっこい歌だな。この夜
の短いのに眠くなっちゃうよ」

博勞「いいから西のおとうさん、耳くそほじ
くつて聞いてろい」

博勞「はあええ、朝の、はあ出掛えに」

博勞「朝の出掛けにどの山見ても雲の掛から
ぬ山はない」

博勞「ばかばかばかばかとなあこう、廿三坂
越えて引くところだぜ、畜生あまえるない」

博勞「ひひいん」

博勞「廿三坂か、白河のこつちだ。終わりの
坂がべらぼうに長くつてな」

p. 212

博勞「はあええ」

博勞「奥のばくろうさん、どこで夜が明けた。
廿三坂七つ目で」

博勞「夜引をする時には人間も眠くなりやあ
馬も眠くなってな。石坂だから畜生ら、が
くたりがくたり、どうにも歩かないな。そ
んな時には、おうい一つどうだねやつつけ
ちゃとばかりでなあ、ばくろうら、ぞろぞ
ろつながってくるんだから、峰の方でも谷
底の方でも一度に大変だあ。そうすると、
馬の奴めがひひんなんて甘えて、ばかばか
ばかばかと、こう運びが違ってくるよ。み
んな母親にばかりくつついてたのを引きは
なしてくるんだから、足が不揃いだな、ど
うしても。それに坂が急だと、体が逆さにな
るようだから畜生どうにも足が出ない
な。そいつへ合わせて歌うんだから、ゆっ
くりやらなくっちゃならないな」

博勞「ここらの馬だつてみる、ばくろう節門

先(つあき)でやつたつ位(くれえ)厩(まや)ん中で畜生(ちきしやう)身体(からだ)ゆさぶつて大騒ぎだな

博勞「おゝ痒(かい)い」

p. 213

勘次「おつう」

勘次「これさ馬鈴薯(じやがいも)でもくんねえか」

おつぎ「どうしたもんだおとつゝあは、お平の盛換(もりけ)えするもな有んめえな、馬鈴薯(じやがいも)は前(めえ)に幾らでも有んのに」

おつぎ「おとつゝあは酪酊(よつばら)つたつてそんなに顛倒(ぐれ)なけりやよかつペなあ」

勘次「云(ゆ)つて見たのよ」

勘次「おつか様等もこつちへ来うな、一杯(いっぺえ)やれな」

女「ほんに仲間入したらよかつペ」

おつぎ「汝(わ)りや梅嘔つたんべ、学校(がっこ)の先生(げしや)姉(ねえ)訴(えつ)けてやつから、腹痛(ふく)くつたつて我慢(がまん)してるもんだ」

女「どうしたんだあ、腹痛(ふく)えのか毒(どく)消(け)しても呑(の)ませて見(み)つか、俺(おれ)らもはあ、梅(うめ)だの李(り)だの成熟(せいじく)できちやびや／＼すんだよ、出て行(い)くんだから云(ゆ)つたつて聴(き)かねえしなあ」

p. 214

勘次「汝(わ)れ梅(うめ)なんぞ嘔(え)じつて、おとつゝあ腹(はら)抉(えぐ)り抜(ぬ)いてやつから待つてろ」

おつぎ「そんなこと云(ゆ)はねえつたつて泣(な)いてんのに何(なに)だつペな、おとつゝあ」

男(おとこ)「さあ、お飯(いひ)まんまだえ」

女(おんな)「おつぎも身体(からだ)みつしりして来たなあ、女(おんな)も甘(あま)は(は)ちと成(な)つちや役に立つなあ」

おつぎ「おとつゝあ、さういに零(こぼ)しちや駄(だ)目(め)だな」

女(おんな)「勘次(かんじ)さん」

女(おんな)「勘次(かんじ)さん、はあおつぎこたあ出してても善(よ)かねえけえ」

勘次(かんじ)「嫁(よめ)になんぞ出(い)させねえよ、今(いま)ん処(ところ)ろ俺(おれ)れ困(こ)つから」

p. 215

先(ま)でやつたら、厩(ま)の中で畜生(ちきしやう)からだをゆさぶつて大騒(おほさわ)ぎだな」

博勞(はくらう)「おおかゆい」

p. 213

勘次(かんじ)「おつう」

勘次(かんじ)「これにジャガイモでもくれないか」

おつぎ「どうしたの、おとうさんは。お平(おへい)の盛換(もりか)えする者(もの)はないでしょうに。ジャガイモは前にいくらでもあるのに」

おつぎ「おとうさんは、よつばらつたつて、そんなに変(か)なふうにならなけりやいいのにねえ」

勘次(かんじ)「言(い)つてみたのよ」

勘次(かんじ)「おかあさんたちも、こつちへ来(こ)いよ。一杯(いっぺ)やれな」

女(おんな)「ほんとうに仲間(仲間)入りしたらいいでしょう」

おつぎ「お前(まへ)、梅(うめ)かじつたでしょう。学校(がっこう)の先生(せんせい)にねえさんが言(い)い付けてやるから。腹(はら)が痛(いた)くたつて我慢(がまん)してるのよ」

女(おんな)「どうした？ 腹(はら)が痛(いた)いの？ 毒(どく)消(け)しても呑(の)ませてみる？ 私(わたし)ももう、梅(うめ)だの李(り)だのできると、ひやひやするのよ。出(い)でやるんだから言(い)つたつて聴(き)かないしねえ」

p. 214

勘次(かんじ)「お前(まへ)梅(うめ)なんぞかじつて、おとうさんが腹(はら)くり抜(ぬ)いてやるから待つてろ」

おつぎ「そんなこと言(い)わなくたつて泣(な)いてるのに何(なに)でしょうね、おとうさん」

男(おとこ)「さあ、御飯(ごひ)だよ」

女(おんな)「おつぎも体(てい)がしつかりしてきたねえ。女(おんな)もはたちになると役(やく)にたつなあ」

おつぎ「おとうさん、そんなにこぼしちやだめよ」

女(おんな)「勘次(かんじ)さん」

女(おんな)「勘次(かんじ)さん、もうおつぎは出(い)してもよくない？」

勘次(かんじ)「嫁(よめ)になんぞ出(い)させないよ、今(いま)のところおれ(おれ)が困(こ)るから」

p. 215

博勞「不自由な処（ところ）ありや出して、
自分でも引つ込むのよ」

勘次「俺らそんな嘶や聴かねえ、貰ひたけり
や幾らでも有らあ」

女「そんだつておめえ、そつちこつち口掛け
て置かねえちや、直（ちき）年齢（とし）
ばかしとらせつちやつて仕やうねえぞ、俺
らも一人出したがおめえ容易ぢやねえよ、
さうだかうだ云（ゆ）われねえ内だぞおめ
え」

勘次「えゝよ卍まで独りぢや置かねえから此
れげはいまに聳とんだから」

博勞「どうしたえ、俣よ／＼でもやんねえか
勘次さん。まゝにならぬとお鉢を投げりや
其処らあたりは飯（まゝ）だらけだあ、過
多（げえ）に六かしいこと云ふなえ」

男「どうも御馳走様（ごつゝおさま）でがし
た」

勘次「おつう、よきこと起せ」

p. 216

勘次「おつう」

勘次「何してけつかんだ」

女「勘次さんと吉こと起してた処（とこ）な
んだよ」

勘次「汝りや何時でもさうだ、ぐづ／＼して
やがって」

おつぎ「待つてれば善えんだなおとつゝあ、
洗ひまでも仕ねえのにどうしたもんだ」

女「管（かま）あねえで帰（けえ）れよ、お
とつゝあ酩酊（よつぱら）つてんだから」

女「勘次さんが心持も分んねえな」

女「幾ら鼻の嫉妬（やきもち）焼くもんでも、
あゝえもなあねえな」

女「あゝえのが何（なん）かの生れ変りつち
んでも有んべな、可怖（おつかね）えやう
だよ本当にな」

女「近頃それに何（なん）ぢやねえけえ、あ
ら程欲しがったのに後妻（あと）貰あべえ
たあ、云（ゆ）はねえんぢやねえけえ」

p. 217

女「どうしたものだおめえは、他人（ひと）
の後なんぞ尾行（つ）けて行つて、罪だか
ら見ろよ」

女「さうぢやねえよ、有繫（まさか）おめえ、
他人のことを俺だつて」

博勞「不自由なところがあれば出して、自分
でも引つ込むのさ」

勘次「おれはそんな話は聴かない。もらいた
けりや、いくらでもあらあ」

女「だつて、あんた、あつちこつちへ口を掛
けておかなくちゃ、すぐ年ばかりとらせち
やつて仕方ないよ。私も一人出したが、あ
んた容易じゃないよ。ああだこうだ言われ
ない内よ、あんた」

勘次「いいよ。三十まで独りでは置かないか
ら。これにはいまに婿をとるんだから」

博勞「どうしたい。ままよままよでもやらな
いか、勘次さん。ままにならぬとお鉢を投
げりや、そこらあたりは飯（まま）だらけ
だあ。あんまりむずかしいことを言うなよ」

男「どうもご馳走さまでした」

勘次「おつう、よきを起こせ」

p. 216

勘次「おつう」

勘次「何してやがるんだ」

女「勘次さん、与吉を起こしてたとこなよ」

勘次「お前はいつでもさうだ。ぐずぐずして
やがって」

おつぎ「待つてればいいのに、おとうさん。
片付けもしないのに、どうしたの」

女「かまわないで帰りなさいよ。おとうさん
よっぱらってるんだから」

女「勘次さんの心持も分からないなあ」

女「いくら女房のやきもち焼くものでも、あ
んなものはないねえ」

女「ああいうのが、なんかの生まれ変わりっ
て言うんでしょね。こわいようだよ、本
当に」

女「近ごろそれにあれじゃないの、あれほど
欲しがったのに後妻をもらおうとは言わな
いんじゃないの」

p. 217

女「どうしたの、あんたは。ひとの後なんぞ
つけて行つて、罪だから見なさい」

女「そうじゃないわよ。まさか、あんた、他
人のことを私だつて」

女「そんぢや何に行つたんだ」
女「小便(せうべん)垂(た)つたく成つたからよ」
女「そんだから過多(げえ)に飲むなつちんだ、なんておつぎに怒られ\ / 行(い)んけわ」
女「そうれおめえ、罪だよ」

十五

p. 221
おつぎ「よき、それえ、加減にするもんだよ、汝りや」
男「待つてろ汝ツ等、さうだにさはり出ねえで、小穢(ぎたね)え」
男「此奴等(こねやつら)、汝ツ等げ呉れはぐつたこた有りやしねえ、それにさうだに騒ぎやがつて、五月蠅(うるせ)え奴等だ待つてるもんだ」
男「そうれお前等(めえら)注(つ)えで遣んのにそんな小鉢(こわ)なんぞ桶の上さ突出(つんだ)させちや畢(を)へねえな、それだらだら垂(た)つらあ、柄杓(ひしやく)そつちへおん出して行(や)るもんだ」

p. 223
男「どうしたえ、口寄(くちよせ)一つやつて見ねえかえ」
男「どうした、彼奴等(あいつら)こと寄せてんべぢやねえか」
男「おつぎこと出してんべぢやねえか」
男「寄せてんべえと」

p. 224
女「そんぢや此方(こつち)へ出(で)さつせえな」
女「ちつとおめえ等退(しや)つてくんねえか」
女「そんぢや誰(だれ)だんべ、寄せん」
男「俺れやんべ、そんぢや」
男「俺ら生口(いきぐち)寄せて見てえんだが、幾らだんべ一口は」
巫女「五銭づゝでさ」
男「此ら只黙つてゝえゝんだつけかな」
巫女「えゝんだよそんで、自分の思つてたの出て来んだから」
女「かんぜん燃(より)拵(こせ)えて水搔

女「それじゃ何に行つたの」
女「小便をしたくなつたからさ」
女「だからあんまり飲むなつていうの、なんでおつぎに怒られながら行つたよ」
女「そうら、あんた、罪だよ」

十五

p. 221
おつぎ「よき、それ、いい加減にするもんだよ、お前」
男「待つてろ、お前たち、そんなに出しゃばらないで。きたないねえ」
男「このやつら、お前たちにやりそこなつたことはありはしない。それをそんなに騒ぎやがつて、うるさい奴らだ。待つてるもんだ」
男「そうれお前ら、注いでやるのにそんな小鉢(こわ)なんぞ桶の上へ突き出しちゃ困るなあ。それ、だらだら垂れるよ。柄杓(ひしやく)をそつちへ差し出してやるものだ」

p. 223
男「どうしたい。口寄せを一つやってみないかい」
男「どうした。あいつらを寄せてみようじゃないか」
男「おつぎを出してみようじゃないか」
男「寄せてみよう」

p. 224
女「それじゃ、こつちへ出なさいね」
女「少し、あんたたち、どいてくれないか」
女「それじゃ、だれでしょうねえ、寄せるのは」
男「おれがやるよ、それじゃ」
男「おれは生口寄せて見たいんだが、いくらだい、一口は」
巫女「五銭ずつですよ」
男「これは、ただ黙つてていいんだつたかな」
巫女「いいんですよ、それで。自分の思つてたのが出てくるんだから」
女「かんぜよりをこしらえて水をかき回せば

(か) ん廻 (まあ) せば、えゝんだよ

p. 225

男「三度でえゝんだっけかな」

女「見ろよ、近頃薩張来てくんねえが、俺れこと厭 (や) にでも成つたんぢやねえかなんて出つから」

男「行々子 (よしきり) 土用へ入 (へ) えつた見てえに、ぴつたりしつちやつたな」

巫女「白紙 (しらがみ) 手頼 (たよ) り水手頼り、紙捻 (こより) 手頼りにい……」

巫女「どうせよ一つにや成れぬ身を、別れたいとは思へども……」

男「出た\」

p. 226

巫女「俺れが我が身というたとて、自由自俣に成るならば、今日の巫女 (あづさ) も要るまいにい……」

男「出た処 (ところ) でまつと饒舌 (しやべ) らせろえ」

男「かんぜん捻 (より) くだ\」して云ふこと聴かねえや」

巫女「俺れがよ心はこうなれど、怒るまえぞえ見棄てまえ、互に顔も合せたら、言辞 (ことば) も掛けてくだされよう……」

男「さうださうだ、そんでなくつちやおとつゝあ泣くぞ」

p. 227

男「目も見 (め) えねえのにさうだに押廻 (おしまは) すなえ」

男「ほうい\」

男「なあ、勘次さん、こんで若 (わけ) えものゝ処 (ところ) がえゝかな」

男「俺ら其の手拭 (てぬげ) 被つてこつち向いてる姐様 (あねさま) こと寄せて見てえもんだな」

男「何んちいか寄せて見せえ」

男「どうした寄せて見んのか、そんたら俺れかんぜん捻拵 (こせ) えてやつかれえ」

男「えゝ、情ねえ奴等だな」

p. 228

男「菓子なんぞまた盗 (と) つちや畢 (を) へねえぞ、うむ、そつちの方の酒樽ん処 (とこ) にも立つてゝ飲み口 (ぐち) でも引つこ抜かねえで貰あべえぞ、みんな」

男「さうぢやねえんだよ、店台 (みせでえ)

いいのよ」

p. 225

男「三度でいいんだったかな」

女「見なさいよ。近ごろさっぱり来てくれないうが、私がいやにでもなつたんぢやないかなんて出るから」

男「土用になってからのよしきりみたいに、静かになつちやつたな」

巫女「白紙手頼り水手頼り、紙捻手頼りに」

巫女「どうせよ一つにやなれぬ身を、別れたいとは思へども……」

男「出た出た」

p. 226

巫女「おれが我が身というたとて、自由自俣になるならば、きょうの巫女もいるまいに」

男「出たところで、もっとしやべらせろ」

男「かんぜよりがくたくたして言うこと聴かないや」

巫女「おれがよ心はこうなれど、怒るまいぞえ見棄てまい。互に顔も合せたら、ことばも掛けてくだされよう」

男「さうださうだ。それでなくつちやおとうさんが泣くぞ」

p. 227

男「目も見えないのに、そんなに押すなよ」

男「ほういほうい」

男「なあ、勘次さん、これで若いものどころがいいからな」

男「おれはその手拭いかぶつてこつち向いてるねえさんを寄せてみたいものだな」

男「なんていうか、寄せてみな」

男「どうした、寄せてみるのか。それなら、おれがかんぜよりこしらえてやるからさ」

男「ええ、情けない奴らだな」

p. 228

男「菓子なんぞまたとつちやいけないよ。うん、そつちの方の酒だるのところにも立って、飲み口を引っこぬいたりしないでもらいたいね、みんな」

男「そうじゃないんだよ。店台が自分で歩き

自分で歩き出し始まつたから俺れ抑(つか)めえた処(とこ)なんだよ」

男「えゝからガラスでもおつ欠かねえやうにしろえ、此方のおつかさまに怒られつから」

男「それでも店台は四つ足へ何か穿いてら、土鍋に片口に皿だ、どれも／＼能く打(ぶ)つ欠けてらあ」

男「何処(どこ)らか歩いて来たと見(み)えて足埃だらけだと」

男「どうれ、誰(だれ)も寄せねえけりや俺れでも寄せてんべかえ」

男「只ぢや駄目だぞ」

男「そんぢや困つたなあ、おめえどうした婆さまこと死口(しにくち)でも寄せて見ねえか」

男「俺ら厭(や)だよ、待つてつから早く来てくろなんて云(ゆ)はれた日にや縁起でもねえから」

男「酷(ひど)くおめえ近頃ぼさ／＼しつちやつてんだな、あゝだ婆でも焦(こ)がれてる所為ぢやあんめえ、頭髮(あたま)まで抜(ぬ)けた様だな」

p. 229

男「大豆(でえづ)打(ぶち)にかつ転がつた見てえに面中(つらちう)穴(めど)だらけにしてなあ」

男「篋棒、さうだ軟(やつ)けえ面(つら)で風吹く処(とこ)歩けるもんぢやねえ」

男「どうした赤(あけ)え手拭(てねげ)被らせらつたんべえ」

男「俺らさうだ手拭(てねげ)なんざあ被つたこたねえよ」

男「それでも疱瘡神(ほうそうがみ)は赤え手拭(てねげ)好きだつちげな」

男「そんだつて俺ら被んねえよ」

男「どうれ、俺ら帰(けえ)つて牛蒡(ごぼう)でも拵(こせ)えべえ、明日(あした)天秤棒(てんべん)担いで出る支障(さばり)にならあ」

男「どうせ、おめえ等やうに紺屋(こんや)の弟子見てえな手足(てあし)の者(もの)な牛蒡(ごぼう)でも擔(かつ)いで歩くの(の)にや丁度(ていど)よかんべ」

男「資本(もとで)の二両二分位(ぐれえ)でこんで餓鬼奴(がき)等(ら)までにや四五人も命繫(いのち)いで行くの(の)にや赤え手拭(てねげ)でも被つてる様な放心(うつつかり)した料簡(りょうかん)ぢや居らんねえか」

出したから、おれがつかまえたところなんだよ」

男「いいからガラスでも割らないようにしろい。こっちのおかあさんに怒られるから」

男「それでも店台は四つ足へ何か履いてるよ。土鍋に片口に皿だ。どれもこれも、よく欠けてるなあ」

男「どこか歩いて来たとみえて、足はほこりだらけだぜ」

男「どうれ、だれも寄せなけりや、おれでも寄せてみようかな」

男「ただじゃ、だめだぞ」

男「それじゃ困つたなあ。お前どうした、ばあさんを死口(しにくち)でも寄せてみないか」

男「おれはいやだよ。待つてるから早く来てくれなんて言われた日には縁起でもないから」

男「ひどくお前近ごろぼんやりしちやつてるんだな。あんなばあでも、こがれてるせいじゃないのか。頭まで抜けたようだな」

p. 229

男「大豆(でえづ)打ちに転がつたみたいに、顔中(つら)穴(めど)だらけにしてなあ」

男「べらぼう、そんな軟らかい面で風が吹くところ歩けるもんぢやない」

男「どうした。赤い手拭(てねげ)被らせられたんだらう」

男「おれは、そんな手拭(てねげ)なんぞ被つたことはないよ」

男「それでも疱瘡神(ほうそうがみ)は赤い手拭(てねげ)が好きださうだよ」

男「だつておれは被らないよ」

男「どうれ、おれは帰(けえ)つてゴボウでもこしらえよう。あした天秤棒(てんべん)担いで出るさわりになるぜ」

男「どうせ、お前らのように、紺屋(こんや)の弟子みたいな汚い手足(てあし)の者(もの)には、ゴボウでも担いで歩くのがちようどいいだろ」

男「元手の二両二分ぐらいで、これで子どもを含めて四五人も命(いのち)つないでいくのには、赤い手拭(てねげ)でも被つてるような、うつつかりした料簡(りょうかん)じゃいられないからな」

んな」

p. 230

男「此の箱の中にや何だね入（へ）えつてんなあ、人形坊（にんぎやうぼう）だつて本当かね」

男「なあに今じゃ幣束だとよ」

巫女「此ら見せらんねえんでさ、此れ見られつと何程（なんぼ）寄せて見ても当んなくなつちやつてね、自分で居ねえ間（ま）に見らつても屹度知れんでさ」

男「見せらんねえよ、其れが種だから」

勘次「わしげ一つ寄せて見ておくんなせえ、死口（しにぐち）でがさ」

巫女「そんぢや笹つ葉折つちよつて来ておくんなせえ」

男「此方で折つちよつて遣んべ」

p. 231

巫女「能く喚び出してくれたぞよう……」

巫女「姿隠れて出て見れば、何知るまいと思（おも）だろが、俺れは其の身の処へは、日日（ひにち）毎日ついてるぞ、雨は降らねど養に成り、笠に成りてよ……」

巫女「一度ならず、二度三度、不思議打（ぶ）たせて知らせたに……」

巫女「俺れが達者で居るならば……」

巫女「呉れるよ程の心なら、ほんに苦勞（くる）でも大儀でも、薔の花を散らさずに、どうか咲かせてくだされよう……」

p. 232

巫女「鴉の鳴かない日はあれど、草葉の陰で……」

巫女「ほんの仮座（かりざ）のことなれば、此れにて俺れは帰るぞよう……」

巫女「鴉の鳴きがそでなくもう……」

勘次「俺れ済まねえ」

女「本当に出たんだよ、可怖（おつかね）えやうだな」

男「蜚（きりぎりす）ぢやねえが、口鳴らさねえぢや居（あ）らんねえな」

男「そんだが、今夜はしみ／＼泣いたんぢやねえけ、あんでもお品さんこた何程（なんぼ）惜しいか知んねえのがだかんな」

p. 233

男「今だつて其（その）嘶すつと幾らでもしてんだかんな」

p. 230

男「この箱の中には何だね、入ってるのは、人形だつて本当かね」

男「なあに今じゃ幣束だとさ」

巫女「これは見せられないんですよ。これ見られると、いくら寄せてみても当たらなくなつちやつてね。自分でいない間に見られても、きっと知れるんですよ」

男「見せられないよ、それが種だから」

勘次「わしにも一つ寄せて見ておくんなさい。死口です」

巫女「それじゃ、笹つ葉折つてきてください」

男「こっちで折つてやろう」

p. 231

巫女「よく呼び出してくれたぞよう」

巫女「姿隠れて出て見れば、何知るまいと思（おも）だろが、おれはその身のところへは、日日（ひにち）毎日ついてるぞ。雨は降らねど養になり、笠になりてよ」

巫女「一度ならず、二度三度、不思議打（ぶ）たせて知らせたに」

巫女「おれが達者でいるならば……」

巫女「くれるよ程の心なら、ほんに苦勞（くる）でも大儀でも、つぼみの花を散らさずに、どうか咲かせてくだされよう」

p. 232

巫女「カラスの鳴かない日はあれど、草葉の陰で」

巫女「ほんの仮座（かりざ）のことなれば、これにておれは帰るぞよう」

巫女「カラスの鳴きが、そでなくも」

勘次「おれ、すまない」

女「本当に出たんだよ。おつかないようねえ」

男「きりぎりすじゃないが、口に出さないではいられないんだねえ」

男「だけど、今夜はしみじみ泣いたんぢやないか。あれでもお品さんのことは、どれほど惜しいか知れないんだからな」

p. 233

男「今だつてその話すると、いくらでもしてるんだからなあ」

女「そんだがよ、先刻（さつき）見てえに泣いてんのに悪口なんぞいふな罪だよなあ」

十六

お品「お内儀さん等何にも心配（しんぺえ）なんざ無くつて晴々（せいせい）として居（え）んでござんせうね」

p. 234

内儀「何故（なぜ）そんなこといふんだい」

お品「そんでもお内儀さん等喰べる心配（しんぺえ）なんざちつともねえんだから、わたしやさうだと思つてせえ」

お品「さうでござんせうかねお内儀さん、わたし等また明けても暮れても無え足んねえの心配（しんぺえ）ばかしゝてんだから、さういことねえ人は心配なんぢやねえんだとばかし思つてたんでござんすよ、ねえ本当に」

p. 238

勘次「わしや、なあに、家（うち）のもんだから面倒見ねえた云（ゆ）はねえね」

男「勘次さん近頃工合がえゝといふ噺だが」

勘次「工合えゝつちこともねえが、此んでも命懸けで働（はたれ）えてんだから、他人（ひと）のがにや大（え）けえ銭（ぜね）になるやうにも見（め）えべが、俺らにこんで爺様（ぢさま）が代（でえ）の借金抜けねえで居（え）んだからそれせえなけりや泣かねえでも畢（を）へんだよ、そんだがそれでばかり動（いご）き取れねえな」

男「そんぢや、其の時にや勘次さんも善（い）い理由（わけ）だね」

勘次「そりやさうだが」

男「勘次さん等それでも穀類はなか／＼有る容子だね」

勘次「其の位（くれえ）なくつちや仕やうねえもの、俺ら此処へ来た当座にや病氣ん時でもからつき挽割麦（ひきわり）ばかしの飯なんぞおん出されて、俺ら随分辛（つれ）え目に逢つたんだよ、こんでさうえこた、忘らんねえもんだかんな」

p. 240

卯平「居たかえ」

p. 241

女「だけどさ、さつきみたいに泣いてるのに、悪口なんぞいうのは罪よねえ」

十六

お品「おかみさんなんかは何にも心配なんかなくつて、せいせいしているんでござんしょうねえ」

p. 234

内儀「なぜそんなこと言うの」

お品「でも、おかみさんは、食べる心配なんかちつともないんだから、わたしはさうだと思つてねえ」

お品「さうでござんしょうかね、おかみさん。わたしら、また明けても暮れても、ない足りないの心配ばかりしてるんだから、そういうことがない人は、心配なんぢはないんだとばかり思つてたんですよ。ねえ本当に」

p. 238

勘次「わしは、なに、うちのものだから面倒見ないとは言わないね」

男「勘次さんも近ごろは具合がいいという話だが」

勘次「具合がいいということもないが、これでも命がけで働いてるんだから、ひとには大変な金になるようにも見えるだろうけど、おれにはこれでも、じいさんの代の借金が抜けないでいるんだから、それさえなけりや泣かないでもすむんだよ。だけどそれだけで動きが取れないな」

男「それじゃ、その時には勘次さんもいいわけだね」

勘次「そりやさうだが」

男「勘次さんは、それでも穀類はなかなかあるようすだね」

勘次「そのくらいなくちゃ仕方ないもの。おれがここへ来たころには、病氣の時でもまるつきり挽割麦ばかりの飯なんぞ出されて。おれは随分辛い目に逢つたんだよ。これで、そういうことは忘れられないものだからな」

p. 240

卯平「いるかい」

p. 241

おつぎ「どれ、俺げもちつと出(だし)て見
ねえか」

与吉「姉(ねえ)は大(え)かくおつ欠(け)
えちや厭(や)だぞう」

おつぎ「おゝ薄荷(はくわ)だこら、口(くち)の中(なか)がすう
ら、おとつゝあげも遣(や)つて見ろ」

p. 242

勘次「えゝから、よきげ嘗(か)めさせろ」

おつぎ「どうしたんだんべ、おとつゝあ」

おつぎ「爺(ぢい)見てえだな、おとつゝあ」

おつぎ「爺(ぢい)だ」

おつぎ「爺(ぢい)は今日(けふ)来た(きた)のか」

勘次「おとつゝあ遅(おそ)かつたな」

卯平「出(で)だすのもそんなに早(はや)かなかつ
たつけが、暫(しばらく)く歩きつけねえ所(ところ)為(な)かなんぼ
にも足(あし)が出(で)ねえで、かう(こう)いに遅(おそ)くなる積(つ)も
なかつたつけが」

おつぎ「余(あ)つ程(ほど)待つ(まち)てゝか爺(ぢい)は」

卯平「火(ひ) (ひい) 吹(ふ)つたけたばかりよ」

卯平「おつうも大(え)かくなつたな、途中(ちゆうちゆう)
でなんぞ行逢(いきや)つちや分(わ)んねえな、
そんだが汝(わ)りや有(あ)繫(か) (まさか) 俺(おれ)れこた忘
れなかつたつけな」

p. 243

おつぎ「忘れ(わ)めえな爺(ぢい)は」

おつぎ「爺(ぢい)げお茶(ちや)入(い) (せ) えべえ」

卯平「俺(おれ)れこと忘(わ)れたんべ此(こ)ら、大(え)か
く成(な)つたと思(おも)つて来(き)たつけが本(ほん)当(とう)に分(わ)んね
え程(ほど)大(え)かく成(な)つたな」

おつぎ「此(こ)んでも学校(がっこう)へ行(い)くんだもの」

卯平「さうら」

卯平「おつう、手拭(てぬぐ) (てねげ) 解(と) (と) えて
見(み)ねえか、野田(の)でも一番(いちばん)うめえんだから」

おつぎ「よき、それ貰(もら)あもんだ。爺(ぢい)呉(く)れるつ
ちのに」

p. 244

勘次「こつちへ上(あ)がつて貰(もら)あもんだ」

おつぎ「遠(と)くの方(かた)のがんだぞ、汝(わ) (われ) う
まかんべ」

与吉「うまかねえやそんなに」

おつぎ「其(その)麼(や) (そんな) こといふもんぢやね
え、そんだら姉(ねえ) げよこしつちめえ」

卯平「俺(おれ)れ持つて来(き)ればなんぼでも訳(わけ)ねえん
だ荷(に)物(もの)があるもんだから、此(こ)れつ切(き)しか

おつぎ「どれ、私(わたし)にも少(すこ)しくれてみない？」

与吉「姉(ねえ)ちゃんは大(お)お大きく欠(け)いぢやいやだぞう」

おつぎ「おお薄荷(はくわ)だね、これ。口(くち)の中(なか)がすう
すうするよ。おとうさんにもあげてごらん」

p. 242

勘次「いいから、よきになめさせろ」

おつぎ「どうしたのよ、おとうさん」

おつぎ「おじいさんみたいねえ、おとうさん」

おつぎ「おじいさんだ」

おつぎ「おじいさんは、きょう来た(きた)の」

勘次「おとうさん、おそかつたな」

卯平「出(で)かけるのもそんなに早(はや)くはなかつた
が、しばらく歩きなれないせい(せい)か、どうに
も足(あし)が出(で)ないで、こんなに遅(おそ)くなるつもり
もなかつたんだが」

おつぎ「大(お)分(ぶん)待つ(まち)ってたの、おじいさん」

卯平「火(ひ)をつけたところさ」

卯平「おつうも大(お)きくなつたな。途中(ちゆうちゆう)でなん
ぞ出(で)会(あ)つたんぢや分(わ)からないな。だけれども、
お前は(お前は)さすがにおれ(おれ)を忘(わ)れなかつたな」

p. 243

おつぎ「忘(わ)れるはずないでしょう、おじいさ
んは」

おつぎ「おじいさんにお茶(ちや)をいれましよう」

卯平「おれ(おれ)を忘(わ)れただろ(う)う、これは。大(お)きく
なつたと思(おも)つて来(き)たんだが、本(ほん)当(とう)に分(わ)から
ないほど大(お)きくなつたな」

おつぎ「此(こ)れでも学校(がっこう)へ行(い)くんだもの」

卯平「さうら」

卯平「おつう、手拭(てぬぐ) (てぬぐ) をといてみないか。野
田(の)でも一番(いちばん)うまいんだから」

おつぎ「よき、それもらいなさいよ。おじい
さんがあげるていうのに」

p. 244

勘次「こつちへ上(あ)がつてもらうんだ」

おつぎ「遠(と)くの方(かた)のだよ。お前(お前)、うまいでし
よう」

与吉「うまくないや、そんなに」

おつぎ「そんなこというもんぢやない。だつ
たらお姉(ねえ)さんによこしてしまいなさい」

卯平「おれ(おれ)は持つて来(き)ればいくらでも訳(わけ)ない
んだが、荷(に)物(もの)があるもんだから、此(こ)れつき

持つちや来(き)ねえつちやつた、此んでも俺ら蔵ぢや此上はねえんだ、炊事(かしき)は汝(われ)すんだんべから、汝そつちへ蔵つて置けな」

おつぎ「大変(たえへん)だつけな爺、荷物あんのになあ、此れだけぢや暫らくあんべよ」

p. 245

卯平「荷物はさうでもねえが、身体(からだ)利かねえでな、どうも」

おつぎ「爺はどうしたつべ、お飯(まんま)たべたんべか」

卯平「おらどつちでもえゝや」

おつぎ「どつちでもえゝつて腹減(はらへ)つちやしやうあんめえな」

おつぎ「菜(さい)葉(え)の漬(つけ)たなどうしたんべ」

卯平「俺ら要らねえや、齒(は)悪くなつちやつて嚙(か)まんねえから」

おつぎ「そんぢや細(こ)かく刻(き)んだらどうしたんべ」

おつぎ「お汁(じゆ) まあ、ちつとも身(み)なんざねえや、よき汝(われ)みんな芋(いも)すくつちやつたな」

卯平「お汁(じゆ)も何も要らねえから一杯(ぱい)搔(か)つ込(こ)んべ」

おつぎ「そんぢやこの醤油(しょうゆ)掛けてんべな」

勘次(かんとし)「それ、底(そこ)の方(かた)へ廻(ま)つて零(こぼ)れらな」

p. 246

勘次(かんとし)「そうれ見(み)ろ」

勘次(かんとし)「まだ其(その)処(ところ)で引(ひ)つくるけえしちや大変(たえへん)だぞ、戸(と)棚(たな)へでも入(い)れ(せ)えて置(お)け」

勘次(かんとし)「その醤油(しょうゆ)は打(う)棄(す) (うつちや)らねえで大事(だいじ) (でえじ)にして置(お)け」

おつぎ「其(その)麼(な) (そんな) こと云(い) (ゆ) はねえつたつて打(う)棄(す)るもなあんめえな」

与吉(よきち)「姉(ねえ) 今(いま)一枚(まい) (めえ) くんねえか」

おつぎ「汝(われ)りや、そつから佳(よ)味(み)かねえなんていふもんぢやねえ、直(ただ)ぐ欲(ほ)しくなる癖(くせ)に」

卯平(うへい)「さうら汝(われ)げ買(か)つて来(き)たんだ、欲(ほ)しけりや幾(いく)らでも持(も)つてけ」

十七

りしか持つてこなかつた。これでもおれの蔵(くら)じゃこの上(うへ)はないんだ。炊事(くわいじ)はお前(まへ)がするんだろうから、お前(まへ)がそつちへ蔵(くら)つておけよ」

おつぎ「大変(たえへん)だったね、おじいさん。荷物(にもの)があるのになあ。これだけでしばらくあるでしょうよ」

p. 245

卯平(うへい)「荷物(にもの)はそんなでもないが、からだ(からだ)がきかなくてねえ、どうも」

おつぎ「おじいさんはどうしたの。ご飯(ごはん)は食べたの」

卯平(うへい)「おれはどつちでもいいや」

おつぎ「どつちでもいいつて、お腹(おな)がすいたら仕方(しかた)ないでしょう」

おつぎ「菜(さい)葉(え)のつけたのはどう？」

卯平(うへい)「おれはいらないよ。齒(は)が悪(わる)くなつちやつて、かめ(か)ないから」

おつぎ「それ(それ)じゃ細(こ)かく刻(き)んだらどうでしょうね」

おつぎ「汁(じゆ)もまあ、全然(ぜんぜん)身(み)なんかないのね。よき、お前(まへ)みんな芋(いも)すくつちやつたのね」

卯平(うへい)「汁(じゆ)も何も(なんにも)いら(い)ないから一杯(ぱい)搔(か)つこも(こ)う」

おつぎ「それ(それ)じゃこの醤油(しょうゆ)を(を)かけてみ(み)ようね」

勘次(かんとし)「それ、底(そこ)の方(かた)へ廻(ま)つてこぼ(こぼ)れるよ」

p. 246

勘次(かんとし)「そうれ見(み)ろ」

勘次(かんとし)「またそ(そこ)でひ(ひ)つくりかえ(か)えしたら大変(たえへん)だぞ。戸(と)棚(たな)へでも入(い)れてお(お)け」

勘次(かんとし)「その醤油(しょうゆ)はすてないで大事(だいじ)にしてお(お)け」

おつぎ「そんなこと言(い)わなく(な)つたつて、う(う)ちやるもの(もの)はいない(ない)でしょうに」

与吉(よきち)「おねえちゃん、もう一枚(まい)くれ(く)れない？」

おつぎ「お前(まへ)は、だ(だ)からう(う)ま(ま)くない(ない)なんて言(い)う(う)もん(もん)じゃ(じゃ)ない。すぐ(すぐ)欲(ほ)しくなる(なる)く(く)せに」

卯平(うへい)「さ(さ)う(う)ら、お前(まへ)に買(か)つて来(き)た(た)んだ。欲(ほ)しければ(れば)いく(いく)ら(ら)でも持(も)つて(て)い(い)け」

十七

p. 247

与吉「煎餅くんねえか」

おつぎ「まださうだこと、そんだから汝げは見せらんねえつちんだ、爺に怒られつから見る」

勘次「欲しいつちんだから出して遣れえ」

p. 248

おつぎ「しらばつくれて」

おつぎ「爺（ぢい）こと起すべか」

おつぎ「爺、お飯（まんま）出来たよ」

卯平「先やつてくろえ」

p. 251

おつぎ「おとつゝあは行けな、爺こと見てやんなくつちや成んめえな」

卯平「俺ら自分でやつから汝りや構あねえで行けよ」

p. 252

卯平「よき、待てる、そら」

女「与吉らたえしたもんだな、始終（とほし）て）もらつてな」

p. 253

与吉「爺」

与吉「爺くんねえか」

卯平「汝りや、何くろつちんでえ」

与吉「呉んねえか、買あんだから」

p. 254

与吉「爺」

p. 255

与吉「爺来てから米しつかり減つてしやうねえつて云（ゆ）つたぞう」

卯平「うむ」

卯平「おとつゝあでもあんべ」

与吉「おとつゝあ、何遍も云（ゆ）つたんだわ」

卯平「云（ゆ）はざらに」

与吉「爺とつてやんべか」

卯平「よこせ」

卯平「さあ」

p. 256

与吉「爺打（ぶ）つとばしたんだわ」

勘次「どうしてだ」

与吉「座敷へ上つたら煙管（きせる）打（ぶ）つゝけたんだ。そんで俺れ煙管とつてやつたんだ」

p. 247

与吉「煎餅くれない？」

おつぎ「またそんなこと。だからお前には見せられないっていうんだ。おじいさんにおこられるからみなさい」

勘次「欲しいっていうんだから出してやれ」

p. 248

おつぎ「しらばつくれて」

おつぎ「おじいさんを起こしましょうか」

おつぎ「おじいさん、ご飯できたよ」

卯平「先に食べてくれ」

p. 251

おつぎ「おとうさんは行きなさいよ。おじいさんの面倒みてやらなくつちやならないでしょう」

卯平「おれは自分でやるから、お前はかまわないで行けよ」

p. 252

卯平「よき、待てる、そら」

女「与吉はすてきだねえ。しょつちゅうもらつてねえ」

p. 253

与吉「おじいさん」

与吉「おじいさん、くれない」

卯平「お前は、なにをくれっていうんだい」

与吉「くれないか、買うんだから」

p. 254

与吉「おじいさん」

p. 255

与吉「おじいさんが来てから米がとても減つて仕方がないって言ったぞ」

卯平「うん」

卯平「おとうさんだろう」

与吉「おとうさん、何遍も言ったんだよ」

卯平「言わないはずはないさ」

与吉「おじいさん、とつてあげようか」

卯平「よこせ」

卯平「さあ」

p. 256

与吉「おじいさんがなぐつたんだよ」

勘次「どうしてだ」

与吉「座敷へ上がったたら、キセルをぶつつけたんだ。それでおれはキセルをとつてやつたんだ」

p. 257

男「身体(からだ)はどうしたえ」

卯平「え、今分ぢや、さうだに悪りいつち
こともねえが」

内儀「それでも勘次は能くするかえ」

p. 258

卯平「ありや、はあ、以前(めえかた)つか
らあ、ゆんだから」

内儀「おつぎはどうだえ」

おつぎ「ありやあそれ、勘次たあ違あから、
何ちつても有繫(まさか)赤ん坊ん時つ
からのがだから」

内儀「節挽(せちびき)はたんとした容子か
えそれでも」

卯平「え、おつうこと連れてつて、南で挽
くなあ挽いたやうだが、桶さ入えた俵で蓋
したつ切(きり)蔵つて置くから、わしや
どのつ位(くれえ)あるもんだか見もしね
えが」

内儀「勘次は軟かい物でも少しは拵(こしら)
えてくれるかね」

卯平「え、毎日(まいんち)同士にたべち
や居んだがなあに齒せえ丈夫なら粗剛(こ
うえ)つたつて管(かま)やしねえが」

内儀「それぢや蕎麦粉でも少し遣らうかね蕎
麦搔(そばがき)でも拵(こしら)へてた
べた方が善(い)いよ、蕎麦に打(う)つ
ちや冷えるが蕎麦搔は暖まるといふから
ね」

内儀「勘次も泣きだから、それでも今に生計
(くらし)もだん、善くなんだらうから、
さうすりや悪くばかりもすまいよ、どうも
昔から合性が悪いんだからね、まあ年齢(と
し)とつたら仕方がないから我慢して居る
んだよ、余(あんま)り酷けりや他人(ひと)
が共々見ちや居ないから、それだが勘
次も有繫(まさか)それ程でもないんだら
うしね」

p. 259

勘次「おつう、汝(われ)此の蕎麦つ粉(こ
な)出して遣つたのか」

おつぎ「俺ら出すめえな」

勘次「蕎麦ツ搔なんぞにしたつて詰りやしね
え、碌に有りもしねえ粉だ」

p. 260

p. 257

男「からだはどうしたい」

卯平「うん、このごろは、そんなに悪いつて
こともないんだけど」

内儀「それでも勘次はよくするかい」

p. 258

卯平「あれは、もう、まえからああいうんだ
から」

内儀「おつぎはどうだい」

おつぎ「あれはそれ、勘次とは違うから。何
と言つてもさすがに赤ん坊の時からのだか
ら」

内儀「節挽きはたくさんしたようすかい、そ
れでも」

卯平「ええ、おつうを連れてつて、南で挽く
のは挽いたやうだが、桶に入れたままで蓋
したつきりしまつておくから、わしはどの
くらいあるものか見もしないが」

内儀「勘次は軟かいものでも少しはこしらえ
てくれるかね」

卯平「ええ、毎日いっしょに食べてはいるん
だが、なあに齒さえ丈夫なら、堅くたつて
かまいやしないが」

内儀「それじゃ、そば粉でも少しやろうかね。
そば搔きでもこしらえて食べた方がいい
よ。そばに打つと冷えるけど、そば搔きは
暖まるというからね」

内儀「勘次も仕事ぎらいだから。それでも今
に暮らしもだんだんよくなるんだらうか
ら、そうすれば悪く当たるだけじゃないだ
らうよ。どうも昔から合性がわるいんだか
らね。まあ年とつたら仕方がないから我慢
しているんだよ。あまりひどければ人がみ
んなだまつて見ていないから。だけ勘次
も、まさかそれほどでもないんだらうしね」

p. 259

勘次「おつう、お前はどのそば粉を出してや
つたのか」

おつぎ「私は出さないよ」

勘次「そば搔きなんぞにしたつてつまらない。
ろくにありもしない粉だ」

p. 260

勘次「これも、はあ、有りやしねえ」
おつぎ「おとつゝあ、それにやねえのがんだぞ」
勘次「えゝから、此れつ切ぢやきかねえのがんだから」
卯平「おつう、汝（われ）まつと此処さ火（ひい）とつてくんねえか」
おつぎ「何でえ爺」
卯平「うむ、袋よ」
おつぎ「此れだんべ爺、蕎麦つ粉へえつてたのな、俺らどうしたんだか知んねえから桶ん中さ明けて置いたつきや、そんぢや爺がんだつけなあそら、どうして袋さんぞ入（せ）えてたんでえ爺は」

卯平「蕎麦ツ搔でもしたらよかつつてお内儀さん出したつけのよ」

p. 261

おつぎ「さうかあ、そんぢや悪かつたつけな爺そんぢや俺れ今入えてやつかなよ」

与吉「俺れ注いでやつべか爺」

与吉「出来たかあ」

おつぎ「よき、何でえ汝りや、お飯（まんま）くつたばかりで」

卯平「汝も喰へ」

十八

p. 263

おつぎ「そんだつておつゝつあは、よき欲しいつちから出して俺れと焼いたんだあ、食べたくなつちやしやうあんめえな」

p. 264

おつぎ「爺がにや佳味かあんめえ、おとつゝあはまつと丁寧（ぢんねい）に打（ぶ）てばえゝのに疎忽敷（そゝつかしい）から」

卯平「どうせ俺らあ、佳味えつたつてさうだに減る程でも食ふべぢやなし、管（かま）やしねえが」

p. 274

与吉「爺よう」

勘次「おつう」

p. 275

おつぎ「此処（こゝ）に居たよ、そんなに喚ばらなくつてえゝから、何だかおとつゝあ

勘次「これも、もう、なくなった」

おつぎ「おとうさん、それにはなかつたんだよ」

勘次「いいから、これつきりじゃなかつたんだから」

卯平「おつう、お前もつとここへ火をとつてくれないか」

おつぎ「どうしたの、おじいさん」

卯平「うん、袋さ」

おつぎ「これでしょう、おじいさん、そばが入っていたのは。私はどうしたのか分からないから桶の中へあけておいたのよ。それじゃ、おじいさんのだったのね、それは。どうして袋へなんぞ入れといたのよ、おじいさんは」

卯平「そば搔きにでもしたらよかろうって、おかみさんがくれたのさ」

p. 261

おつぎ「そうかあ。それじゃ悪かつたわね、おじいさん。それじゃ私今入れてやるからね」

与吉「おれが注いでやろうか、おじいさん」

与吉「できたかあ」

おつぎ「よき、何よお前、ご飯食べたばかりなのに」

卯平「お前も食べ」

十八

p. 263

おつぎ「だつておとうさんは、よきが欲しいつていうから出して、私と焼いたのよ。食べたくなつたらしようがないでしょう」

p. 264

おつぎ「おじいさんには、おいしくないでしょう。おとうさんはもつと丁寧（ぢんねい）に打（ぶ）てばいいのに、そそっかしいから」

卯平「どうせおれは、うまいとつたつて、そんなに減るほど食おうというんぢやなし、かまいやしないが」

p. 274

与吉「おじいさん」

勘次「おつう」

p. 275

おつぎ「ここにいるよ。そんなに呼ばなくつていいから。どうしたの、おとうさんは」

は」
勘次「汝りやそんなに夜更しするもんぢやねえ」
おつぎ「明日（あした）の障りにでも成りやしめえし管（かま）あこたあんめえな、おとつゝあは」
卯平「汝りやえゝよ」

一九

p. 276
おつた「おゝ暑え、なんち暑えこつたかな」
おつた「おや、まあ能く斯うなあ、何処にも草だら一つなくつて、見ても晴々とする様だ」
おつた「たんと穫れべえなこんぢや、幹（か）ら）ばかしてもたえした出来だな」
p. 277
勘次「何でえ姉等（あねら）」
p. 278
おつた「どうしたつちこともねえがなよ、俺らこつちの方通つたもんだから一寸（ちよ）つくら）踏ん掛（がゝ）つて見た処さ」
おつた「俺ら暫くこつちへも来（き）なかつたつけが、此らおつぎぢやあんめえか、大層（たえそ）えゝ娘（むすめ）に成つちやつたなあ、尤もはあ恠（か）うい手合（てえ）はちつと見ねえでちや分んなく成んな直（すぐ）だかん、其の割にしちや俺ら見てえなもな年齢（とし）はとんねえものさな」
p. 279
おつた「冷たくつて本当（ほんと）に晴々とえゝ水ぢやねえか、俺ら方（ほ）の井戸見てえに柄杓で汲み出すやうなんぢや、ぽか／＼ぬるまつたくつて」
おつぎ「おとつゝあ、お茶沸いたぞ」
勘次「うむ」
勘次「姉（あね）、お茶沸いたとう」
おつぎ「お茶おあがんなせえね」
おつた「能くまあかういに作つたつけな、俺らもはあ、好きは好きだが自分ぢやそつちだこつちだで作れねえもんだ、此れまあ朝つばら涼しい内に見たらどら程えゝこつたかよ」

勘次「お前は、そんなに夜更かしするもんぢやない」
おつぎ「あしたの障りにでもなりはしないのに、かまうことはないでしょう、おとうさん」
卯平「お前はいいよ」

一九

p. 276
おつた「おお暑い暑い。なんて暑いことかねえ」
おつた「おやおやまあ、よくこうねえ、どこにも草一つなくて、見てもせいせいするようだ」
おつた「たくさんとれるでしょうねえ、これじゃ。からだけでも、たいした出来だね」
p. 277
勘次「どうしたんだい、ねえさんは」
p. 278
おつた「どうしたってこともないがね。私はこつちの方を通つたもんだから、ちよつと寄つてみたところなのよ」
おつた「私はしばらくこつちへ来なかつたが、これはおつぎじゃないかね。大層いい娘になつちやつたねえ。もつとも、もうこういう連中は、ちよつと見ないでいると分らなくなるのはすぐだからね。その割には、私みたいなものは年をとらないものね」
p. 279
おつた「冷たくて本当にせいせいしていい水じゃない？ 私の方の井戸みたいに、ひしゃくで汲みだすやうなんぢや、ぽかぽか生ぬるくつて」
おつぎ「おとうさん、お茶沸いたわよ」
勘次「うん」
勘次「ねえさん、お茶沸いたつて」
おつぎ「お茶おあがんなさいね」
おつた「よくまあこんなに作つたねえ。私もまあ、好きなことは好きだが、自分じゃあだこうだで作れないのよ。これまあ、朝つばら涼しいうちに見たら、どんなにいいことかねえ」

p. 280

おつき「お暑うござんすねどうも」

p. 281

おつた「夏蕎麦でもとれんなかうい塩梅（あんべえ）ぢや粒も大（えけ）え様だな」

勘次「馬鹿に降つてばかり居た所為か幹（から）ばかり延びちやつて、そんだがとれねえ方でもあんめえが、夏蕎麦とれる様ぢや世柄（よがら）よくねえつちから、恁んなもなどうでもえゝやうなもんだが」

おつた「本当（ほんど）に俺ら先刻（さつき）からさう思つてんだが立派な花ぢやねえかな」

勘次「うむ、そんだが碌（ろく）に有りもしねえ肥料（こやし）ばかり使あれて」

おつた「おめえ植ゑたんぢやねえのか」

p. 282

勘次「なあに爺様（ぢいさま）そつちこつちから持つて来て植ゑたてたのよ、去年はそんでも其処らへ玉蜀黍位（たうもろこしぐれえ）作れたつげが、此れ、邪魔だとも云（い）はんねえしなあ」

おつた「俺ら暫く来（き）ねえから知らなかつたつげが、そんでも野田から引つこんでか」

勘次「うむ、はあ二年に成らえ」

おつた「余つ程の年齢（とし）だつぺが丈夫（ぢやうぶ）けえそんでも」

勘次「丈夫なこたあ、魂消る程丈夫だが何でも自分の好きなら働く容子で、其処らほうつき歩いちや小遣錢（こづけえぜね）位（ぐれえ）はとつてんだな塩梅（あんべえ）しきが」

おつた「そんぢや忙（いそが）しい時にやちつたあ手伝つて貰へてよかんべな」

勘次「なんたら一つ手伝あなんぢや有りやしめえし、それからはあ、此方も頼んもしねえが」

おつた「尤もさういへば壮（さかり）の頃でも俺らあ知つてからは仕事は上手で行（や）ると出しちやみつしら行る様だつげが、好きぢやねえ塩梅（あんべえ）だつげのさな」

勘次「其れ処（どこ）ぢやねえや、俺らと一緒に居んのせえ厭（や）なんだんべが、別々に成つちやつたな、つまんねえ、余計な錢

p. 280

おつき「お暑うございますね、どうも」

p. 281

おつた「夏そばでも、とれるのは、かうい塩梅（あんべえ）ぢや粒も大きいようね」

勘次「ばかに降つてばかりいたせい、からばかり延びちやつて。だけども、とれない方でもあるまいが。夏そばがとれるようぢや景気がよくないっていうから、こんなものはどうでもいいようなものだが」

おつた「ほんとに私はさつきからそう思つてるんだけど、立派な花ぢやないかねえ」

勘次「うん、だけどろくにありもしない肥やしばかり使われて」

おつた「あんたが植ゑたんぢやないの」

p. 282

勘次「なあに、じいさんがあつちこつちから持つてきて植ゑたのさ。去年はそれでも、そこらへ、トウモロコシくらい作れたんだが、これ、じゃまだとも言えないしなあ」

おつた「私はしばらく来ないから知らなかつたけど、それでも野田から引つこんだの？」

勘次「うん、もう二年になるよ」

おつた「よっぽどの年だろうけど丈夫（ぢやうぶ）かい、それでも」

勘次「丈夫なことは、たまげるほど丈夫だが、何でも自分の好きなら働くようすで、そこらほうつき歩いちや小遣錢（こづけえぜね）ぐらいはとつてるんだな、様子が」

おつた「それじゃ忙しい時には少しは手伝つてもらえて、いいでしょうねえ」

勘次「なに一つ手伝うなんてつもりがありやしないし、だからもう、こつちも頼みもしないけど」

おつた「もつともそう言えば、若いころでも、私が知つてからは、仕事は上手で、やりだすとしっかりやるようだったけど、好きぢやないようすだったねえ」

勘次「それどころぢやないよ。おれと一緒にいるのさえ、いやなんだろうけど、別々になつちやつたよ。つまらない、余計な錢な

(ぜね) なんぞ遣 (つか) っつて、俺らだつて大 (えけ) えこと手間打 (ぶ) つこんだな、なあに俺ら爺様せえちつと其積で行 (や) っつて呉れせえすりや、幾らでも面倒見るつちつてんだが、如何 (どう) いふ料簡のもんだか俺らがにや分んねえが」

p. 283

おつた「そんぢや、此の側 (そば) な小屋ぢやあんめえ、俺ら先刻 (さつき) 見た時や肥料小屋 (こやしごや) だとばかり思つてたな、本当 (ほんど) にかうだ処 (とこ) へ酔狂な癖よな、なんでも世を渡しちや誰 (たれ) でも同じこと相続人の気味 (きあぢ) 悪くしねえ様にやんなくつちや畢へねえよ、そんだがそれも性分でああ、他 (ほか) からちやしやうねえものよ」

勘次「俺らだつてこんで一人殖えちや殖えた丈に麦米の心配 (しんぺえ) からして掛んなくつちやなんねえんだから、其の積で居てくなくつちや、此んで心持ちや余 (あんま) り面白かねえかんな、毎日 (まいにち) 苦虫喰つ潰 (ちや) したやうな面 (つら) つきばかりされたんぢや厭 (や) んなつちまあぞ、本当 (ほんたう) に」

おつた「そりやさうにも何にもよ、他人でせえこんで軟 (やつ) けえ言辞 (ことば) でも掛けられつと、後ぢや欲しく成るやうな物でも出す料簡にもなるもんだかんなあ」

おつた「そんだがおめえもたえした働きだと見 (め) えんな、かうえに俵 (たわら) までちやんとして、大概 (てえげえ) な百姓ぢやおめえ此手にや行かねえぞ、俺ら世辞 (つや) いふわけぢやねえが」

勘次「俺らも今なつてからぢやこれ、癖するやうなもんだが一しきりや泣いたかんな本当 (ほんとう) に、こんでも此の位 (くらえ) にすんにやゝつとこせえだぞ」

おつた「おつぎも働け相だな、きり／＼としてなあ、先刻 (さつき) 俺ら蕎麦打 (ぶ) っつてんの見てゝも心持ゝ様だつてよ、仕事はなんでも身拵 (みごしれ) えのえゝもんでなくつちやなあ、此れもおめえが仕込の所為だんべが」

p. 284

おつた「そりやさうとおつかさまに其俣 (そ

んぞ使つて。おれだつて大分手間をつぎこんだな。なあにおれは、じいさんさえ少しそのつもりでやってくれさえすれば、いくらでも面倒見るって言ってるんだが、どういう料簡のもんだか、おれには分からないが」

p. 283

おつた「それじゃ、この側の小屋じゃないかね。私はさつき見た時は肥料小屋だとばかり思つてたね。本当にこんなところへ酔狂な話よねえ。なんでも世帯を渡したら、だれでも同じこと、相続人の気分を悪くしないようにやらなくちゃいけないよ。だけどそれも性分だねえ、ほかからじゃ仕方のないものよ」

勘次「おれだつて、これで一人ふえたらふえただけに、麦米の心配からして掛からなくてはならないんだから、そのつもりでいてくれなくちゃ、これで心じゃあまり面白くないからね。毎日苦虫かみつぶしたやうな顔つきばかりされたんぢや、嫌になつちやうよ、本当に」

おつた「そりやそのとおりよ。他人でさえ、これで優しいことばでも掛けられると、後では欲しくなるやうな物でも出す料簡にもなるものだからねえ」

おつた「だけど、あんたもたいへんなかせぎだと見えるねえ、こんなに俵までちやんとして。大抵の百姓じゃ、あんた、こんなふうにはいかないよ。私はお世辞いうわけじゃないが」

勘次「おれも今なつてからじゃこれ、やつと話ができるやうなものだが、ひとしきりは泣いたからねえ、本当に。これでも、このくらいにするのは、やつとこさだつたぞ」

おつた「おつぎも働けそうだねえ。きりきりとしてなあ。さつき私はそば打つてのを見てても気持ちがいいやうだつたよ。仕事はなんでも身ごしらえのいいものでなくつちやあねえ。これも、あんたの仕込みのせいだろうが」

p. 284

おつた「そりやそうと、おかあさんにそつく

つくり) だなあ」

勘次「俺らもこんで鼻(かゝあ)に死なれた当座にや此れも役に立たねえから泣きぬいたよ」

おつた「ほんに、俺ら彼(あ)ん時にや来(き)ねえつちやつたつけが、遠くの方へ行つたもんだから、おめえにやはあ悪く思はれべえたあ思つたのよ」

おつた「俺ら先刻(さつき)から見てんだが道具は能く大事(でえじ)にすつと見えて鎌なんぞでも光つてつことなあ、それに能くかう三日月姿(なり)に減らせたもんだな、研ぎ方も余つ程気をつけなくつちやかうは出来ねえな、道具も斯うすりや何時までゝも使へて廉えものさな」

おつた「唐鍬もたえしたもんぢやねえかな」

勘次「うむ、それでも俺らが見てえなゝ、滅多持つてるもなねえかな」

p. 285

おつた「どうすんでえこんな大(えけ)えの、引つ立てるばかりでも大変(たえへん)なやうぢやねえけ」

勘次「そんだつて姉(あね)は此れ見ろな」

勘次「此んだから知らねえもな俺れ手懐(てぶところ)してつと、如何したんでえなんて聞くから俺らかういに腫つちやつて痛くつてしやうねえんだなんて、そろつと出して見せつと、成る程こりや痛かんべえなんて魂消らなあ、唐鍬なんぞ錢(ぜね)出しせえすりや幾らでも有んが、此の手つ平(びら)はねえぞ、二年三年唐鍬持つたんぢや慇(ちや)は成んねえかな、俺らがな唐鍬の柄(え)さすつかりくつゝいぢやつたんだから、こんで毎年(まいとし)四五反歩(ぶり)位(ぐれえ)は打開墾(ぶちおこ)すんだから」

勘次「旦那の山林(やま)開墾(おこ)しちやうめえのよ、場所によつちや陸稲も作れるし、俺らこんでも三四反歩(ぶり)づつは作つてんだが、今年(ことし)はえゝ塩梅(あんべえ)な降りだから大丈夫(だえじよぶ)だたあ思つてんのよ、どうえもんだか以前(めえかた)は陸稲つちとはあ、とれねえ様もんだつけがな」

おつた「其(その)麼(んな)に作つちや大層(た

りだねえ」

勘次「おれもこれで女房に死なれた当座は、これも役に立たないから泣きぬいたよ」

おつた「ほんとに、私はあの時には来なかつたけど、遠くの方へ行つたもんだから、あんたにはもう悪く思われるだろうとは思つてたのさ」

おつた「私はさつきから見てるんだけど、道具はよく大事(でえじ)にすると見えて、鎌なんぞも光つてることねえ。それによくこう三日月(なり)に減らせたもんだねえ。研ぎ方もよっぽど気をつけなくつちや、こうはできないねえ。道具もこうすりや、いつまででも使えて安いものさねえ」

おつた「唐鍬もすごいもんぢやないかね」

勘次「うん、それでもおれのみたいのは、めつたに持つてるものはないからなあ」

p. 285

おつた「どうするの、こんな大きいのを、引き立てるだけでもたいへんなようぢやないの」

勘次「だつて姉(あね)さんこれ見ろよ」

勘次「これだから、知らない者はおれが手を懐(て)に入れてると、どうしたんだいなんて聞くから、おれはこんなに腫れちやつて痛くつてしょうがないんだなんて、そろつと出して見せると、なるほどこれは痛いだろうつて、たまげるよ。唐鍬なんぞは錢(ぜね)出しさえすればいくらでもあるが、この手の平(びら)はないぞ。二年三年唐鍬持つたんぢや、こうはならないからな。おれのは唐鍬の柄(え)にすつかりくつちやつたんだから。これで毎年(まいとし)四五反歩(ぶり)ぐらゐは開墾(ぶちおこ)するんだから」

勘次「旦那の山を開墾(おこ)すればうまいんだよ。場所によつては陸稲も作れるし、おれはこれでも三四反歩(ぶり)づつは作つてるんだが、今年(ことし)はいい塩梅(あんべえ)な降りだから大丈夫(だえじよぶ)だとは思つてるのさ。どういふものか以前(めえかた)は陸稲つていふともう、とれないようなものだったがね」

おつた「そんなに作つちや、たいへんなもの

えそ) なもんぢやねえかな

勘次「陸稲も地(ぢ)が珍らしい内は出来るもんだわ、穂の出た割にや分(ぶ)は抜けねえが、それでも開墾(おこ)したばかりにや草は出ねえから手間が要(え)らねえしな、それに肥料(こやし)つちやなんぼもしねえんだから、尤も三年も作つちや其の手にや行かねえが、其ん時や以前(もと)の山林(やま)になんだから可怖(おつかね)えこともなんにもねえのよ」

p. 286

おつた「余つ程とればえな、三四反歩(ぶり)も作つちやなあ」

勘次「こんで穂の出際に雨でもえゝ塩梅(あんべえ)なら、反で四俵(よ)なんざどうしてもとればと思つてんのよ」

おつた「陸稲とも云はんねえもんだな、以前(めえかた)と違つて今の時世(ときよ)ぢやさうだからこんで場所によつちや、百姓にもたえした起き転びがあるのよなあ、俺ら方(ほう)見てえに洪水(みづ)で持つてかれてばかり居つ処(とこ)も有んの山林(やま)んなかで米とれるなんて」

勘次「さうよ、此処(こゝ)らは洪水(みづ)の心配(しんぺえ)はさうだにしねえでもえゝ処(とこ)だかんな」

勘次「おつう、彼(あ)の薙(らつきやう)でも出して見せえ、土用前(めえ)に採つて直ぐ漬(たく)んだから、はあよかんべえ」

p. 287

おつた「こんで同胞(きやうでえ)のえゝ嘶聞(しき)くな悪かねえもんだよ、有繫(まさか)自分(みづか)ばかりよくつて他(ほか)の同胞(きやうでえ)にや管(かま)あねえつちいものもねえかんな」

おつた「俺(おれ)らおめえにちつと相談(さうだん)に乗つて貰(もら)え(もれ)えてえと思ふこと有つて来たんだつけがなよ」

勘次「何(なに)だんべ」

おつた「なあにたえしたこつちやねえが、盲目(めくら)の野郎(やろう)に嫁(よめ)を世話(せわ)されるもんだからどうしたもんだんべかと思つてよ」

勘次「姉(あね)貰(もら)へたけりや他人(ひと)にや管(かま)あこたあ有(あ)んめえな」

おつた「さう云(い)つちめえばさうだがなよ、そんだつて同胞(きやうでえ)に一(ひと)嘶(し)聞(き)な」

ぢやないかねえ」

勘次「陸稲も土地(ち)が珍(めづ)しいうちはできるもんだよ。穂(ほ)の出た割(わり)には歩止(あ)まりは悪いが、それでも開墾(おこ)したばかりには草(くさ)は出(い)ないから手間(てま)がいら(い)ないしね。それに肥料(ひょうりょう)なんていくらもしないんだから。もつとも三年(さんねん)も作(つく)ると、そんなふうには行(い)かないが、その時(とき)には以前(いぜん)の山林(さんりん)になるんだから、こ(こ)わいことも何(なに)もないのさ」

p. 286

おつた「大分(おほぶん)とれるだろうねえ。三四反歩(さんしよはんぽ)も作(つく)つちやねえ」

勘次「これで穂(ほ)の出(い)ぎわに雨(あめ)でもいい塩梅(しんぺえ)なら、一反(いっはん)で四俵(よ)ぐら(ら)いは、どうみてもとれるだろうと思(おも)つてのさ」

おつた「陸稲(りくでん)なんてと、ばかにできないもんだな。以前(いぜん)と違(ちが)つて今(いま)の世(よ)の中(なか)じゃそんなふうだから、これ(こゝ)で場所(ばしょ)によつては、百姓(ひやくしやう)にもたいへんな運(うん)不(ふ)運(うん)があるのよねえ。私(わたし)の方(かた)みたい(たい)に洪水(みづ)で持つてかれてばかりいるところもあるのに、山(やま)の中(なか)で米(こめ)がとれるなんて」

勘次「そうだよ、こ(こ)こ(こ)らは洪水(みづ)の心配(しんぺえ)はそんなにしなくてもいいところだからな」

勘次「おつう、あのラッキョウ(らっきょう)でも出してみろ、土用前(どようぜん)にとつてすぐ漬(たく)けたんだから、もういいだろう」

p. 287

おつた「これで、きょうだいのいい話を聞(き)くのは悪(わる)くないもんだよ。まさか自分(みづか)ばかりよくつて、ほか(ほか)のきょうだいに(か)まわ(わ)ない、つていうものもないからねえ」

おつた「私(わたし)は、あん(あん)たにち(ち)よつと相談(さうだん)に乗(の)つてもら(もら)いたいと思(おも)うことがあつて来た(きた)んだがねえ」

勘次「何(なに)だろう」

おつた「なあに、たいしたこと(こと)じゃないけど、めくら(めくら)の野郎(やろう)に嫁(よめ)を世話(せわ)されるもんだから、どうした(した)ものかなと思(おも)つてね」

勘次「姉(あね)さんがもら(もら)いたけりや他人(ひと)にかま(か)まうこと(こと)はないだろう」

おつた「そう言(い)つてしま(しま)えばさ(さ)うだけ(だけ)ど(ど)ね、それでも、きょうだいに(い)言(い)も話(わ)を(を)しない

はなし)もねえなんて後で文句云はれても、黙ってちやおめえ口が開(あ)けめえな、そんだから俺らおめえげ耳打ちして置くべと思つたんだな

勘次「俺ら何も不服いふ席はねえな」

p. 288

おつた「そんだらえゝがなよ、彼(あ)れもはあ廿七に成(なる)んだから俺らもこんでまあ心配(しんぺえ)はしてたんだが、自分でもそれ無え足んねえの心配が絶えねえもんだから、思つちや居ても手が出ねえのよ、自分の餓鬼のことおめえ全然(まるつきり)どうなつても管あねえたあ思へねえよこんで」

おつた「彼(あれ)もそれ途中で盲目に成つたんだから、それまでに働いて身体(からだ)は成熟(でき)てるしおめえも知つてる通りあんで居て仕事も出来るしするもんだから、難有えことに不具(かたわ)でも嫁世話すべつちいものもあるやうな訳さなあ、何でも人間は働き次第(しでえ)だよ、おめえだつて働くんでばかり他人(ひと)にや好く云はれてべえちやねえけえ、そんで俺れもその女は見たが、女はそれ悪いがな、そんだつて盲目だもの目鼻立見べえちやなし、心底(しんてえ)せえよけりやえゝと思つてな」

勘次「そりやよかんべなそんぢや」

おつた「そんで姫(よめ)持たせるにしても折角こつちに居て働いてんだから俺ら自分の処(とこ)へは連れて行く訳にや行かねえと思つてな何ちつてもそれ、知つてつ処(とこ)でなくつちや盲目だから面倒見てくれるつち人もあんめえしなあ、それから俺ら其処んとこも心配して居たんだが、丁度此村落(むら)にえゝ塩梅(あんべえ)貸してもえゝつち家(うち)有るつちもんだから、序だと思つて見て来たが、此处からぢやあつちの方のそれ知つてべえ仕切つて貸すつちんだから、俺ら其処さ入(え)れてえと思つて、おそこそ聞いて見たんだが借りんのにや保証人無くつちや駄目だつちから、近くぢやあるしおめえに保証に立つて貰(もれ)えてえと思つてな」

なんて後で文句を言われても、黙ってたら、あんた、申しひらきできないでしょう。だから私は、あんたに耳打ちしておこうと思つたのよ」

勘次「おれは何も不服を言うことはないねえ」

p. 288

おつた「それならいいがね。あれももう廿七になるんだから、私もこれでまあ心配はしていたんだが、自分でもそれ、ない足りないの心配が絶えないもんだから、思つてはいても手が出ないのさ。自分の子どものことを、あんた、まるつきりどうなつてもかまわないとは思えないよ、これで」

おつた「あれもそれ、途中で盲目になつたんだから、それまでに働いて、からだはできてるし、あんたも知つてるとおり、あれで仕事もできるしするもんだから、ありがたいことに、かたわでも嫁を世話しようというものもあるやうな訳さ。何でも人間は働き次第だよ。あんただつて働くからこそ、他人によく言われてるんじゃないかい。それで私もその女は見たが、女はそれは悪いけど、それでも盲だもの、目鼻立を見ようというわけじゃなし、氣立てさえよけりやいと思つてね」

勘次「そりやいいだろうね、それじゃ」

おつた「それで嫁持たせるにしても、せつかくこつちにいて働いてるんだから、私は自分のところへ連れていくわけにはいかないと思つてね。何と言つてもそれ、知つてるところでなくつちや、盲だから面倒見てくれるっていう人もないだろうしねえ。だから私はそこのところも心配していたんだけど、ちょうどこの村にいい塩梅に貸してもいいってうちがあるっていうもんだから、ついでだと思つて見て来たが、ここからぢやあつちの方の、それ知つてるだろう、仕切つて貸すっていうんだから。私はそこへ入れたいと思つて、いろいろ聞いてみたんだけど、借りるのには保証人がなくちゃだめだつて言うから、近くでもあるし、あんたに保証に立つてもらいたいとか思つてね」

p. 289

勘次「厭(や)だよ俺らそんなこと」

おつた「そんぢや仕方やうねえな、どうしてだ
んべなまた、折角彼(あれ)が身も堅まん
だからさうして呉れゝばえゝんだがな」

勘次「笹棒(べらぼう)、家賃でも滞つた日に
や、俺れ弁償(まよ)はなくつちや成りや
すめえし、それこさ俺らが身上なんぞ潰
れても間にやえやしねえ、厭だにもなんに
も」

おつた「そんなこと云(ゆ)つたつておめえ、
彼(あれ)だつて独りで居んぢやなし持
つもの持つて働くのに三十銭や五十銭の家
賃の払へねえことも有んめえな、それも何
ならおめえ一月でも二月でも見試(みため)
して、その時見込なけりや身抜(みぬけ)
しても管(かま)えやしねえな」

勘次「それでも厭だよ、俺らさういゝ斬ぢや聞
きたくもねえ」

おつた「酷く忙しいこつたな」

勘次「忙しいとも田の草もまだ掻きやしね
えんだ、土用になつてからだつて幾らも照
りやしめえし、降つてばかり居つから見ろ
うあれ、隣の旦那等(たち)だつて今頃麦
打(ぶ)つてる騒ぎだあ、百姓はこの頃の
時節に余計な暇なんぞねえから」

p. 290

おつた「うむ、たえした挨拶だな、俺らまた
姉弟(きやうでえ)つちやさうえもんぢや
あんめえと思つてたんだつけな」

勘次「姉等(あねら)が云ふこと聴いたつ位
どんなことされつか分んねえから」

おつた「什麼(どんな)ことするつて俺ら泥
棒はしねえぞ、勘次」

おつた「おやこつちのおとつゝあん、暫くで
がしたねどうも、御機嫌よろしがすね」

卯平「まあこつちへでも来さつせえね」

卯平「俺らいま外(ほか)から帰(けえ)つ
て来たばかりだが、何でがすね」

おつた「ほんにはあ、他人(ひと)にや聞か
せたくもねえこつたがねえ、わしもそれ盲
目(めくら)の野郎が一人あんだが、これ
三十近くにもなるものをねえ、只打棄つて
も置けねえから嫁とらせべと思つて、えゝ
塩梅(あんべえ)のがそれ口掛つたもんだ

p. 289

勘次「いやだよ、おれは、そんなこと」

おつた「それじゃ仕方がないね、どうしてだ
ろうねまた、せっかくあれの身も固まるん
だから、そうしてくれればいいんだがねえ」

勘次「べらぼう。家賃でも滞つた日には、お
れが弁償しなくつちやならないし、それこ
そおれの身上なんぞは潰れても間に合いや
しない。いやにもなんにも」

おつた「そんなこと言つたつて、あんた、あ
れだつて独りで居んぢやなし、持つもの
を持つて働くのに三十銭や五十銭の家賃の
払えないこともないだろうね。それも何な
ら、あんた一月でも二月でもためしてみ
て、その時見込みがなけりや、やめてもかま
いやしなないがね」

勘次「それでもいやだよ。おれはそういう話
じゃ聞きたくもない」

おつた「ひどく忙しいことねえ」

勘次「忙しいとも。田の草もまだ掻きやしな
いんだ。土用になつてからだつて、いくら
も照りやしなないし、降つてばかりいるから、
見ろあれ、隣の旦那たちだつて今ごろ麦を
打つてる騒ぎだ。百姓はこのごろの時節に
余計な暇なんぞないから」

p. 290

おつた「うん、りっぱな挨拶ねえ。わたしは
また、きょうだいつて、そういうもんぢや
ないと思つてたんだつね」

勘次「姉さんが言うことをきいていたら、ど
んなことをされるか分からないから」

おつた「どんなことをするつて、私は泥棒は
しないよ、勘次」

おつた「おやこつちのおとうさん、しばらく
でしたね。どうも、ご機嫌よろしいですね」

卯平「まあ、こつちへでも来なさいね」

卯平「おれはいま外から帰つてきたばかりだ
が、何ですな」

おつた「ほんとはまあ、ひとには聞かせたく
ないことだがねえ。私もそれ、めくらの野
郎が一人あるんだが、これが三十近くにも
なるものをねえ、ただうつつやつても置け
ないから嫁をとらせようと思つて、いい塩
梅(あんべえ)のがそれ、口が掛かつたもんだから、勘

から勘次げも一嘶すべと思つて来た処（ところ）なのさ、わしもこんで義理は欠くの厭（や）だからね」

p. 291

おつた「さうしたらこの村落（むら）にえゝ塩梅（あんべえ）の家（うち）あるもんだから借りて身上持たせべと思つて保証に立つてくるつちつた処（ところ）がたえした挨拶なのさ、三十銭か五十銭の家賃をねえ、不便（ふびん）だんべぢやねえかねえ不具（かたわ）の甥っ子のことをねえ、保証に立つた位身上潰れるつち挨拶なのさ、ねえこれ、年齢（とし）とつちやこつちのおとつゝあん先も短けえのに心底のえゝものでなくつちや、万一（まさか）の時が心配（しんぺえ）だからねえ、後の者の厄介（やくけえ）に成りてえつちな皆（みんな）おんなじだんべぢやねえか、ねえこつちのおとつゝあんさうでがせう、そんでそれ姫つちのが心底のえゝ女だつちんだからわしも欲しいのさ本当（ほんたう）の嘶（なげ）がねえ、さう云（ゆ）（ゆ）つちや我慾（わがよ）の様（よう）だがおんなじもんなら軟（やつ）けえ言辞（ことば）でも掛けてくれる嫁でなくつちやねえ、さうちやあんめえかね」

卯平「そりや、はあ、さうだが」

p. 292

勘次「姉等（あねら）、大層なこと云つたつて、老人（としより）の面倒見たゝ云へめえ」

おつぎ「おとつゝあ黙つてるもんだ」

おつぎ「お昼餐（ひる）だぞはあ」

おつた「そんぢやこつちのおとつゝあん、お八釜敷（やっ）がした、わしや帰（けえ）りませうはあ、一刻も居（い）ちや邪魔（やま）でがせうから、こつちのおとつゝあんも邪魔（やま）に成（な）ねえ方がようがすよねえ」

おつた「岡目（おかめ）でも知（し）れまさあねえ、仮令（たとひ）どうでも俵（はた）まで持（も）つてられて、弁償（べんしょう）（まよ）つて見た処（ところ）で三十銭か五十銭のことだんべぢやねえか、出来るも出来ねえもあるもんぢやねえ」

おつぎ「お昼餐（ひる）はどうでがすね」

おつた「俺（おれ）、はあ要（え）らねえともね」

おつた「勘次（かんじ）等（ら）、親子（おやこ）仲（な）よくつてよかんべ、世間（よ）の聞（き）えも立派（たて）だあ、親身（おんみ）のものあ、お

次（つぎ）にもちよつと話をしようと思つて来たところなのさ。私もこれで義理（ぎり）を欠（か）くのはいやだからねえ」

p. 291

おつた「そうしたら、この村（むら）にいい塩梅（あんべえ）の家（うち）があるものだから借りて身上（みみ）を持たせようと思つて保証（ほしょう）に立つてくれといったところ、たいした挨拶（あいさつ）なのさ。三十銭か五十銭の家賃（か賃）をねえ、かわいそうじゃないかねえ、かたわの甥（なまこ）っ子のことをねえ。保証（ほしょう）に立つたら身上（みみ）が潰（つぶ）れるつて挨拶（あいさつ）なのさ。これ、年（とし）とつちや、こつちのおとうさん、先（ま）も短いのに氣（き）立てのいいものでなくちや、まさかの時（とき）が心配（しんぺえ）だからねえ。後の者（もの）の厄介（やくけい）になりたいっていうのは、だれでも同じ（おな）じでしょう。ねえこつちのおとうさん、そうでしょう。それでその嫁（よめ）っていうのが氣（き）立てのいい女（おんな）だっていうんだから、私も欲（ほ）しいのさ、ほんとうの話（はなし）がねえ。そう言（い）つちや自分の欲（ほ）のようなが、同じ（おな）じものなら優しいことばでも掛けてくれる嫁（よめ）でなくつちやねえ。そうじゃないでしょうかね」

卯平（うへい）「そりや、まあ、さうだが」

p. 292

勘次（かんじ）「姉（あね）さんなんか、立派（たて）なこと言（い）つたつて、年寄（としより）の面倒（めんどう）みたとはいえないだろう」

おつぎ「おとうさん、黙（もく）つてなさいよ」

おつぎ「お昼（ひる）よ、もう」

おつた「それぢや、こちらのおとうさん、おやかましゅうございました。私は帰（かえ）りましょう、もう。一刻（い）もいぢや邪魔（やま）でございましょうから。こつちのおとうさんも邪魔（やま）にならない方がようございますよ」

おつた「岡目（おかめ）でも知（し）れますわねえ。仮（たと）ひもとにかく俵（はた）まで持（も）つていられて、弁償（べんしょう）して見たところ（ところ）で三十銭か五十銭（ごじゅうせん）のことじゃないの。できるもできないもあるもんぢやない」

おつぎ「お昼（ひる）はどうですな」

おつた「私は、もういらなるとも」

おつた「勘次（かんじ）は、親子（おやこ）仲（な）よくつていいでしょう。世間（よ）の聞（き）えも立派（たて）よ。親身（おんみ）のものは、

蔭で肩身が広くつてえゝや

二〇

p. 297

おつた「おや／＼まあ、こつちの方はえゝこつたなあ、大豆（でえづ）でもかうだにとれて」

おつた「おゝ重たかつた」

おつた「おやまあ、暫くでがしたね」

女「さういへばまあ、あつちの方は酷（ひで）え洪水（みづ）だつち嘶だつてがどうでござんしたね」

おつた「嘶の外（ほか）でがさどうも、彼此れはあ、小卅日（こさんじいんち）にも成んべが、まあだかたでどつちから手（てえ）つけてえゝか分んねえんでがさどうもはあ、わし等方見てえに洪水ばかし出たんぢや、居んのも厭（や）んなつちまあやうなのせ本当に、さう云（ゆ）つてもこつちの方はようがすね」

p. 298

女「此んでもまさか、此の村落（むら）だつて随分かぶつた処（ところ）も有んだから全然（まるつきり）なんともねえつちこともねえがねえ」

おつた「それでも此処らぢや居る処（ところ）にや支障（さはり）ねえんだからなんちつても諦めはようがさね、わし等方なんぞぢや、土手へ筵圍（むしろがこ）ひしてやつとこせ凌いだものなんぼ有つたかせ、土手に居ても雨せえなけりやえゝが、降られちや酷（ひで）えつち嘶でがしたよ、そもでもまあわし等（らあ）、家（うち）に居られんな居られたんだからまあ同じにもようがしたのせ、そもでも床の上へ四斗樽かう倒（さかさ）にして置いてね、其上へ板渡してやつとまあ居通しあんしたがね、煮焼（にやき）すんのもやつとこせで、隣近所は有つたつて往つたり来たりすんぢやなし、何程（なんぼ）心細（こゝろぼせ）えか分んねえもんですよ、尤もこれ、死ぬ者せえあんだから斯うして居られんな難有え様なもんぢやあるが、そもでも四斗樽の太（ふて）え籬ん処（ところ）むぐつた時や、夜横に成つて見たつて直（ぢき）耳の側でさらさ

お陰で肩身が広くていいわ」

二〇

p. 297

おつた「おやおやまあ、こつちの方はいいことねえ。大豆でもこんなにとれて」

おつた「おお重たかつた」

おつた「おやまあ、しばらくでしたね」

女「そういへばまあ、あつちの方はひどい大水だつていう話だつたけど、どうでございましたね」

おつた「話にもならないですよ。かれこれもう卅日にもなるでしょうけど、まだまるつきりどつちから手をつけていいのか分らないんですよ、どうも、私の方みたいに大水ばかり出たんぢや、いるのも嫌になってしまうようですよ、本当に。そう言つてもこちらの方はいいですね」

p. 298

女「これでもさすがに、この村だつて随分水をかぶつたところもあるんだから、全然なんともないつてこともないんですがねえ」

おつた「それでも、こちらじゃ、いるところにはさしさわりはないんだから、なんといつても諦めはいいですね。私たちの方なんぞじゃ、土手へ筵圍いして、やつとしのいだ者も、どのくらいあつたか。土手にいても雨さえなけりやいいけど、降られたらひどいつて話でしたよ。それでもまあ私らなんぞは、家にいられるのはいられたんだから、まあよかつた方ですよ。それでも床の上へ四斗樽をこう逆さにして置いてね、その上へ板を渡して、やつとまあ居通しましたがね。煮焼きするのやつとこととで、隣近所はあつたつて行つたり来たりするんぢやなし、どんなに心細いか分らないもんですよ。もつともこれ、死ぬ者さえあるんだから、こうしていられるのは、ありがたいものだけど。それでも四斗樽の太いたがのところまで水にもぐつた時は、夜横になってみたつて、すぐ耳の側でさらさらとこう水が動いているんだから、うっ

らつとかう水が動いてんだから、放心（うつかり）眠つたらそつくり持つてかれつかどうだか分んねえと思つてね、ぼつちりともはあ云（ゆ）はんねえで居たのせえ、それから板の端（はじ）ん処（とこ）からそろつと手（てえ）出して見つと宵の口にやさうでもねえのがひやつと手の先が直ぐ水へ触（さあ）つた時にや悚然（ぞつ）とする様でがしたよ、それからはあ船は枕元へ繫いでたんだが、本当に枕元なのせえ、みんなして凝（こど）つて狭（せめ）えつたつて窮屈だつてやつと居る丈（だけ）なんだから、天井へは頭打（ぶ）つゝかり相で生命（いのち）でも何でも躓（ちど）めらつる様なおもひでさ、sonでもまあ到頭遁げもしねえで居らつたんだから、家（うち）でも持つてかれたものからぢや運がえゝのせえ、まあ昼間はなんちつても方々見（め）えてえゝが、夜がなんぼにも小凄（こすご）くつてねえ」

p. 299

おつた「sonでまあ、それもえゝが蛙（けえ）だの蛇だのが来てね、蛙はなんだが蛇がなんぼにも厭（いや）ではあ、棒で引つ掛けて遠くの方へ打ん投げて見ても、執念深えつちのか又ぞよ／＼泳いで来て、それも夜がねえ万（もしも）のことが有つちやと思ふもんだから明り点けてたんだがその所為か余計に来る様で、薄つ闇（くれ）え明りだからぢつき側へ来てからでなくつちや分んねえし、首擡（もちや）げてんの見ちや本当に厭（や）でねえ」

勘次「姉等（あねら）も随分ひでえ目に遭たんだな」

おつた「なんちつても、かうえ豆とれるなんておめえ等方はえゝのよなあ、俺ら方ぢや土手の近くで手の有るもなあ、田の畔豆引つこ抜えて土手の中（ちう）ツ腹（ばら）へ干しちや見た様だが、まあだなんちつても莢が本当に膨れねえんだから、ほんの豆の形したつち位（くれえ）なもんだべな、そりやさうとこの豆はえゝ豆だな、甘相（うまさう）でなあ」

p. 300

おつた「水の中に居ちや仕事するにも仕事は

かり眠つたらそつくり流されるんじゃないかと思つてね、まんじりともできないでいたんですよ。それから板の端のところからそつと手を出してみると、宵の口にはそうでもなかったのに、ひやつと手の先がすぐ水へ触った時には、ぞつとするようでしたよ。それからもう船は枕元へつないでたんだけど、本当に枕元なんですよ。みんなでちちこまって、狭いたつて窮屈だつて、やつといるだけなんだから、天井へは頭がぶつかりそうで、命でも何でもちぢめられるような思いでねえ。それでもまあ、とうとう逃げもしないでいられたんだから、家を流された者からすれば運がいいんですよ。まあ昼間はなんといつても方々見えていいけれど、夜がどうにもすごくつてねえ」

p. 299

おつた「sonでまあ、それもいいが、蛙だの蛇だのが来てね。蛙はどうつてことないけど蛇がどうにも嫌でもう。棒で引つ掛けて遠くの方へ投げてみても、執念深いつていうのか、またぞよ泳いできて。それも夜がねえ、もしものことがあつたらと思うもんだから明かりをつけてたんだが、そのせいか余計に来るよう。薄暗い明かりだからすぐ側へ来てからでなくちゃ分からないし、首もたげているのを見ると本当に嫌でねえ」

勘次「姉さんも随分ひどい目にあつたんだな」

おつた「なんといつても、こういう豆がとれるなんて、あんたらの方はいいのよねえ。私の方じゃ土手の近くで手のあるものは、田の畦豆引き抜いて土手の中ほどへ干して見たようだけど、まだなんといつても、さやが本当に膨れないんだから、ほんの豆の形をしたつていうくらいのものでしょね。そりやさうと、この豆はいい豆ね。うまさうでねえ」

p. 300

おつた「水の中には仕事をするにも仕事

なしさなあ、それからみんな棒の先へ釣針(はり)くつゝけて魚釣(さかなつ)りしたのよ、庭で幾らでも鮒釣れるつちんだから知らねえものが見ちや酷く困ねえ奴等だと思ふ位(くれえ)なもんだんべのさ」

おつた「後が酷くつてな、縁の下でも何でも泥(えごみ)が一杯(べえ)で、そえつあゝ掻ん出せばえゝんだが床板(しら)が白(しろ)つ黴(かび)に成つちやつてこれがまだなか／＼干ねえから畳(たたみ)なんざ何時敷(し)つ込めるもんだか分ねえのさ、そんでまた田(いり)でも畑(はたけ)でも引つ被つた処(とこ)は水干(ひ)てから腐(く)つてるもんだからその臭(くせ)えことが又(また)嘶(し)にやなんねえや、俺(おれ)ら作物(さくぶつ)ばかりし困(こ)んだと思つたら、畑(はたけ)の桐(きり)の木(き)でも樗(し)の木(き)でも今(いま)成(な)つてからぼろ／＼葉(は)々(々)は(は)つぱ)が落(お)つちやつて可怖(おつかね)えもんだよ」

おつた「此(こ)れなあ、そんでも難(なん)有(あ)ること、水浸(み)に成(な)つた家(いへ)さは役場(やくば)から一軒(いっけん)毎(ごめら)に下げ渡し(さげわたり)になつたんだよ、俺(おれ)らまたこつちの家(うち)なんぞぢやどうえ塩梅(あんべえ)だと思つて暫(しば)く外(ほか)へも出(で)たことねえもんだから出(で)ても見(み)てえし、かうえ物(もの)自分でばかし口(くち)開(あ)けつちやあのも何(なに)だと思つて持(も)つて来(こ)て見た(み)たのよ、俺(おれ)ら一つ手(てえ)つけて見た(み)たが何程(なんぼ)えゝ味(あじ)のもんだか知(し)んねえや」

p. 301

女(おんな)「おゝえや、たえしたもんだね、此(こ)れ塩(しほ)だんべけまあ、見(み)てえたつて見(み)らつるもんぢやねえよ、かうえ物(もの)あねえ、能(よ)くまあ持(も)つて来(こ)て勘次(かんじ)さん此(こ)ら大變(たいへん)だ」

勘次(かんじ)「塩辛(しよつぺ)えやまさか」

勘次(かんじ)「おつう、これ蔵(くら)つて置(お)け、そんぢや」

勘次(かんじ)「姉等(あねら)も酷(こ)かんべ野(や)らは」

おつた「米(こめ)でも何でも一粒(ひとつぶ)もとれやしねえのよ」

勘次(かんじ)「汁(じゆ)の身(み)なんざそんでも、どうにか出来(こ)るのか」

おつた「どうしてよおめえ、青(あお)えもな土手(どて)の草(くさ)ばかりだつて云(い)つてる位(くれえ)だもの、今日(けふ)が今日(けふ)困(こ)つてんだな」

はなし、だからみんな棒(ぼう)の先(さき)へ釣針(つりばり)くつつけて魚釣(さかなつ)りしたのよ。庭(にわ)でいくらでも鮒(ぶ)が釣(つ)れるっていうんだから、知らない者(もの)が見(み)たら、ひどく困(こ)らない奴(やつ)らだと思(おも)うくらいのものでしょよ」

おつた「後(あと)がひどくつてね。縁(えり)の下(した)でも何でも泥(どろ)が一杯(いっぱい)で、それは掻(か)きだせばいいんだけど、床板(しら)が白黴(しろかび)になつちやつて、これがまだなかなか乾(かわ)かないから、畳(たたみ)なんぞはいつ敷(し)き込(こ)めるものか分(わ)からないの。それでまた田(いり)でも畑(はたけ)でも水(みづ)を被(お)つたところは水(みづ)が引(ひ)いてから腐(く)つてるもんだから、その臭(くせ)いことがまた話(わ)にもならないのよ。私(わたし)は農作(のうさく)物(ぶつ)だけが困(こ)るんだと思(おも)つたら、畑(はたけ)の桐(きり)の木(き)でも樗(し)の木(き)でも、今(いま)になつてから、ぼろぼろ葉(は)っぱが落(お)つちて、こわいもんですよ」

おつた「これがねえ、それでもありがたいことに、水浸(み)しになつた家(いへ)へは役場(やくば)から一軒(いっけん)ごとに下げ渡し(さげわたり)になつたんだよ。私(わたし)はまたこつちの家(うち)なんぞぢやどういうぐあいだろうと思(おも)つて、しばらく外(ほか)へも出(で)たことがないもんだから出(で)ても見(み)たいし、こういう物(もの)を自分(おれ)でばかり開(あ)けてしまうのも何(なに)だと思(おも)つて持(も)つて来(こ)てみたのよ。私(わたし)も一つ手(て)をつけて見た(み)たが、どんなにいい味(あじ)のものか知(し)れないよ」

p. 301

女(おんな)「おや、たいしたものだね。これ塩(しほ)でしょう、まあ。見(み)たいたつて見(み)られるものじゃないよ、こういう物(もの)はねえ。よくまあ持(も)つて来(こ)て勘次(かんじ)さん、これは、たいへんなものだ」

勘次(かんじ)「しよっぱいや、さすがに」

勘次(かんじ)「おつう、これしまつておけ、それじゃ」

勘次(かんじ)「姉(あね)さんのところも、ひどいだろう、野(や)らは」

おつた「米(こめ)でも何でも一粒(ひとつぶ)もとれやしないのよ」

勘次(かんじ)「汁(じゆ)の身(み)なんざはそれでも、どうにかできるのか」

おつた「どうして、あんた、青(あお)いものは土手(どて)の草(くさ)ばかりだつていつてるくらいなもの。きょうがきょう、困(こ)つてるのよ」

p. 302

勘次「そんぢや、姉（あね）げ茄子か南瓜（たうなす）でもやんべかなあ」

女「おやそんぢや俺ら家（ぢ）でも葱の少しもあげあんせう」

おつぎ「おとつゝあ、それもなんだが、さうえに持てやしめえし、米でも少しやつたらよかんべな、どうせ少し経つと陸稲刈れんだもの」

勘次「うむさうだなあ」

おつぎ「挽割麦（ひきわり）もやつたらよかんべな」

勘次「此れさ交ぜてえゝけ」

おつた「うむ、一緒にしてくろ」

おつた「そんぢや大層（たえそ）厄介（やつけえ）掛けて済まねえな、そんぢや俺ら米ばかり背負（しよ）つてつて明日（あした）でも又南瓜（たうなす）はとりに来るとすべえよ、そんぢや此ら、米大変（たいへん）だから俺れが風呂敷（ふろしき）ぢやちつと小（ち）つちえんだが大（え）かえの有れば貸してくんねえか」

おつぎ「俺ら家（ぢ）にやねえが、爺（ぢい）がな有つたつな、おとつゝあ」

p. 303

おつぎ「爺（ぢい）居たんだな、俺居ねえけりや黙つて借りてくべと思つたんだつが、明日（あした）まで伯母さん大（え）かえ風呂敷要（え）るつちから貸してくんねえか、米背負（しよ）つて行（え）くんだから」

卯平「うむ」

おつた「此れまあ、勘次等にも済まねえつちつてつ処（ところ）さ、わし等も洪水（みづ）でねえ」

おつた「そんぢや此の南瓜（たうなす）も俺れ貰つてえゝんだな、馬鹿に大（え）けえ南瓜ぢやねえかな、明日（あした）まで置いてくろうな」

おつた「どうも済みませんねこら」

おつた「どうしたもんだ、たえした葱ぢやねえか、本当に済まねえな、そんぢや此れも明日までとつて置いてくろうな」

おつた「おやツ、この栗は笑んでんだなはあ」

p. 302

勘次「それじゃ、姉さんにナスかカボチャでもやろうかなあ」

女「おや、それじゃ私の家でもネギの少しもあげましょう」

おつぎ「おとうさん、それもいいけど、そんなに持てやしないし、米でも少しあげたらいいでしょう。どうせ少したつと、おかぼが刈れるんだもの」

勘次「うん、そうだなあ」

おつぎ「引割りもあげたらいいでしょう」

勘次「これに交ぜていいかい」

おつた「うん、一緒にしてよ」

おつた「それじゃ大層（たえそ）やつかいになってすまないねえ。それじゃ私は米だけ背負（しよ）つて、あしたでもまたカボチャはとりに来るとするよ。それじゃこれ、米がたいへんだから、私の風呂敷（ふろしき）ぢやちよつと小さいんだが、大きいのがあったら貸してくれない？」

おつぎ「うちにはないけど、おじいさんのがあつたねえ、おとうさん」

p. 303

おつぎ「おじいさん、居たんだね。私は居なければ黙つて借りていこうと思つたんだが、あしたまで伯母さんが大きな風呂敷（ふろしき）があるっていうから貸してくれない？ 米を背負（しよ）っていくんだから」

卯平「うん」

おつた「これはまあ、勘次などにもすまないっていつてるところですよ。うちの方も洪水（みづ）でねえ」

おつた「それじゃこのカボチャも私がもらつていいんだね。すごく大きいカボチャじゃないか。あしたまで置いてくださいよ」

おつた「どうもすみませんね、これは」

おつた「どう、すごいネギじゃないか。本当にすまないねえ。それじゃこれも、あしたまでとつて置いてくださいよ」

おつた「おや、この栗は割れはじめてるんだね、もう」

おつぎ「此間（こねえだ）からなんでさ、ちつとばかしだが落ちたの有りあんさ」

p. 304

おつぎ「あつちになけりや持つてつたらようござんせう、大豆（でえづ）もこれ打（ぶ）つた処（ところ）なら持つてくとえゝんでがしたがね」

おつた「さうだな、そんぢや貰つて行（え）くかな」

おつた「こつちのおとつゝあん、此れわし役場から下（さが）つたの持つて来て見たんだが一つ分けて貰つたらようがせう、滅多ねえ味のもんだから」

おつた「そんぢや明日（あした）またお目にかゝりあんせう」

おつた「此りやよかつた、本当にまあ」

勘次「袋は明日持つて来てくんなくつちや畢へねえぞ」

p. 305

勘次「汝（わ）りや馬鹿だな本当に、何ち馬鹿だんべなあ」

おつぎ「そんなに怒（おこ）つたつて癒るめえな、おとつゝあは」

卯平「水飲ませて見ろ」

p. 306

卯平「鶏（にはとり）納豆くつたつて死なねえ内に水飲ませりや何ともねんだもの、水飲ませりやそんなに騒ぐにやあたらねえ」

おつた「俺れが南瓜（たうなす）は此れだつけかな」

勘次「それだんべな」

おつた「どうしたつけ、昨日の豆はそんでもたんと収穫（と）れた割合（わりえゝ）だつけが」

二一

p. 309

男「おうえ」

勘次「どうしたんべ、入（へえ）つちや越せめえか」

男「ぶく／＼やりたけりや入（へえ）つた方がえゝや」

p. 316

医者「お前（まへ）そつち持つて」

医者「えゝか、ぎつと抱いてるんだぞ」

おつぎ「この間からなんですよ。少しばかりだが落ちたのがありますよ」

p. 304

おつぎ「あつちになければ持つていったらいいでしよう。大豆もこれ、打つたところなら持つていくといいんですがね」

おつた「そうね、それじゃもらつていきましよう」

おつた「こつちのおとうさん、これ私が役場からもらつたのを持つてきてみたんだけど、一つ分けてもらつたらいいいでしよう。めつたにない味のものだから」

おつた「それじゃ、あしたまたお目にかかりましよう」

おつた「こりやよかつた、本当にまあ」

勘次「袋はあした持つて来てくれなくちや困るぞ」

p. 305

勘次「お前はばかだな、本当に。何てばかなんだろうなあ」

おつぎ「そんなにおこつたつて、なおらないでしよう、おとうさんは」

卯平「水飲ませて見ろ」

p. 306

卯平「鶏が納豆食つたつて、死なないうちに水を飲ませれば何ともないんだもの。水を飲ませればそんなに騒ぐにはあたらない」

おつた「私のカボチャはこれだった？」

勘次「それだろうね」

おつた「どうでした。きのうの豆は、それでもたくさんとれたようすだったけど」

二一

p. 309

男「おうえ」

勘次「どうだろう。川に入って越せないかねえ」

男「ぶくぶく沈みたけりや入つた方がいいよ」

p. 316

医者「お前、そつち持つて」

医者「いいか。ぎゅつと抱いてるんだぞ」

p. 317

医者「お前兄貴だな、そんちやえゝ、徒勞(むだ)だ」

医者「木から落(おっこ)つたな」

男「えゝ、わしやはあ、どうしてえゝもんだか分んねえから畑耕(うな)つてた俵衣物(きもの)も着ねえで斯うして負(おぶ)つて来たんだが」

男「わし柿の木さ登んな見てたんだつげが、落(おっこ)つたから駆けてつて見たら、目(めえ)引(ひ)つゝけつちやつて、そんでも暫く経つたら泣き出したんでわし抱き起して手へ触つたら、痛てえ／＼つちから捲(まく)つて見たら、斯うぶらんと成つたつ切りでわしもはあ、魂消(たまげ)つちやつて」

女「本当に此処へ来て居ちや毎日(まいんち)のやうに木から落(おっこ)つたつち怪我人が来(く)んだよまあ、椎の木から落つたの栗の木から落つたのつて、子供の怪我は大概(てえげえ)さうなんだから、男つ子持つちや心配(しんぺえ)さねえ、そんだがこれ、怪我つちや過(えゝまち)だから、わし等も下駄穿きながらひよえつと転がつた丈で手つ首折(をつちよ)れたんだなんて」

p. 318

男「わし等がも毎日(まいんち)のやうに柿の木さ登つてゝ木登りは上手なんだから、それも雨でも降つたばかりならつる／＼して足引つ掛んねえもんだが雨は降んねえし、そんなこたねえ筈なんだが、攫(つかま)つてた枝ん処(どこ)に蛇居たとかつて慌くつておりべと思つたつちんだから、いつでもはあ枝なんぞがさがさやつて天辺の方で嘸鳴つたりなにつかしてたんだつげが、かさあつちのが酷く変な音だと思つて見る内にや落(おっこ)ちんな早えゝもんで、困つたこと出来たのせ」

男「柿の木さ蛇があがるやうぢや雨でもまた降らなけりやえゝが、百姓にや大事(でえじ)な処(ところ)なんだからまあ、ちつと続けさせてえもんだが」

医者「よし／＼癒つちやつた」

男「どのつ位(くれえ)で癒つたもんでござ

p. 317

医者「お前兄貴だな。それじゃいい。むだだ」

医者「木から落つちたな」

男「ええ、わしはもう、どうしたらいいか分からないから畑がやしてたまま着物も着ないでこうして背負ってきたんだが」

男「わし、柿の木へ登るのはみてたんですが、落ちたから駆けてつてみたら、目を引きつけちゃって、それでもしばらくたつたら泣きだしたんで、わし抱き起こして手へ触つたら、痛い痛いってうから、まくつて見たら、こうぶらんと成つたきりで。わしももう、たまげちゃって」

女「本当に、ここへ来ていると毎日のように木から落ちたつていう怪我人がくるんだよ、まあ。椎の木から落ちたの栗の木から落ちたのつて、子どもの怪我はたいがいさうなんだから、男の子を持つちと心配だよね。だけどこれ、怪我つていうのは過ちだから、私なんかも下駄をはきながらひよいと転がっただけで手首が折れたんだなんて」

p. 318

男「うちの子も毎日のように柿の木に登つていて木登りは上手なんだから。それも雨でも降つたばかりならつるつるして足が引つかからないものだが雨は降らないし、そんなことはないはずなんだが、つかまつた枝のところに蛇がいたとかで、あわてておりようと思つたつていうんだから。いつでももう枝なんぞがさがさやつて、てっぺんの方でどなつたりしていたんだが、かさかさつていうのがひどく変な音だと思つて見ると、おっこちるのは早いもので、困つたことができたのさ」

男「柿の木に蛇が登るようじゃ雨でもまた降らなきゃいいが。百姓には大事(でえじ)なところなんだから、少し続けさせたいものだが」

医者「よしよし、なおつちやつた」

男「どのくらいでなおるものでございませ

んせうね、先生さん」

p. 319

医者「さう直ぐにや癒らねえな」

医者「此りや大層（たいそう）大事（だいじ）にしてあるな」

医者「どうしたんだえ此ら、夫婦喧嘩でもしたか」

勘次「なあにわしやはあ、鼻に死なれてから七八年にもなんですがすから」

医者「さうか、そんぢや誰（だれ）に打（ぶ）たれたえ、まあだ壮（さかり）だからそんなでも何処へか拵（こしら）えたかえ」

勘次「先生さん戯談（ごたん）いつて、なあにわしや爺様（ぢいさま）に打たれたんでさ」

勘次「先生さん、わしやまあだ来（き）なくつちやなりあんすめえか」

医者「この薬をやるから、自分で貼つた方がえ、此れで癒るから」

p. 320

勘次「俺ら、爺様（ぢいさま）に鉄火箸（かねひばし）で打つ飛ばさつて、骨接へ行つて来た処（とこ）だが、忙（いそが）し処（ところ）酷（ひで）え目に逢つちやつた」

p. 321

男「どうしたつちんでえまあ、勘次さん」

勘次「昨日の日暮（ひぐれ）に俺れ野らから帰（けえ）つて来たたら爺様（ぢいさま）鶏（に）はとり）げ餌料（ゑさ）撒（ま）えてやつてつから見たら、米交ぜて置いた食稻（けしね）の方搔ん出して撒いてんぢやねえけ、夫から俺らもそれ遣つたんぢや畢（をへ）ねつちつたな、鶏げやんなそつちに別にして有んだから撒いてやんだらそつちのがにして呉ろつちつたのよ、鶏げなんぞ勿体（もつてい）ねえな、さうしたらいきなり鉄火箸（かねひばし）で俺れこと打つ飛ばして、汝りや俺げ食はせんのせえ惜いつ位（くれえ）だから鶏げやつてせえ其麼（そんな）こと云（ゆ）へやがんだんべなんて、麼（お）ら放心（うつかり）してたもんだから逃げ間にやあねえで、此れかうえに怪我（けが）しつちやつたな、今蒔物（まきもの）の忙しい処へ打（ぶ）つ込んで、何処までも癒んねえやうでもしやうねえから朝つ稼ぎに骨接へ

うね、先生さん」

p. 319

医者「そうすぐには、なおらないね」

医者「こりや大層大事にしてあるな」

医者「どうしたんだい、これは。夫婦げんかでもしたか」

勘次「なあにわしはもう女房に死なれてから七八年にもなるんですから」

医者「そうか、それじゃだれに打たれた。まだ元気だから、それでもどこかへこしらえたのか」

勘次「先生さん冗談（じゆたん）いつて、なあに、わしは、じいさまに打たれたんですよ」

勘次「先生さん、わしはまだ来なくつちやならないでしょうか」

医者「この薬をやるから、自分で貼つた方がいい。これでなおるから」

p. 320

勘次「おれは、じいさんに鉄火箸（かねひばし）でぶんなぐられて、骨つぎへ行つて来たところだが、いそがしいところへひどい目に逢つちやつた」

p. 321

男「どうしたつていうんだい、まあ、勘次さん」

勘次「きのうの日暮れにおれが野らから帰つて来たたら、じいさんが鶏にえさをまいてやってるから見たら、米を交ぜて置いた食稻（けしね）の方を搔きだしてまいているじゃないか。だから、おれもそれをやったんじゃいけないって言ったよ。鶏にやるのはそつちに別にしてあるんだから、まいてやるんならそつちのにしてくれって言ったのよ。鶏になんぞもつたいないな。そうしたらいきなり金火箸（かねひばし）でおれをぶつとばして、お前はおれに食わせるのさえ惜しいくらいだから、鶏にやってさえそんなこと言いやがるんだろうなんて。おれはうっかりしてたものだから逃げるのが間にあわないで、これこういうふう（う）に怪我（けが）しちゃつたな。今種まきの忙しいところへもつてきて、いつまでも治らないやうでも仕方ないから、朝の間に骨接ぎへいったんだが、遠いのに、それに行つて見ると怪我（けが）人が来ていて、ち

行つたんだが、遠いのにそれに行つて見つと怪我人が来て居てちよつくらぢやねえもんだから、随分急いだ積だつげがこんなに遅くなつちやつて、何ちつても日は短くなつたかな、さう云つても怪我人ちや有るもんだな」

男「そんだが怪我は大変なことねえのか」

勘次「うむ」

男「そんで爺様（ぢさま）はどうしたつちんでえ」

p. 322

勘次「俺ら朝つばら出掛つちやつてまあだ行逢（えきや）えもしねえから、どうするつちんだか分んねえが、どうせ甘（うめ）え面付（つらつき）もしちや居（え）らんめえな、此んで怪我なんぞさせてえ、心持ちやあんめえな、さうぢやねえけ」

男「そんぢや嘸はどうゆ姿（なり）にもして置かなくつちやしやうあんめえな、俺れまあ嘸はして見つから、どつちがどうのかうのつちつたつて仕やうねえし、まさかおめえ手越（てごし）したな爺様だつちつたつて、親のこと謝罪（あやま）れつちことも云はんねえから何気（なにげ）なしのことにして押つゝけべぢやねえか、なあ」

男「こつちのおとつゝあん、わしも此れ変な嘸だが勘次さんに頼まれたやうな形でまあ来たんだがね、昨日の日暮（ひくれ）とかにそれ、そつちこつち仕たつちことだつげが、勘次さんもそんなに悪い心持で云つたんでもねえ塩梅（あんべえ）だし、まあ手（てえ）ついて謝罪らせんの何だのつちことでなく、此ら其の場限りとして仲善くやつて貰（もれ）えてえんだがどうしたもんだんべね、腹（はらあ）立たせんなこら悪いかも知んねえが、親子と成つてゝ此れ、ちつとのことで後で考（かんげ）へて見ちやつまんねえもんだから、なあこつちのおとつゝあん」

卯平「なあに俺らあどうもかうもねえんだが、彼の野郎奴はあ、何（なん）ぢやねえ、俺れこと邪魔なんだから、俺らあ俺れだと思つてつから管（かま）やしねえが、俺れげ食はせる物惜しくつて仕やうねえんだから、俺れ家（うち）の物一粒でも減らさね

よつくらじゃすまないもんだから、随分急いだつもりだったのにこんなに遅くなつちやつて。何といつても日は短くなつたからな。そう言つても怪我人というものはあるもんだな」

男「それでも怪我は大変なことはないのか」

勘次「うん」

男「それで、じいさんはどうしたつていうんだい」

p. 322

勘次「おれは朝から出かけちやつて、まだ逢つてもいないから、どうするつていうんだか分からないが、どうせいい顔もしてはいられないだろうな。これで、怪我なんぞさせて、いい心持ちぢやあるまいねえ。そうぢやないか」

男「それじゃ話はどういう形にでもしておかなくちや仕方ないだろうな。おれがまあ話はして見るから。どつちがどうのこうのつて言つたつて仕方がないし、まさかお前、手を出したのはじいさんだつていつたつて、親に向かつてあやまれとも言えないから、何気なしのことにして押つづけようぢやないか、なあ」

男「こちらのおとうさん、わしもこれ変な話だが勘次さんに頼まれたやうな形でまあ来たんだが、きのうの夕方とかにそれ、いざごしたつていうことだけど、勘次さんもそんなに悪い心持で言つたんでもないようだし、まあ手をついてあやませるの何だのつていうことでなく、これはこの場かぎりのこととして仲良くやつてもらいたいもんだが、どうしたもんでしょうね。腹を立てさせるのは、これは悪いかも知れないが、親子となつてこれ、少しのことで後で考えてみたらつまらないものだから。ねえ、こつちのおとうさん」

卯平「なあに、おれはどうもこうもないんだが、あの野郎は、とにかく、おれが邪魔なんだから。おれはおれだと思つてるから、かまいやしないが、おれに食わせる物が惜しくて仕方がないんだから。おれが家のものを一粒でも減らさないように外に行つて

えやうに外(ほか)に行つてりやえゝんだんべが、俺れえそれから、俺れことさうだに厭なんだら自分で何処さでもけつかつた方がえゝ、厭(や)だら後から来た者出ろつち気なんだから」

p. 323

男「そりやこつちのおとつゝあんさうだがな、先刻(さつき)もいふ通り腹も立つべえが親子となつて見りや此れ、えゝことも有るもんだからなあ、さう云(ゆ)はねえでそれ、わしげ任せて不承しさつせえね」

卯平「斯うだこた此れ、黙つてりや隣近所でも分んねえもんだが勘次等えゝ暫く味噌せえ無くして置くんだから、一杓子(ひとつちやくし)も有りやしねえんだ。去年の暮にや味噌搗くつちんで俺ら働(はたれ)えた錢(ぜね)で塩迄買ったんだな、俺れも硬(こえ)え物(も)な嗜めねえから味噌なくつちや仕やうねえな、俺ら壮(さかり)の頃つから味噌は好きで味噌なくつちやなんぼにも身体(からだ)に力つかねえで困り\ /したんだから、麦麴(むぎつかうぢ)は塩まで切つて有んだから豆せえ煮りや直(ぢき)なのに、それ今んなつたつて搗くべぢやなし、なんでも俺れ死ねばえゝ位(ぐれえ)にして待つてんだんべが、此れ、味噌なんざ搗いたからつてさう直ぐに手(てえ)つけらつるもんぢやなし、俺ら明日(あす)が目にも死ぬかどうだか分りやしねえが、それでも自分の見てつ処(ところ)で搗きせえすりや明日(あした)死ぬにしたつて心持やえゝから」

卯平「あん時搗(つき)せえすりや今頃は食へば食へんに」

p. 324

卯平「俺れ小忌々敷(こえめえましい)しいから打(ぶ)つ飛ばしてやつたに」

男「さうかね、俺らそんなこた知らなかつたつけが、さうえこた幾ら懇意だ近所だつちつたつて一々他人(ひと)の飯台(はんたい)まで蓋とつちや見られねえから俺らも知らねえでたな、そんぢやそらまあ、味噌でも何でもさうえ理由(わけ)ぢやこつちのおとつゝあん好きなやうに搗かせることにしてな、大豆(でえづ)はそれとつたし

りやいいんだろうが、おれは、だから、おれがそんなに嫌なら自分でどこへでもうせた方がいい、嫌なら後から来た者が出るつていう気なんだから」

p. 323

男「そりやあこつちのおとうさん、そうだがな、さっきも言うとおりに、腹も立つだろうが、親子となつて見ればこれ、いいこともあるもんだからなあ。そう言わないでそれ、わしに任せて承諾しなさいね」

卯平「こんなことはこれ、黙っていれば隣近所でも分からないものだが、勘次はもうしばらく味噌さえなくしておくんだから。杓子一すくいもありはしないんだ。去年の暮れには味噌をつくつていうんで、おれは働いた錢で塩まで買ったんだよ。おれも硬い物(も)はかめないから味噌がなくつちや仕方がないさ。おれは若いころから味噌は好きで味噌がなくちやどうにも体に力がつかないで困り困りしたんだから。麦麴(むぎつかうぢ)は塩まできつてあるんだから、豆(まめ)さえ煮ればすぐなのに、それを今になつてもつこうともしないで、どうやらおれが死ねばいいくらいに思つて待つてるんだろうが、これ、味噌なんぞはついたからつてさうすぐに手(て)つけられるものぢやなし、おれはあすの日にも死ぬかどうか分りやしなないが、それでも自分の見ているところでつきさえすれば、あした死ぬにしたつて心持ちはいいから」

卯平「あの時つきさえすれば今ごろは食えば食えるのに」

p. 324

卯平「おれは、いまいまいから、ぶんなぐつてやつた」

男「さうかね。おれはそんなことは知らなかつたが、そういうことは、いくら懇意だ近所だといったつて、一々他人(ひと)の飯台(はんたい)まで蓋をとつて見るわけにはいかないから、おれも知らないでいたな。それじゃそれはまあ、味噌でも何でも、そういうわけじゃ、こつちのおとうさん、好きなやうにつかせることにしてな。大豆(でえづ)はそれ、とつたんだから、

すつから行(や)る積にせえなりや訳ねえ
嘶だな、さうしてこつちのおとつゝあん胸
撫でさつせえ、俺れ悪りいこた云はねえか
ら、なあこつちのおとつゝあん、そつちだ
こつちだやつちや誰(だれ)よりも子奴等
(こめら)可哀想(かあいさう)だから、
それに同じもんぢや東の旦那等が耳へは入
れたくねえから、さうしさつせえよなあ」

男「そんぢやねえおとつゝあん、お互(たげ
え)に斯う根に持たねえことにしてね、勘
次さんおめえも忙しくつて手(てえ)つけ
ねえでたかも知んねえが、麴も塩まで切つ
て有るつちんだから、後は豆煮るだけのこ
とだし、味噌は搗くことにしてな、斯うえゝ
塩梅(あんべえ)にしてくれさつせえね、
先刻(さつき)もいふ通りそつちだこつち
だねえやうにしくちやねえ、こつちのお
とつゝあん」

p. 325

卯平「畜生奴(ちきしやうめ)」

卯平「畜生(ちきしやう)つちはれんの口惜
(くや)しけりや、口惜しいちつて見た方
がえゝ、原因(もと)はつちへば己奴(う
の)が手出しすんのが悪りいんだから」

男「こつちのおとつゝあん、そんぢや仕やう
ねえよ、先刻(さつき)も俺れそつから不
承してくろうつて堅(かた)しく云(ゆ)
つたんだつな、そんぢや俺れも困つから
其処はお互(たげえ)にかう物は云(ゆ)
はねえことにしてやつてくなくつちやな
あ」

二二

p. 334

おつぎ「爺(ぢい)、今朝のお飯(まんま)冷
たく成つたつけべ俺ら忘れて喚ばりに行つ
たのがよ、さうしたら爺は疾(とつく)に
居(え)ねえのがんだもの、それでも先刻
(さつき)はがや／＼一杯(べえ)居(え)
るやうだつけがあつちや甘(うめ)え物
あつて爺等とつ返(けえ)しとつたんべな
あ」

二三

p. 335

やるつもりにさえなれば、訳ない話だな。
そうしてこつちのおとうさん、胸なでな
さい。おれは悪いことは言わないから。なあ
こつちのおとうさん、いざござやったら、
だれよりも子どもたちがかわいそうだか
ら。それに同じことなら東の旦那の耳には
入れたくないから、そうしなさいよなあ」

男「それじゃあねえ、おとうさん、お互い
こつち根に持たないことにしてね。勘次さん、
お前も忙しくて手をつけないでいたかもし
れないが、こつちも塩まで切つてあるつて
いうんだから、後は豆を煮るだけのことだ
し、味噌はつくことにしてな。こつち、いい
ぐあいにしてくださいね。さつきも言うど
おり、いざござがないようにしくちやね
え、こつちのおとうさん」

p. 325

卯平「ちくしやうめ」

卯平「畜生(ちきしやう)つて言われるのがくやしければ、
くやしいうつて言つてみた方がいい。もとは
と云えば、お前が手出しするのが悪りい
んだから」

男「こつちのおとうさん、それじゃ仕方ない
よ。さつきもおれ、だから承諾してくれ
てしつこく言つたんだよ。それじゃおれも
困るから、そこはお互い(たげえ)にこつち、ものは言
わないことにしてやつてくれなくちやな
あ」

二二

p. 334

おつぎ「おじいさん、今朝のご飯冷たくな
たでしょう。私忘れて呼びに行つたのよ。
そうしたら、おじいさんほとつくにいな
んだもの。それでも、さつきはがやがや大
勢いるようだったけど、あつちじやうまい
ものがあつて、おじいさんたちは埋め合
せをしたんでしょねえ」

二三

p. 335

女「さあそんぢや又、みんな上れ」
女「此りや何だと思つたら、鯨だよ」
女「そんぢや、そつちへ別にして置けよおめえ」
女「そんぢやこつちのがも別にして置くべよ、なあ」
女「みんな、おとなしく仕なくつちや、呉んねえぞ」
女「さうだに洩（はな）垂らしてるものげはやんねえことにすべえ」

p. 336

男「子奴等（こめら）こと云（ゆ）つて、手洩なんぞかんだ手ぢや引かねえで呉ろえ、おめえ等も勿体（もつてえ）ねえから」
女「はい、そんぢや手でも洗ひますべよ」

女「俺らおめえ、手洩はかまねえよ」

p. 337

女「さあ、汝（わ）つ等（ら）此れつきりだ」
男「この婆奴等（ばゝあめら）、そつちの方で偷嘴（ぬすみぐひ）してねえで、佳味（うめ）え物有つたら此方へ持つて来う」

p. 338

女「盗んだつち訳ぢやねえが、蓋とつて見た処（ところ）なんだよ」
男「独（ひとり）でせしめちやえかねえから」
女「独ぢやあんめえな、かうやつて三人（さんにん）も四人（よつたり）も居たんだものなあ」

女「さうだとも、此の位（くれえ）俺らげよこしたつて本当（ほんたう）にすりやえゝんだよ、なあ、俺らなんぞ上（あが）つた酒だつてさうだに飲むべぢやなし」

男「そりやさうと、酒どうしたえ」

男「放心（うっかり）して、此ら煮立ツちやあ処（ところ）だつて」

男「俺らさうだ鯨なんぞ自分ぢや一つでも欲しかねえんだから、さうだ物で満腹（はらくち）くしたつ位（くれえ）酒からつき甘（うま）くなくしつちやあから、」

p. 339

男「此ら駄目だ、焦臭（こげくさ）くしツちやつた、酒沸すのにや畢へねえどうも氣をつけなくつちや、酒と茶はちつとでも臭味（くさみ）移らさんだから」

女「さあ、それじゃまた、みんな上がった」

女「こりや何だと思つたら、鯨だよ」

女「それじゃ、そつちへ別にして置きなよ、あんた」

女「それじゃ、こつちのも別にして置こうよ、なあ」

女「みんな、おとなしくしなくちや、あげないよ」

女「そんなに鼻水を垂らしているものには、やらないことにしよう」

p. 336

男「子どもたちのこと言つて、手鼻なんぞかんだ手で紙を敷かないでくださいよ。あんたたちも、もつたいないから」

女「はいはい、それじゃ手でも洗ひましようよ」

女「私は、あんた、手鼻はかまないよ」

p. 337

女「さあ、お前たちはこれつきりだ」

男「このばばあたちは、そつちの方で盗み食いしてないで、うまい物があつたらこつちへ持つて来い」

p. 338

女「盗んだつて訳ぢやないが、蓋をとつて見たところなんだよ」

男「ひとりでせしめちや、よくないから」

女「独りぢやないでしょう。こうやつて三人も四人もいるんだものね」

女「さうだとも、このくらい私たちによこしたつて、本当はいいんだよ。なあ、私たちなんぞ上がった酒だつてそんなに飲もうというわけぢやなし」

男「そりやさうと、酒はどうしたい」

男「うっかりしていて、これは煮立つちやうところだつた」

男「おれはそんな鯨なんか自分では一つも欲しくないんだから。そんな物で腹一杯にしたら、酒をまるつきりうまなくしちやうから」

p. 339

男「これはだめだ。こげくさくしちやつた。酒を沸かすのにはいけな。どうも氣をつけなくつちやあ。酒と茶は少しでも臭みが移るんだから」

男「なあに、土瓶だつて二度目のが少しに仕ねえで、先刻（さつき）のがより余計なツ位（くれえ）注ぎせえすりや大丈夫なんだが、それさうでねえと周囲（まあり）がそれ焦びつから」

女「そんぢや、今度（こんだ）沢山（しつかり）入（せ）えびやな、俺ら碌に飲んもしねえで、怒（おこ）られちやつまんねえな」

男「本当にすりや、一遍毎に土瓶の中水でゆすがなくつちや駄目なんだがな」

男「そつから、はあ、鉄瓶の中さ徳利（とつくり）おしこめばえゝんだな、さうすりやどうだもかうだもねえんだな」

男「折角甘（うめ）え酒台（でえ）なしにして可惜物（あつたらもん）だな、此らこんで余程（よつぼど）えゝ酒だぞ」

女「鉄瓶ぢや徳利（とつくり）一本づつしかへえんねえから面倒臭かんべと思つてよ」

p. 342

与吉「爺くんねえか」

卯平「明日（あした）にしろ」

p. 344

与吉「爺、いま一つくんねえか」

男「汝りや、さうだこと云（い）ふんぢやねえ、先刻（さつき）あゝだに何（なに）つか貰つて要るもんか、まつと欲しいなんちへば俺れ腹搔裂（かつつ）えて小豆飯（あづきめし）搔出（かんだ）してやつから、汝りや口ばかし動（いご）かしてつから見ろうそれ、鴉に灸据ゑらツてら」

p. 345

男「汝りや錢（ぜね）欲しけりやおとつゝあに貰へ」

与吉「そんだつて駄目だあ、おとつゝあ等呉れやしめえし」

男「おとつゝあ聾（つんぼ）だから聞（き）けえねんだ、おとつゝあ呉ろうつと俺れ見てえに嘔鳴つて見ろ、そんでなければ耳引張つてやれ」

与吉「そんだつて厭（や）だあ俺ら、おとつゝあに打（ぶ）つ飛ばされつから」

男「えゝから行けはあ、汝等（わつら）見てえな餓鬼奴等（ごや）来ちや五月蠅（うるさ）くつて仕やうねえから」

卯平「さうら」

男「なあに、土瓶だつて二度目のを少しにしないで、さっきのより多いくらいに注ぎさえすれば大丈夫なんだが、それがそうでないと、周囲がそれ、焦げつから」

女「それじゃ、今度はたくさん入れますよ。私はろくに飲みもしないで、おこられちやつまらないな」

男「本当のところは、一遍ごとに土瓶の中を水でゆすがなくちゃだめなんだが」

男「だから、もう、鉄瓶の中に徳利をおしこめばいいんだな。そうすれば、どうもこうもないんだな」

男「せっかくうまい酒を台なしにして、もったいないな。これはこれで大分いい酒だぞ」

女「鉄瓶じゃ徳利一本づつしか入らないから、面倒くさいだろうと思つてね」

p. 342

与吉「おじいさん、くれないか」

卯平「あしたにしろ」

p. 344

与吉「おじいさん、もう一つくれないか」

男「お前、そんなこと言うんじゃない。さっきあんなにいろいろもらって、いるもんか。もっと欲しいなんて言えば、おれが腹を割って小豆飯を搔きだしてやるから。お前は口ばかり動かしてるから、見ろそれ、カラスに灸をすえられてらあ」

p. 345

男「お前は錢が欲しければおとうさんにもらえ」

与吉「だつてだめだよ。おとうさんはくれやしないもの」

男「おとうさんはつんぼだから聞こえやしないんだ。おとうさん、くれて、おれみたいにどなってみろ。でなければ耳を引っ張つてやれ」

与吉「だつて嫌だな、おれは。おとうさんにぶんなぐられるから」

男「いいから行け、もう。お前たちみたいな餓鬼がごちゃごちゃ来ると、うるさくてしようがないから」

卯平「さうら」

p. 347

女「なあおめえ、こんで俺らも若けえ時にや面白（おもしろ）えのがんだよなあ」

男「籠棒（べらぼう）、以前（めえかた）のことなんぞ、外聞（げえぶん）悪りい、俺らなんぞこんで随分無鉄砲（がしよき）なこたあしたが、こんで女にや煎（え）れねえつちやつたから」

女「おめえ、怒（おこ）んなくつてもえゝやな、酒の座敷ぢや其（それ）つ位（くれえ）なこた仕方あんめえな」

女「どうしたんでえまあ一杯（ぺえ）やらつせえね」

卯平「俺ら暫くやんねえから」

男「何でまた飲まねえんだ、さうだにしんねりむつゝりしてねえで、ちつた威勢（えせい）つけて見るもんだ、そうれ」

p. 348

卯平「俺らはあ、暫くやんねえから、煙草は身体（ぐえゝ）悪りいから断（た）つたんだから何だが、酒は此れ錢（ぜね）は稼げねえし、ちつとでも飲めば又飲みたくなつたら廢（や）めつちやつたな、酒もはあ以前（めえかた）た違つて一杯（ぺえ）幾らつちんだから錢（ぜね）くんのむやうで」

男「さうだこと云（や）あねえで、そら来たつとかう手（てえ）つんだすもんだ、倦怠（まだるつこ）くつて仕やうねえ此等（こつら）がな」

女「さうだよ、飲まつせえよおめえ、めでゝえ酒だから、威勢（えせい）つければおめえ身体（ぐえゝ）だつてちつと位（くれえ）なら癒（なほ）つちやあよ」

女「此の人も勘次さんにはや善くさんねえごつさら、困つたもんな、そんだつておめえさうえもな仕やうねえから、さうえにくよくよしねえ方がえゝよ」

男「身体（ぐえゝ）悪りいなんて、さうだ料簡（りょうかん）だから卯平等仕やうねえ、此等（こつら）ようまづだなんて、ようまづなんち病氣（びやうき）は腹（はら）の虫（むし）から出んだから、なあに訳（わき）あねえだよ、蛇（へび）でかう扱きおろすんだ、えゝか、俺れこすつてやつから、いや本当だよ俺らがなんざあ」

p. 347

女「なあ、あんた、これで私（わたし）ちも若い時には面白（おもしろ）かつたのよねえ」

男「べらぼう、昔（むかし）のことなんぞ、外聞（げえぶん）悪い。おれなんか、これで随分無鉄砲（がしよき）なことをしたが、これでも女にはほれなかつたから」

女「あんた、おこらなくてもいいよ。酒の席（しやく）じゃ、それくらい（それ）のことは仕方ないでしょ」

女「どうしたの。まあ一杯（ぺえ）やりなさいね」

卯平「おれ、しばらくやらないから」

男「何でまた飲まないんだね。そんなにしんねりむつゝりしないで、少しは威勢（えせい）をつけてみるもんだ。そうれ」

p. 348

卯平「おれはもう、しばらくやらないから。煙草（たばこ）は体の具合（ぐあひ）が悪いからたつたんだから何だが、酒はこれ、錢（ぜね）はかせげないし、少しでも飲めれば、また飲みたくなるからやめちやつたな。酒ももう前（まへ）とは違つて、一杯（ぺえ）いくらつていうんだから錢（ぜね）飲むようで」

男「そんなこと言わないで、そら来たつとかう手（てえ）をつきだすもんだ。まだるつこくて仕方ない、こいつはな」

女「さうだよ。飲みなさいよ、あんた。めでたい酒だから、威勢（えせい）つければ、あんたの体の具合（ぐあひ）だつて少しぐらいならなおちやうよ」

女「この人も勘次さんにはよくされていないみたいで、困つたもんだねえ。それでも、あんた、そういうものは仕方がないから、そんなにくよくよしない方がいいよ」

男「体の具合（ぐあひ）が悪いなんて、そんな料簡（りょうかん）だから卯平（卯平）はしょうがない。こいつら、リュウマチ（リュウマチ）だなんて。リュウマチ（リュウマチ）なんて病氣（びやうき）は腹（はら）の虫（むし）から出んだから、なあに訳（わき）はないよ。蛇（へび）でこうこきおろすんだ。いいか。おれがこすつてやるから。いや本当だよ、おれのなどは」

p. 349

卯平「俺（お）ら蛇は嫌（きれ）えだから」
男「蛇嫌（きれ）えだと、さうだ大（えけ）え姿（なり）してあばさけたこといふなえ、俺らなんぞ蛇でも毛虫でも可怖（おつかね）えなんちやねえだから、かうえゝか、斯うだぞ」

男「俺らようまづちや八九年も悩んだんだが、蛇でこすればえゝつちから、此（こ）ら甘（うめ）えこと聞たと思つてな、大（えけ）え青大将ぶらんと柿の木からぶらさがつたから竹竿で掻き落すべと思つたら、俺ら家（ぢ）の婆奴等（ばゝめら）構あななんて云（ゆ）つけが、えゝから汝等（わつら）黙つて見てろ、なんてそれから俺ぐうつと頭ふん搦めえて、斯う俺れ背中こすつたな、大（えけ）え青大将だから畜生（ちきしやう）縮（ちぢま）つて屈曲（えんぢぐんぢ）した時や引つ掛つて仲々動（いご）かねえだ、それからうゝんと引き伸しちやこすつたな、さうしたら斯う塊（かた）ごりつゝとこけんの知れたつてな、さうしたらなあにけろりよ」

男「此処らんとここに塊（かた）有たのだが、それつきり何処（どこ）さか行つちやつたな、それから俺れはあ、ようまづなんぞ訳（わき）あねえつちつてんだ」

女「おゝえやまあ、大（えけ）え灸（あ）の痕（あと）ぢやねえけえ」

p. 350

男「俺らがな此んで三百挺一遍に火（ひい）点けたんだから、俺らがむしやらなこと大好（だえすき）のがんだから、いや本当だよ、俺ら恁（こ）んで腹疫病（はらやくびやう）くつゝいた時だつて到頭寝ねえつちやつたかんな、今ぢや教（をさ）つてつから餓鬼奴等（がき）まで赤（せき）れえ病だなんて知つてんが、俺ら壮（さかり）の頃（頃）あ何でも疫病（やくびやう）と覚（おべ）えてたのがんだから、なあ卯平、此ツ等もそんな時やつたから知つてらな、俺ら一日（いちんち）に十六度（ど）手水場（てうづば）へ行つたの一等だつてが、なあに病氣（びやうき）なんぞにや負けらつるもんかつちんだから、其ん時にや村落中（むらぢう）かたではあ、み

p. 349

卯平「おれは蛇は嫌いだから」
男「蛇が嫌いだと。そんな大きいなりをして、あまつたれたことを言うなよ。おれなんぞは蛇でも毛虫でも、こわいなぞというものはないんだから。こういいか、こうだぞ」

男「おれはリューマチでは八、九年も悩んだんだが、蛇でこすればいいっていうから、これはいいことを聞いたと思つてな。大きな青大将がぶらんと柿の木からぶらさがつたから、竹竿で掻き落とそうと思つたら、うちのばあさんがかまうなと言つたけれど、いいからお前たち黙って見ていろ、なんて。それからおれはぐうつと頭を捕まえて、こうおれは背中をこすつたな。大きい青大将だから畜生縮まってくねくねした時は引つ掛かってなかなか動かないんだ。だから、ううんと引き伸ばしてはこすつたな。そうしたら、こう塊（かた）がごりごりつと落ちるのがわかつたな。そうしたら、なあにけろりよ」

男「ここのらとところに塊（かた）があつたんだが、それつきり、どこかへ行つちやつたな。だから、おれは、もうリューマチなんぞ訳（わき）はないって言つてるんだ」

女「おやまあ、大きなお灸（あ）のあとぢやないの」

p. 350

男「おれのは、これで三百挺一度に火（ひい）をつけたんだから。おれはがむしやらなことが大好きだつたんだから。いや本当だよ。おれはこれで腹の疫病（はらやくびやう）がくつた時だつて、とうとう寝ないですましちゃつたんだからな。今じゃ教（をさ）わつてるから子どもたちまで赤痢病（せきり）だなんて知ってるが、おれが若いころは、何でも疫病（やくびやう）と覚えていたんだから。なあ卯平、こいつもその時やつたから知ってるよ。おれは一日（いちにち）に十六度も便所（べんじょ）へ行つたのが一番だつたが、なあに病氣（びやうき）なんぞに負けられるもんかつていうんだから。その時には村中（むらぢう）まるでもう、みんなごろごろしてるんで、おれだけが薬箱（くすりばこ）持（も）つて医者（いしや）の送り迎えをしたな。隣近所（りんぢんじょ）は一軒（いっけん）も役に立た

んなごろ／＼してんで俺ればかり薬箱持つて医者を送迎（おくりむけ）えしたな、隣近所一軒（えつけん）毎（ごめら）役にや立たねえだから、いや本当だよ、俺ら十五日（んち）下痢（くだ）つて癒つたが俺ら強（つよ）かつたかな、いや強（つえ）えとも全く、なあにツちんで俺れ毎日（まいんち）酒（さけ）びん飲んだな、酒飲んぢや悪（わり）いなんて医者なんちや駄目だなかたで、檳榔樹（びんらうじゆ）とか何とかだなんてちつとばかりづゝ、削った薬なんぞ倦怠（まだるつこ）くつて仕やうねえから、当薬煎じ出して毎日（まいんち）俺れ片口で五杯（へえ）づゝも飲んだな、五合位（ぐれえ）へえつけべが、俺ら呼吸（えき）つかずだ、なあに呼吸ついちや苦くつて仕やうねえだよ」

男「俺らそれから五百匁（め）位（ぐれえ）な軍鶏雑種（しやもおとし）一羽（ば）引つ縊つて一遍に食つちまつたな、さうしたら熱出た」

p. 351

男「熱は出たがそれで俺れぐつと身体にや力つけちやつたな、その所為だ十五（んち）日で癒つたな、そんだから俺ら直ぐに麦の八斗はずん／＼掲げたな、俺らこんで体格（なり）はちつちえが強（つを）かつたな、俺らがな無垢（むく）に強（つえ）えのがだから、いや本当だよ、卯平等も仕事ぢや強（つを）かつたが、そりや強えとも、そんだが此ら根性やくざだから、疫病（やくびやう）くつゝいて太儀（こは）くつて仕やうねえなんて、それから俺れ、確乎（しつかり）しろツちへばどうも下痢（くだ）つちや力抜けて仕やうねえ、うん／＼なんて唸つて、そんだがあん時にや嘔は可哀相なことしたな世間の奴等卯平は嘔に祟（とつつか）れべえなんちから心配（しんぺえ）すんなつて俺れ云（ゆ）つたんだな、そんだが此ら根性ねえから、俺ら心配するもな大嫌（だえきれえ）だ、それ、心配しねえで一杯（ぺえ）引つ掛けろつちんだ」

女「さうだよおめえ、酒の座敷でむつゝりしてるもな有るもんぢやねえ」

女「婆さまの手だつておめえ酒ぢや酔酩（よ

ないんだから。いや本当だよ。おれは十五（んち）日下痢して治つたが、おれは強かつたからな。いや強いともまったく。なにっていうんでおれ毎日酒を飲んだな。酒飲んぢや悪いなんて、医者なんてだめだなまるで。檳榔樹とか何とかだなんて、少しばかりづつ、削った薬なんぞまだるつこくて仕方ないから、当薬を煎じ出して、毎日おれは片口で五杯づつも飲んだな。五合ぐらい入つただろうが、おれは息もつかずだ。なあに息ついたら苦くて仕方がないんだよ」

男「おれはそれから五百匁ぐらいのシャモおとしを一羽引きくくつて一遍に食つちまつたな。そうしたら熱が出た」

p. 351

男「熱は出たが、それでおれはぐつと体に力つけちやつたな。そのせいだ十五（んち）日で治つたのは。だからおれはすぐに麦の八斗はずん／＼つけたな。おれはこれで体は小さいが強かつたな。おれのはむやみに強かつたんだから。いや本当だよ。卯平等も仕事ぢや強かつたが、そりや強いとも。だけれどもこれは根性がやくざだから、疫病（やくびやう）がくつゝいて苦しうつて仕方がないなんて。だからおれ、しっかりしろっていうと、どうも下ると力が抜けて仕方がない、うんうんなんてうなつて。だけれどもあの時には女房はかわいそうなことをしたな。世間の人等は卯平は女房にとりつかれるだろうなんていうから、心配するなつておれは言ったんだ。だけれどもこれは根性がないから。おれは心配するものは大嫌いだ。それ、心配しないで一杯引つ掛けろっていうんだ」

女「さうだよ、あんた。酒の座敷でむつゝりしているものは、あるもんぢやない」

女「婆あさんの手だつて、あんた、酒ぢやよ

つばら) あからやつて見さつせえよ」
卯平「俺ら錢(ぜね) 出しもしねえで、他人(ひと)の酒なんぞ」

女「おめえ管(かま) あもんぢやねえな、其麼(そんな) こと」

女「酒代(さかで) 足んなけりや、こつちの方に寺錢(てらせん) 出来てるよおめえ等」

p. 352

男「要(え) らねえともそんな錢(ぜね) なんぞ、俺ら博奕(ばくち) なんぞ何でも嫌(きれ) えだから」

卯平「俺らはあ錢(ぜね) も有りもしねえで」

男「又さうだこつたから仕やうねえ、勘次等懷工合(ぐえ) えつちんだから、要(え) らば何でも、汝れよこせつと斯ういふんだ。管あねえから奪取(ふんだく) つてやれ、俺らだらさうだ、いや本当だとも、躰なんぞに威張(えば) られてるなんちこと有るもんか、卯平等根性薄弱(やくざ) だから仕やうねえ」

卯平「威張らツる理由(わけ) ぢやねえが、俺ら俺れでやんべと思つてんだから」

男「躰なんぞ、承知するもんぢやねえ、あゝだ泥棒野郎、俺ら嫌(きれ) えだ、畑でも田でも油断なんねえから」

卯平「そんだが、今ぢや懷ちつたえゝ所為(せえ) か盗るな盗んねえよ」

男「なあに俺れ、蜀黍(もろこし) 伐つた時にや、勘弁しめえと思つたんだつげがお内儀さんに来(き) らツたから我慢したんだ、俺れ卯平だら槍で突つ刺(ふ) してやんだ、いや俺れにや本当に行(や) られつとも、俺ら家族(うち) の奴等げなんざぐづ／＼は云(や) あせねえだ、俺ら家(ぢ) ぢや元日にや闇(くれ) えに起きて、養着て、囲炉裏端で芋焼えてくふ縁起なんだが、俺ら家の奴等外聞(げえぶん) 悪(わり) いから厭(や) だなんて吐(ぬ) かしやがつかから、俺れ、何だとう汝(わ) ツ等、厭(や) だつちんだら厭(や) だつて今一遍云(ゆ) つて見ろ、俺れ目玉の黒(くれ) え内やさうはえがねえぞつちんだから、いや本当に俺ら聴かねえだから」

p. 353

卯平「おめえ見てえにさうは行かねえよ、他

つばらうから、やってみなさいよ」

卯平「おれは錢出しもしないで、人の酒なんぞ」

女「あんた、かまうもんぢやないよ、そんなこと」

女「酒代(さかで) たりなけりや、こつちの方に寺錢(てらせん) ができてるよ、あんたたち」

p. 352

男「いらなくとも、そんな錢なんぞは。おれはばくちなんぞは何でも嫌(きれ) だから」

卯平「おれはもう錢もありもしないで」

男「またそんなことだから仕方ない。勘次は懷具合がいいっていうんだから、いるんなら何でも、お前よこせつてこいうんだ。かまわないから、ふんだくつてやれ。おれならそうだ。いや本当だとも。躰なんぞに威張(えば) られてるなんてことがあるもんか。卯平は根性が弱いから仕方ない」

卯平「威張られるわけぢやないが、おれはおれでやろうと思つてるんだから」

男「躰なんぞ、承知するもんぢやない。あんな泥棒野郎、おれは嫌(きれ) だ。畑でも田でも油断ならないから」

卯平「だけど、今ぢや懷が少しはいいせい、とるのはとらないよ」

男「なあにおれ、モロコシ切つた時には、勘弁しないとつたんだが、おかみさんに来(き) られたから我慢したんだ。おれが卯平なら槍で突きさしてやるんだ。いやおれには本当にやられるとも。おれは、うちの奴らになんぞ、ぐずぐず言わせないんだ。おれの家じゃ元日には暗(くら)いうちに起きて、みのを着て、いろり端でイモを焼いて食うしきたりなんだが、うちの奴らが外聞(げえぶん) 悪いから嫌(きれ) だなんて言いやがるから、おれは、何だとお前ら、嫌(きれ) だつていうなら嫌(きれ) だつてもう一度言つてみる、おれの目玉の黒(くれ) いうちは、そうはいかないぞつて言うんだから。いや本当におれは聴かないから」

p. 353

卯平「お前みたいにそうは行かないよ、他人

人(たにん)は]

女「本当におめえ見てえなもなねえよ、若くえ時から毎晩酩酊(よつばら)つちや後夜(ごや)が鶏でも構あねえ馬曳で帰(けえ)つちや戸の割れる程叩いて、さうしちや馬の裾湯沸えてねえつて云つちや家族(うち)の者こと追ひ出してなあ、百姓はおめえ夜中まで眠んねえで待つちや居らんねえな、そんだがおめえも相続人善く出来て仕合だよなあ」

男「俺れにや打(ぶ)ち出されつとも、此んで俺ら力は強(つを)かつたかんな、仕事ちや卵平も強(つを)かつたが、かうだ大(えけ)え体格(なり)して相撲ちや俺れにやかたでべた\ /だ。俺らやあつち内にや打(ぶ)ん投げつちやあだから、あゝ、俺ら腕ばかしぢやねえ、そらつ位(くれえ)だから歯も強(つえ)えだよ、俺ら麦打(むぎぶち)ん時唐箕立てゝちや半夏桃(はんげもゝ)貰つたの、ひよえつと口さ入(せ)えたつきり、核(たね)までがり\ /噛つちやつたな、奇態(きたい)だよそんだが桃噛つてつと鼻ん中さ埃へえんねえかんな、俺れが歯ぢや誰(た)れでも魂消んだから真鍮の煙管なんぞ、銜(くうえ)えてぎりぎりつとかう手ツ平でぶん廻(まあ)すとぼろうつと噛み切れちやあのがんだから、そんだから今でも、かうれ、此の通りだ」

p. 354

男「俺らそれから、喧嘩ちや負けたこたねえだよ、野郎何だつち内にや打(ぶ)つ張るか、搔つ転すかだな、ごろり転がつた処(ところ)爪先と踵(くびす)持つてかうぐる\ /引ん廻(まあ)すとどうだ大(えけ)え野郎でも起きらんねえだよ、から笑止(をか)しくつて仕やうねえな、えゝか、斯う、かうやんだよ、あゝ、俺ら本当に強(つえ)えのがんだよ、それ卵平等駄目だな後(うしろ)の方にばかり隠れてゝからつき」

男「そんだが俺れ旦那に云(や)あれてから、家族(うち)の奴等ことも怒んねえはあ、俺れうめえ処(とこ)見られつちやつたな、いや云(や)あれちや勿体(もつてえ)ながす、本当に勿体ねえだよ、お婆さん」

は]

女「本当に、あんたみたいな者はないよ。若い時から毎晩よつばらつて、真夜中でも夜明けでもかまわない。馬を曳いて帰っては戸の割れる程叩いて、そうして馬の足を洗う湯が沸いていないつて言つて家族の者を追ひ出してねえ。百姓は、あんた、夜中まで眠らないで待つてられないよ。それでも、あんたも相続人がよくできて、しあわせだよねえ」

男「おれにはつき出されるとも、これでおれは力は強かつたからな。仕事じや卵平も強かつたが、こんな大きな体をして相撲じやおれにはまるでべたべただ。おれは、やあつという間にぶん投げてしまうんだから。ああ、おれは腕だけじゃない、そのくらいだから歯も強いんだよ。おれは麦打ちの時唐箕を立てていて、半夏桃もらつたのを、ひよつと口の中へ入れたつきり、種までがりがりかじちやつたな。ふしぎだよ、それでも。桃かじつてると鼻の中へほこりが入らないからな。おれの歯じゃ、だれでもたまげるんだから。真鍮のキセルなんぞは、くわえてぎりぎりとかう手の平でぶん廻すとぼろつと噛み切れちやつたんだから。だから今でも、これこのとおりだ」

p. 354

男「おれは、だから、けんかじや負けたことはないんだよ。野郎何だつていううちに、ぶんなぐるか、かつ転がすかだな。ごろり転がつたところを爪先とかかちを持って、かうぐるぐる引き回すと、どんな大きな野郎でも起きられないんだよ。まったくおかしくて仕方ないな。いいか、こう、こうやるんだよ。ああ、おれは本当に強かつたんだよ。それを卵平なんかだめだな、後ろの方にばかり隠れてて、からつきし」

男「だけでも、おれは旦那にいわれてから、うちの連中のことも怒らないよ、もう。おれ、うまいところ見られちやつたな。いや、言われちや、もつたいないです、本当にもつたいないんだよ、お婆あさん」

女「駐在所来たよ」

p. 355

女「こつちの方酷く威勢（えせい）えゝから俺らも仲間入らせてもらえてもんだ」

男「この婆等寄れば触（さあ）れば博奕（ばくち）なんぞする気にばかり成つて」

女「かうだ婆等だつてさうだに荷厄介（にやつけえ）にしねえでくろよ、こんで俺ら家（ち）ぢやまだ俺れなくつちや闇（くらやみ）だよおめえ、嫁があのお仕掛だもの」

女「俺らあ仲間も寺銭で後買あから、独でむつゝりしてねえで一つやらつせえね」

p. 356

男「婆等勿体（もつてえ）ねえことすつから仕やうねえ、いや勿体ねえとも米の油だからこんで、それ証拠（しやうこ）にや酒飲んだ明日ぢや面（つら）洗あ時つる／＼すつ処（とこ）奇態（きてえ）だな、何でも人間は油吹き出すやうだら身体は大丈夫（だえぢやうぶ）だから、卯平（うへい）そうれ一杯（べえ）飲め」

男「畜生（ちきしやう）だからあゝだ野郎（やろう）は、畜生とおなじだから」

女「其麼（そんな）におめえ、畜生だなんて、手もとも見もしねえで」

男「いやツ、お婆さん、手もと見ねえつたつてさうに極つてんだから、いや本当だよ。俺ら嘘（ちく）いふな嫌（きれ）えだから、そんだがあのお魔（ま）もづう／＼しい阿魔（あま）だ、此間（こねえだ）なんぞおつかこた思ひ出さねえかつつたら、思ひ出さねえなんて吐かしやがつて」

卯平「ありやあそれ、俺れがにやえゝんだよ、随分辛（つれ）え目に逢つたから、お袋（ふくろ）こと思（ま）あねえこたねえが、悉皆（みんな）擲揄（からげ）え／＼したからそんでさうだこといふやうん成つたんだな、有繫（まさか）あれだつて困つちや居んだから、何ちつたつてあれにや罪（つみや）あねえよ」

卯平「勘次（かんじ）も辛かつたんべが、俺らも品（しな）に死なつた時にや泣（な）えたよ、あれこた三つの時ツから育つたんだから」

p. 357

女「ほんにおめえもお品（しな）さんに死（なく）な

女「駐在所が来たよ」

p. 355

女「こつちの方はひどく威勢（えせい）がいいから、わたしも仲間入りさせてもらいたいねえ」

男「このばばあらは、寄ると触ると、ばくちなんぞする気にばかりなつて」

女「こんなばばあだつて、そんなに荷厄介（にやつけえ）にしないでよ。これで私の家（うち）じゃ、まだ私がいなくちゃ暗闇（くらやみ）だよ、あんた。嫁があのおままだもの」

女「私（わたし）たち仲間も寺銭（てらぜに）で後（あと）を買うから、ひとり（ひとり）でむつゝりしてないで、一つ（ひとつ）やりなさいよ」

p. 356

男「ばばあ、もつたいないことするから仕方がない。いやもつたいないとも。米の油（あぶら）だから、これで。その証拠（しやうこ）には酒飲んだ次の日には顔を洗う時つるつるするところが不思議（ふしぎ）だな。何でも人間（にんげん）は油（あぶら）を吹き出すやうなら体（てい）は大丈夫（だいちやうぶ）だから。卯平（うへい）それ一杯（べえ）飲め」

男「畜生（ちきしやう）だから、あんな野郎（やろう）は。畜生（ちきしやう）とおなじだから」

女「そんなに、あんた、畜生（ちきしやう）だなんて。確か（たしか）めもしないで」

男「いやツ、お婆（おばあ）さん、確か（たしか）めなくたって、そうにきまつてるんだから。いや本当（ほんとう）だよ。おれは嘘（ちく）をいうのは嫌（きら）いだから。しかし、あのおまも、ずうずうしいあまだ。このあいだなんか、おかあさんのこと（こと）思ひ出（おも）さないかかつてつたら、思ひ出（おも）さないなんて言（い）やがつて」

卯平「あれはそれ、おれにはいいんだよ。随分（ずいぶん）つらい目（め）にあつたから、お袋（ふくろ）を思（おも）わないことはないが、みんながからかいからかいしたから、それでそんなことを言（い）うようになつたんだな。さすが（さすが）にあれだつて困（こ）ってはいるんだから。何（なに）てつたつてあれには罪（つみ）はないよ」

卯平「勘次（かんじ）も辛（つれ）かつただろうが、おれも品（しな）に死（し）なれたときには泣（な）いたよ。あれは三（さん）つの時（とき）から育（そだ）てたんだから」

p. 357

女「本当に（ほんとうに）、あんたもお品（しな）さんに亡（な）くなられ

らつたのが不運(くされ)だつけのさな、
そんだがおめえ長命(ながいき)したゞけ
ええんだよ

卯平「手足も利かなくなつちやつて銭(ぜね)
はとれずはあ、野田で拵(こせ)えた単衣
物(ひてえもの)もなくしつちやつたな、
どうせこれ、来年の夏まで生きてられつか
何うだか分りやすめえし、管あねえな」

女「そんだが娘も年頃来てんのに遣るとかと
るとかしねえちや可哀相だよなあ」

卯平「どうするこつたか自分の子供でもあり
やすめえし、俺らがにや分んねえな」

女「そんだがよ、噺(はな)してやつとえゝ
んだな、出すと極りや幾らでも口は有らな」

女「徒勞(むだ)だよおめえ、誰(だれ)が
いふことだつて聴く苦勞はねえんだから」

p. 358

女「そんぢや隣の旦那にでもようく噺(はな)
してもらつたら聴くかも知んねえぞ、それ
より外あねえぞおめえ」

卯平「さうすりやはあ、お互(たげえ)にえゝ
塩梅(あんべえ)で疵もつかねえんだから、
俺れもさうは思つちや居んだが、此れ、い
ふのをかしなもんで」

男「なあに、さうだもかうだも有るもんか、
えゝから、さうだ奴等打つ飛ばしてやれ」

卯平「うむ、なあに俺れもそれから去年の秋
は火箸で打つ飛ばしてやつたな」

男「さうだとも、銭(ぜね)でも何でも呉ん
なけりや、よこせつちばえゝんだ、銭ねえ
なんちへば米でも麦でも奪取(ふんだく)
つてやれ」

卯平「それでも俺れ打つ飛ばしてから質の流
れだなんち味噌一樽買ったな、麩(ふすま)
味噌で佳味(うま)かねえが今ちやそん
でもお汁(つけ)は吸へるこた吸へんのよ」

男「食料(くひもの)惜しがるなんち業つく
ばりもねえもんぢやねえか、本当に罰つた
かりだから、俺らだら生かしちや置かねえ、
いや全くだよ、親のげ食(か)あせんの惜
(をし)いなんち野郎は突つ刺(ぶ)した
つて申し開き立つとも、俺らだら立派に立
てゝ見せらな、卯平確乎(しつかり)しろ、
俺らだら勘次等位(ぐれえ)なゝ又うんち

たのが不運だつたのさなあ。だけど、あんな、
長生きしただけいいんだよ」

卯平「手足も利かなくなつちやつて銭はとれ
ず、もう、野田でこしらえた単衣物もなく
しちやつたな。どうせこれ、来年の夏まで
生きていられるかどうか分りゃしない
し、かまわないな」

女「だけど、娘も年ごろになるのに、やる
とかとるとかしなけりや、かわいそうだよ
なあ」

卯平「どうすることだか、自分の子どもでも
ありゃしないし、おれには分からないな」

女「だけどさ、話してやるといいんだな。出
すときまれば、いくらでも口はあるよ」

女「むだだよ、あんな。だれが言うことだつ
て聞くはずはないんだから」

p. 358

女「それじゃ隣の旦那にでもようく話しても
らつたら聞くかもしれない。それより外は
ないよ、あんな」

卯平「そうすればもう、お互(たげえ)にいい具合
に傷もつかないんだから、おれもそうは思
っているんだが、これ、言うのもおかしな
もので」

男「なあに、さうだもこうだもあるもんか。
いいから、そんな奴はぶんなぐつてやれ」

卯平「うん、なあにおれも、だから去年の秋
は火箸でぶんなぐつてやつたな」

男「さうだとも、銭(ぜね)でも何でもくれなけりや、
よこせつて言えばいいんだ。銭がないなん
ていったら米でも麦でもふんだくつてや
れ」

卯平「それでも、おれがぶんなぐつてから質
の流れだなんていう味噌も一樽買ったな。
ふすま味噌でうまではないが、今ちやそれ
でも汁を吸えることは吸えるのさ」

男「食(け)物を惜しがるなんて業つくばりもな
いもんぢやないか。本当に罰あたりだから、
おれなら生かしてはおかない。いやま
つたよ。親に食わせるのが惜しいなんて野
郎は突き刺したつて申し開き立つとも。
おれなら立派に立てて見せるよ。卯平、し
つかりしろ。おれなら勘次みたいなやつは、
またうんという目にあわせるぞ。いや本

目に逢あせらな、いや本当に俺れに掛つちや酷えかんなこんで

p. 359

女「さうだこと云（ゆ）つたつておめえ、以前（めえかた）から他人（ひと）のこと切つたこともねえ癖に」

男「そんだが、この年齢（とし）になつて懲役に行くな厭（や）よ俺れも」

卯平「勘次等、そんな時から俺れた口も利かねえや」

男「口利かねえ、そんだら口両方へふん裂（ぜ）えてやれ、さあ利くか利かねえかと斯うだ」

男「確乎しろえ、えゝから」

p. 360

卯平「おつう、米と挽割麦（ひきわり）出せ」

卯平「夥多（みつしら）出せ」

おつぎ「何すんでえ、爺は」

おつぎ「明日（あした）、要（え）れば出してやんびやな、爺等どうせ夜なんぞ要（え）りやすめえしなあ」

二五

p. 373

卯平「汝（わ）りや、今日はどうしてさうえに早（はえ）えんでえ」

与吉「あゝ」

与吉「先生そんなでも、明日は日曜だから此れつ切で帰（けえ）つてもえゝつちつたんだ」

卯平「午餐（おまんま）くつたか」

卯平「汝りや、爺が膳さかうだに滾（こぼ）して」

卯平「おとつゝあに見らつたら怒られつから」

卯平「汝ツ等おとつゝあは怒りつ坊（ぼ）だから」

p. 382

勘次「汝りやどうしたんだ」

与吉「木の葉へ火（ひい）くつゝえたんだ」

勘次「汝（われ）でも悪戯（いたづら）したんぢやねえか」

与吉「俺ら爺（ぢい）と火（ひい）あたつたんだ、さうしたらくつゝかつたんだ」

p. 383

おつぎ「爺（ぢい）」

p. 384

おつぎ「爺も火傷（やけど）したのか」

に、おれにかかっちゃひどいからな、これで」

p. 359

女「そんなこと言つたつて、あんた、前からひとのこと切つたこともないくせに」

男「それはそうだが、この年になつて懲役に行くのは嫌だよおれも」

卯平「勘次は、その時からおれとは口も利かないよ」

男「口利かない。そんなら口を両方へ裂いてやれ。さあ利くか利かないかこうだ」

男「しっかりしろ。いいから」

p. 360

卯平「おつう、米とひきわりを出せ」

卯平「たくさん出せ」

おつぎ「何するの、おじいさんは」

おつぎ「あした、いるなら出してあげるわよ。おじいさんは、どうせ夜なんかいいりやしないでしょう」

二五

p. 373

卯平「お前は、きょうはどうしてそんなに早（はえ）いんだい」

与吉「ああ」

与吉「先生がそれでも、あしたは日曜だからこれで帰つてもいいつて言つたんだ」

卯平「昼飯は食つたのか」

卯平「お前は、おじいさんの膳にこんなにこぼして」

卯平「おとうさんに見られたら怒られるから」

卯平「お前のおとうさんは怒りん坊だから」

p. 382

勘次「お前はどうしたんだ」

与吉「木の葉へ火（ひい）がくつゝいたんだ」

勘次「お前でもいたづらしたんぢやないか」

与吉「おれはおじいさんと火にあたつていたんだ。そうしたら火がついたんだ」

p. 383

おつぎ「おじいさん」

p. 384

おつぎ「おじいさんも、やけどしたの」

おつぎ「痛(え)てえか、そんでもたえした
こともねえから心配(しんべえ)すんなよ」

二六

p. 391

おつぎ「爺、そんでもちつた塩梅(あんべえ)
よくなつたやうだが、痛かねえけえ」

おつぎ「さうだにかゝんなくつても癒んべな
あ」

p. 392

卯平「うむ」

おつぎ「そんでもどうにか家(うち)も拵(こ
せ)えたから、爺ことも連れてくべよなあ」

卯平「どうえの建てゝえ」

おつぎ「どうえのつて爺は、焼けた柱掘立(ほ
つた)てたのよ、そんだから壁も塗んねえ
のよ」

卯平「そんぢや、藁か萱でおツ塞(ぶて)え
たんでもあんびや」

おつぎ「うむ、さうだあ、そんだから触(さ
あ)つとがさ\／すんだよ」

おつぎ「痛(いて)えのか」

おつぎ「又来つかな」

p. 393

男「おめえ、さうだに力落すなよ、此らつ位
(くれえ)な火傷なんぞどうするもんぢや
ねえ、俺れ癒してやつから、どうした彼ん
時からぢや痛かあんめえ、彼(あ)の禁厭
(まじねえ)で火しめしせえすりや奇態(きて
てえ)だから」

男「力落しちや駄目だから、俺らなんぞこん
な処(ところ)ぢやねえ、こつちな腕、馬
に咬(かま)つた時にや、自分で見ちやえ
かねえつて云(ゆ)はつたつけが、そん
でも俺れ自分で手拭(てねげ)の端斯(う)歯
で啗(くえ)えてぎいゝつと縛つて、さうし
て俺ら馬曳(うまひ)いて来たな、汗は豆粒(まめつぶ)位(ぐれ
え)なのぼろ\／垂れつけがそんでも到頭
我慢(まん)しつちやつた、何でも力落(り)せえしな
けりや癒(い)んな直(すぐ)だから、年寄(としよ)い
つちや癒(い)りが面倒(めんどう)だの何だ(なに)のつてそんな
たあねえから」

p. 394

男「俺らそんだが、さうえ怪我(けが)しても馬(うま)は憎
かねえのよ、馬(うま)に煎(い)れんのが癖(くせ)でひゝ

おつぎ「痛い? でも、たいしたことはない
から心配(しんべえ)しないでね」

二六

p. 391

おつぎ「おじいさん、それでも少しは具合
がよくなつたようだけど、痛くない?」

おつぎ「そんなにわからなくても治(い)るでし
うよ」

p. 392

卯平「うん」

おつぎ「それでも、どうにか家(うち)もこしらえ
たから、おじいさんも連れていこうねえ」

卯平「どういふの建てたんかい」

おつぎ「どういふのつておじいさん、焼けた
柱(はしら)を立てたのよ。だから壁(かべ)も塗(ぬ)らないのよ」

卯平「それぢや、わらかかやで、ふさいだの
かなあ」

おつぎ「うん、そう。だから触(さわ)るとがさがさ
するの」

おつぎ「痛い?」

おつぎ「また来るからね」

p. 393

男「お前、そんなに力落(り)とすなよ。このくら
いのやけどなんぞ、どうってことはない。
おれが治(い)してやるから。どうだい、あの時
からみると、痛くないだろう。あのまじな
いで火(ひ)を湿(ぬ)しさえすりや、ふしぎだから」

男「力落(り)としちゃだめだから。おれなんぞは、
こんなところじゃない、こつちの腕、馬(うま)
にかまれた時には、自分で見ちやいけない
つて言(い)われたが、それでもおれは自分で手拭
いの端(は)をこ歯(う)でくわえて、ぎいいと縛
つて、そうしておれは馬(うま)を曳(ひ)いて来たな。
汗(あせ)は豆粒(まめつぶ)ぐらいなのが、ぼろぼろ垂(た)れたが、
それでもとうとう我慢(まん)しちやつた。何でも
力落(り)としさえしなけりや治(い)るのはすぐだか
ら。年(とし)をとると治(い)りが面倒(めんどう)だの何だ(なに)のつて、
そんなことはないから」

p. 394

男「おれは、けども、そんなに怪我(けが)しても
馬(うま)は憎(にく)くはないのさ。馬(うま)にほれるのが癖(くせ)で、

んと騒いだ処（ところ）俺れ手（てえ）横
さ出して抑えたもんだから畜生（ちきしや
う）見界（みさけえ）もなく嚙（かぢ）ツ
たんだからなあ」

与吉「俺ら白（しれ）え薬貼つたんだぞ」
男「なあに、さうだ物（もん）なんぞ貼んね
えツたつて汝ツ等がよりやこつちの方が早
く癒つから」

与吉「それでも俺れこたはあ、来（き）なく
つても癒つからえゝつて薬よこしたんだ
ぞ」

男「癒るもんかえ、汝等（わつら）が」
与吉「癒らあえ、そんだつて痛かねえ俺ツ等」
卯平「その白（しれ）え薬だツちのよこした
のか」

与吉「さうなんだわ」
卯平「汝りや、それ姉（ねえ）にでも貼つて
もらあのか」

p. 395

与吉「俺ら貼んねえ」
卯平「そんぢや薬はどうしたんでえ、汝りや
あ」

与吉「おとつゝあ持つてんだから俺ら知んね
え」

男「えゝからそんな薬なんぞのこと構（かめ）
えたてんなえ、此れで癒つから」

男「乞食（こちき）野郎奴、汝ツ等が親爺は
見やがれ、汝（われ）こた医者さ連れてく
錢（ぜに）持つてけつかつて、此処さは一
度でも来やがねえ畜生（ちきしやう）だ
から、見ろ。其のツ位（くれえ）だから
罰当つて丸焼に成つちやあんだ」

与吉「おとつゝあは爺に焼かつたツちツてん
だあ」

男「汝等（わつら）親爺奴云（ゆ）つたのか」

男「汝りや何ちつたそんで」

与吉「俺ら火（ひい）あたつてたら木（き）
の葉さくつゝえたんだつて云（ゆ）つたん
だあ」

卯平「さう云（ゆ）はつても仕方ねえよ」

p. 396

男「篋棒（べらぼう）、つん燃（も）したくつ
て、つん燃すもの有るもんか」

男「過失（えゝまち）だもの後で何ちつたつ
て仕やうあるもんぢやねえ」

ひひんと騒いだところ、おれ手を横に出し
て抑えたもんだから、畜生見さかいもなく、
かじったんだからなあ」

与吉「おれは白い薬貼つたんだぞ」
男「なあに、そんな物なんぞ貼らなくたって、
お前のよりこつちの方が早く治るから」

与吉「それでも、おれには、もう来なくても
治るからいいつて薬よこしたんだぞ」

男「治るもんか、お前のは」
与吉「治るよ。だつて痛くないよ、おれは」
卯平「その白い薬だつていうの、よこしたの
か」

与吉「そうなんだよ」
卯平「お前、それ姉さんにでも貼ってもら
うのか」

p. 395

与吉「おれは貼らない」
卯平「それじゃ薬はどうしたんだい、お前は」

与吉「おとうさんが持つてるんだから、おれ
は知らない」

男「いいからそんな薬なんぞのことはかま
うな。これで治るから」

男「乞食野郎め、お前のおやじは見やがれ、
お前を医者へ連れてく錢を持つてるくせ
に、ここへは一度も来やがらない畜生だ
から。見ろ。そのくらいだから罰当たつて丸
焼けになつちやうんだ」

与吉「おとうさんは、おじいさんに焼かれた
つて言ってるんだ」

男「お前のおやじめ、言ったのか」

男「お前は何て言った、それで」

与吉「おれは、火にあたつてたら木の葉に火
がついたんだつて言つたんだ」

卯平「そう言われても仕方ないよ」

p. 396

男「べらぼう。燃やしたくたつて、燃やすも
のがあるもんか」

男「あやまちだもの、後で何と言つたつて仕
方あるもんぢやない」

与吉「それでも気の毒で来(き)らんめえつて云(ゆ)つたあ」

男「爺(おや)こと来(き)らんめえつて云(ゆ)つたのか、姉(あね)も云(ゆ)つたのかあ」

与吉「姉(あね)は云(ゆ)はねえ、姉爺(あねおや)が処(ぢ)さ行(え)ぐつちとおとつゝあ怒(い)んだ、さうしたら姉(あね)に怒(い)らつたんだあ」

男「汝(おれ)こた怒(い)んねえのか」

与吉「俺(おれ)こた怒(い)んねえ、俺(おれ)ら怒(い)つたつ位(くらい)くれえ)遁(に)げつちやあから」

与吉「爺(おや)くんねえか」

男「汝(おれ)りや何(なに)欲しいつちんだ」

卯平(うしへい)「俺(おれ)ら一(いち)銭(せん)(ひやく)もねえから」

p. 397

卯平(うしへい)「俺(おれ)らまあだ、ちつた有(あ)つたんだつげが、煙草(たばこ)入(い)れ(たぶこれ)と同志(どうし)に焼(や)えつちやつたから」

男「煙草(たばこ)入(い)れ(たぶこれ)は焼(や)けたつて銭(ぜ)ね)だら灰(はい)(へえ)搔(か)き掃(は)き(かつば)けば有(あ)る筈(はず)だ、外(あ)に盗(ぬ)す奴(やつ)ら(や)ざ有りやすめえし」

卯平(うしへい)「なあに分(わ)んねえよ、おつ(おつ)う等(ら)毎(まい)日(にち)(ま)いんち)来(き)てゝも其(その)の嘶(せ)やねえんだから、俺(おれ)らどうせ癒(い)つか何(なに)だか分(わ)りやすめえし、要(え)らねえな」

男「なあに、俺(おれ)聞(き)いて見(み)なくつちやなんねえ、出(い)すも出(い)さねえも有(あ)るもんか」

男「行(い)けはあ、汝(おれ)りや大(お)お(え)けえ姿(なり)して、呉(く)ろうの何(なに)だのつて」

二七

p. 400

おつ(おつ)ぎ「おとつゝあ」

おつ(おつ)ぎ「大(お)お(え)ん(たえへん)だよ、おとつゝあ」

おつ(おつ)ぎ「よう、おとつゝあ」

おつ(おつ)ぎ「爺(おや)(ぢい)」

おつ(おつ)ぎ「おとつゝあは、どうしたつちんだんべな」

p. 401

勘次(かんじ)「起(お)きめえか」

男「何(なに)でえ」

勘次(かんじ)「大(お)お(え)ん(たえへん)なこと出来(こ)えたよ、俺(おれ)ら家(ぢ)の」

勘次(かんじ)「来(き)てくんねえか」

与吉「それでも気の毒(にく)で来(き)られまいって言(い)つたあ」

男「おじいさんのこと、来(き)られまいって言(い)つたのか、姉(あね)さんも言(い)つたのか」

与吉「姉(あね)さんは言(い)わない。姉(あね)さんがおじいさんのところへ行(い)くつていうと、おとうさんが怒(い)るんだ。そうしたらお姉(あね)さんに怒(い)られたんだ」

男「お前のことは怒(い)らないのか」

与吉「おれのことは怒(い)らない。おれは怒(い)つたら逃(に)げちゃうから」

与吉「おじいさん、くれないか」

男「お前は何か欲(ほ)しいつていうんだ」

卯平(うしへい)「おれは一(いち)銭(せん)もないんだから」

p. 397

卯平(うしへい)「おれはまだ、少しはあつたんだが、たばこ入(い)れといっしょに焼(や)いちゃつたから」

男「たばこ入(い)れは焼(や)けたつて、銭(ぜ)なら灰(はい)をかきまわせばあるはずだ。外(あ)にとる奴(やつ)はありやしまいし」

卯平(うしへい)「なあに分(わ)からないよ、おつ(おつ)うなんか毎(まい)日来(き)ていても、その話(わ)はないんだから。おれはどうせ治(い)るかどうか分(わ)かりやしななし、いらななし」

男「なあに、おれが聞(き)いてみなければ、出(い)すも出(い)さないもあるもんか」

男「もう行(い)け。お前は大きななりをして、銭(ぜ)をくれの何(なに)のつて」

二七

p. 400

おつ(おつ)ぎ「おとうさん」

おつ(おつ)ぎ「大(お)お(え)ん(たえへん)だよ、おとうさん」

おつ(おつ)ぎ「よう、おとうさん」

おつ(おつ)ぎ「おじいさん」

おつ(おつ)ぎ「おとうさんは、どうしたつていうんだらうねえ」

p. 401

勘次(かんじ)「起(お)きてくれ」

男「なんだい」

勘次(かんじ)「たいへんなことができたよ、うちの」

勘次(かんじ)「来(き)てくれないか」

おつぎ「おとつゝあ、暖(ぬくて) えんだよ」
p. 402

おつぎ「呼吸(いき) つえてんだよ」
勘次「急(かせ) えて、それ、衣物(きもの)」
男「そんちやまあよかつた。何しても蒲団へ
寝かせた方がえゝな、暖(ぬくと) まりせ
えすりや段々よくなつべから」

男「衣物(きもの) 濡れたやうだな、脱せたら
よかつべ、それに酷く汚れつちやつたな」
男「こら暖(ぬくと) くつてえゝ塩梅(あん
べえ) だ、冷(ひえ) させちやえかねえ」
男「さうだな衣物(きもの) は焙(あぶ) る
間(えゝだ) 仕やうねえなそんちや襦袢(ど
てら) でも俺ら家(ぢ) から持つて来つと
えゝな、この蒲団だけちや暖(ぬくと) ま
れめえこら」

勘次「汝(われ) また、それ、おつう見てや
れ」

男「蒲団も持てらば持つて来た方がえゝな」
p. 406

おつぎ「爺どうした、心持悪かねえか、はあ」

おつぎ「動(いご) かねえでろ爺、喰べてえ
物でもねえか」

勘次「おとつゝあ、そんでもちつた確乎(し
つかり) してか」

勘次「おとつゝあ、火傷(やけど) は痛(え
て) えけまあだ」

卯平「枕はおつゝけらんねえな」
p. 407

卯平「おつう」

おつぎ「何でえ」

卯平「熱ぼつてえから一枚(めえ) とつてく
んねえか」

おつぎ「本当に暖(ぬくと) く成つたんだよ
なあ日輪(おてんとさま) まで酷く眩(ま
ちつ) ぼくなつたやうなんだよ」

おつぎ「此の蒲団は板子端(いたツばち) 見
てえなんだよなあ、此れとつた方が爺は軽
く成つてよかつべなほんに、さう云(ゆ)
つても暖(ぬくと) くなるつちやえゝもん
だよ、俺ら昨日等見てえぢやどうすべと思
つたつきや」

p. 408
卯平「彼岸過ぎて斯うだことつちや俺ら覚(お

おつぎ「おとうさん、あつたかいんだよ」
p. 402

おつぎ「息をしてるんだよ」

勘次「急いで、それ、着物」

男「それじゃまあよかつた。何にしても蒲団
へ寝かせた方がいいな。暖かくなりさえす
れば、段々よくなるだろうから」

男「着物が濡れたやうだな。脱がせたらいい
だろう。それに、ひどく汚れちゃったな」

男「これは暖かくていいあんばいだ。冷えさ
せちゃいけない」

男「さうだな、着物はあぶる間は仕方ないな。
それじゃどてらでもおれの家から持つて来
るといいよ。この蒲団だけじゃ暖まれない
だろう、これは」

勘次「お前はまた、それ、おつう見てやれ」

男「蒲団も持てれば持つてきた方がいいな」
p. 406

おつぎ「おじいさん、どう、気持ち悪くない
でしょう、もう」

おつぎ「動かないでね、おじいさん。食べた
い物でもない？」

勘次「おとうさん、それでも少しは元気がで
たか」

勘次「おとうさん、やけどは痛いかい、まだ」

卯平「枕は当てられないな」
p. 407

卯平「おつう」

おつぎ「なあに？」

卯平「熱いから一枚とつてくれないか」

おつぎ「本当に暖かくなつたんだねえ。おて
んとさままで、ひどくまぶしくなつたよう
なんだよ」

おつぎ「この蒲団は板きれみたいなんだよね
え。これをとつた方が、おじいさんは軽
くなっていいでしょうねえ、本当に。何と言
つても暖かくなるってことはいいものよ。
私きのうみたいだと、どうしようかと思つ
たのよ」

p. 408
卯平「彼岸過ぎてこんなことつて、おれが覚

べ) えてからだつて滅多にやねえこつたから此れから暖(ぬくと)く成るばかりだな、麦も一日毎(いちんちごめら)に腰引つ立たな」

おつぎ「俺ら家(ぢ)の麦は今ん処(ところ)ぢや村落(むら)でも悪かねえんだぞ、俺らそんだが先(せん)の頃(こ)ら畑耕(うな)あな厭(や)だつてな本当に、おとつゝあにや深く耕(うな)へ、深く耕あねえぢや肥料(こやし)したつて役にや立たねえからなんて怒られてなあ」

卯平「うむ、畑(はたき)や深くなくつちや収穫(と)んねえものよそら、俺らあ壮(さかり)の頃にや此間(こねえだ)のやうに浅く耕あもんだと思(ま)あねえのがんだから、現在(いま)ぢやあ、悉皆(みんな)利口(りく)んなつてつから俺らがにや分(わ)んねえが」

おつぎ「深く耕つちや逆旋毛(さかさつむじ)立てる見てえで行(や)りつけねえぢやなんぼ大儀(こえ)えかよなあ、そんだが俺ら今ぢや、汝(われ)の方が俺れより深(ふけ)えつ位(くれえ)だなんておとつゝあにや云(ゆ)はれんよ」

卯平「大儀(こえ)えにもよそら、そんでも汝(われ)りや能くやんな、以前(めえかた)は女に三年作らせちや畑は出来なくなるつちつた位(くれえ)だ」

おつぎ「そつから俺ら幾(いく)らも耕(うな)えねえんだよこの頃(ご)らそんでもさうだに大儀(こえ)えた思(おも)はなくなつたがな俺らも」

p. 409

おつぎ「爺(ぢ)は手も痛(いた)くしてんだつてな、そんぢや先刻(さつき)薬(くすり)貼(は)つて貰(もら)あとこだつてな」

おつぎ「こつちはそれ程(ほど)だひどかねえやそんでもなあ」

勘次「どうしてえおとつゝあ、昨夜(ゆんべ)はそんでも寒(ひや)かなかつたつてえ」

おつぎ「熱(あつ)ぼつてえつて今蒲団(ふとん)一枚(いちまい) (いちめえ)とつた処(ところ)なんだよ」

勘次「うむ、さうだ、此(こ)の蒲団(ふとん)は返(かへ)さなくつちやなんねえから」

勘次「どうしたおとつゝあ、薬(くすり)貼(は)つてちつた

えているところでは、めったにないことだから、これから暖(ぬか)くなる一方(いつぱ)だな。麦も一日ごとに腰(こし)が立(た)ってくるよ」

おつぎ「うちの麦(こむぎ)は、今のところ村(むら)でも悪(わる)くないんだよ。私は、だけど、前(まへ)には畑(はたき)を耕(か)すのは嫌(いや)だったわよ、本当に。おとうさんには、深く耕(か)せ、深く耕(か)さなければ肥料(ひょうりょう)をやつたつて役に立たないから、なんて怒(いら)れてねえ」

卯平「うん、畑(はたき)は深くなくちやとれないもんだよ、なあ。おれが若いころは、このごろみたいに浅(あ)く耕(か)すものだとは思(おも)わなかったんだから。今(いま)じゃもう、みんな利口(りく)口(く)になつてるから、おれには分からないが」

おつぎ「深く耕(か)すと体が逆(さか)さになるみたいで、なれないと本当に疲(つか)れるのよねえ。だけども、私(わたし)、今(いま)では、お前(まへ)の方がおれより深(ふ)いくらいだなんて、おとうさんに言(い)われるのよ」

卯平「疲(つか)れるよ、それは。それでもお前はよくやるね。以前(いぜん)は女(むすめ)に三年(さんねん)作(つく)らせたら畑(はたき)はできなくなるって言(い)つたくらいだ」

おつぎ「だから私(わたし)はいくらも耕(か)せないのよ。このごろはそれでも、そんなに疲(つか)れるとは思(おも)わなくなつただけど、私(わたし)も」

p. 409

おつぎ「おじいさんは手(て)も怪(あや)我(が)したんだつたわね、それじゃ、さつき薬(くすり)を貼(は)つてもらえよよかったわね」

おつぎ「こつちは、それほどひどくないよ、それでもね」

勘次「どうしたい、おとうさん、ゆうべはそれでも寒(ひや)かなかつたかい」

おつぎ「熱(あつ)いつて今蒲団(ふとん)一枚(いちまい)とつたところなのよ」

勘次「うん、さうだ、この蒲団(ふとん)は返(かへ)さなくつちやならないから」

勘次「どうした、おとうさん、薬(くすり)を貼(は)つて少(すく)

よかねえけ」

卯平「うむ、枕おつゝかるやうに成つたからえゝこたえゝに」

勘次「おとつゝあ、喫(た)べてえ物でもねえけえ、俺ら明日川向さ行つて来べと思ふんだ」

卯平「うむ」

p. 410

卯平「格別はあ、喫べてえつち物もねえが」

おつぎ「そんぢやおとつゝあ水飴でも買つて来てやつたらよかつつな、与吉(よき)げ隠して置けば何でも有んめえな」

おつぎ「なあ爺(ぢゝ)、その方がよかつつ」

おつぎ「おとつゝあ、どうせ茶漬茶碗も要(え)つから茶碗買つてそれさ水飴入(せ)えて縄で縛つて来(こ)う、さうすつとえゝや」

勘次「さうでも何でもすびやな」

おつぎ「それに、明日行つたら又葉貰つて来う、爺が手さも貼つてやんなくつちや仕やうねえぞ」

勘次「俺ら云(ゆ)わんねえでも葉は氣(き)い)ついていたのよ」

二八

p. 412

勘次「お内儀さん、こら運の悪(わり)い者(も)な仕やうありあんせんね」

勘次「そんぢが此れお内儀さん等家(らあぢ)からなんぞ見た日にや爪の垢だからわし等なんぞ辛(つれ)えも悲しいもねえ嘶(なん)だが」

内儀「まあ惜しいといえぱ紙一枚でも何だが、これ、家(うち)は直ぐにも建てれば建つんだが、樹が惜しいことをしたつて云(ゆ)つてるのさ、それだが此れもそんなことを云(ゆ)つたつて仕方がないがね」

内儀「どうしたね、私(わたし)も氣のつかないことをして居たが、お前も丸焼で仕やうあるまいが少しは錢(ぜに)でも持つて行くかね」

勘次「へえ」

p. 413

勘次「わしもはあ、そんならなんぼ助るかも

しはよくないかい」

卯平「うん、枕をつけられるようになったから、いいことはいいよ」

勘次「おとうさん、食べたいものでもないかい。おれはあした川向こうへ行つてこようと思うんだ」

卯平「うん」

p. 410

卯平「別段、食べたいっていう物もないが」

おつぎ「それじゃ、おとうさん、水飴でも買ってきてやつたらいいでしょう。与吉に隠しておけば何でもないでしょう」

おつぎ「なあ、おじいさん、その方がいいでしょう」

おつぎ「おとうさん、どうせ茶漬茶碗もいるから、茶碗を買つて、それに水飴入れて縄でしばつてきなさいよ。そうするといいわよ」

勘次「さうでも何でもするよ」

おつぎ「それに、あした行つたら、また葉をもらつてきてね。おじいさんの手にも貼つてやらなくつちやならないわよ」

勘次「おれは言われなくても葉は氣がついていたのさ」

二八

p. 412

勘次「おかみさん、これは運の悪い者は仕方ありませんね」

勘次「だけど、これはおかみさんの家からなんか見た日には、爪のあかだから、わしなんぞは、つらいも悲しいもない話なんだが」

内儀「まあ惜しいといえぱ紙一枚でも惜しいけど、これ、家はすぐにも建てれば建つけれど、樹が惜しいことをしたつて言つてるの。だけど、これもそんなことを言つたつて仕方がないけどね」

内儀「どうしたね。私も氣のつかないことをしていたが、お前も丸焼けでしようがないだろうが、少し錢でも持つていくかね」

勘次「へえ」

p. 413

勘次「わしももう、それならどんなに助かる

知れあせんが、お内儀さん処（とこ）さ
さう云（ゆ）つて来る訳にも行（え）がね
えで」

内儀「それだがお前にやる位ならどうにか成
るから心配しなくつても好（い）いよ」

勘次「わしもこれ、罰当つたんでがせう、さ
う思ふより外有りあせんから」

勘次「わしも鼻こと因果見せて罪作つたの悪
りいんでがせう」

勘次「お内儀さん、わしどんな形（なり）に
か家（うち）も建てなくつちやなんねえか
ら、そんな時や家族（うち）の極りもつけべ
と思つてんですが、お内儀さん又わしこと
面倒見とおくんなせえ、わし等野郎もその
内はあ大（えか）く成つて来つから学校も
あとちつとにして百姓みつしら仕込むべと
思つてんですががね」

内儀「さうかい」

勘次「お内儀さん親不孝だなんちな、親が警
察へでも願つて出なけりや巡査ばかりぢや
どうすることも出来ねえもんでござんせう
かね」

内儀「さうさね、巡査だつて無闇にどうかす
るといふこともないんだらうと思ふやうだ
がね」

勘次「これからあ、わしも爺様こと面倒見
べと思ふんですががね、今ツからでもお内
儀さん間合（まにやあ）ねえこたありあん
すめえね」

p. 414

内儀「さうだよ、老人（としより）なんてい
ふものは少しの加減なんだから、まあ心配
（しんばい）させないやうにした方が好
（い）いよ、さういつちや何だが後（あと）
幾らも生きるんぢやなしねえ」

勘次「へえさうですがすよ、昨日等（きのふら）
ツからちつと柔（やつ）え言辭（ことば）
掛けつとうるしがつて居んですから、それ
からわし野郎げ貰つて来た火傷の薬も貼つ
てやつたんでさ、薬足んなく成つちやつた
から医者様さ行つて来（く）べと思つたつ
けが、今日は午後（ひるすぎ）で居めえと
思ふから明日（あした）にすべと思つて止
めたのせ、明日行つたら水飴でも買つて来
てやれなんておつうも云ふもんでがすから

か知れませんが、おかみさんのところへそ
う言ってくるわけにもいなくて」

内儀「だけど、お前にやるくらいなら、どう
にかなるから心配しなくつてもいいよ」

勘次「わしもこれ、罰が当たつたんでしよう。
そう思うより外ありませんから」

勘次「わしも女房に悪いことをして罪作つた
のが悪いんでしよう」

勘次「おかみさん、わしどんな形にか家も
建てなくつちやならないから、その時は家
族のきまりもつけようと思つてんですが
が、おかみさん、またわしの面倒を見てく
ださい。うちの息子もそのうちにもう大き
くなって来るから、学校もあと少しにして
百姓をみっしり仕込むうと思つてんです
ががね」

内儀「そうかい」

勘次「おかみさん、親不孝だなんていうのは、
親が警察へでも願つて出なけりや巡査だけ
ではどうすることもできないものでしょ
うかね」

内儀「さうさね、巡査だつて無闇にどうかす
るといふこともないんだらうと思ふけど
がね」

勘次「これからあ、わしもじいさんの面
倒見ようと思つてんですががね、今からでもお
かみさん、間に合わないことはないでしょ
うね」

p. 414

内儀「さうだよ。年寄りなんていうものは少
しの加減なんだから、まあ心配させないよ
うにした方がいいよ。そう言つては何だが、
後いくらも生きるんぢやなしねえ」

勘次「へえそうですよ。きのうあたりから、
少し優しいことばをかけると、うれしがつ
ているんですから。だから、わしは息子に
もらつてきた、やけどの薬も貼つてやつた
んですよ。薬がたりなくなつちやつたから
医者に行つてこようと思つたんですが、き
ようは午後でいないだらうと思ふから、あ
したにしようと思つてやめたんですよ。あ
した行つたら水飴でも買つてきてやれなん
て、おつうも言うもんでがすからね」

ね」
内儀「火傷したなんて聞いたつげがそれでも家（うち）へ連れて来てかね」
勘次「へえ」
勘次「お内儀さん、こうちつとでもよくねえ錢（ぜに）へえつちや末始終はどうしてもえゝこたありあんすめえね」
内儀「さうさねえ」
勘次「そんだがお内儀さんさうえ錢（ぜに）は自分のげ役に立てせえしなけりやどうしても違（ちげ）えあんすべえね」

p. 415

内儀「さうだが、それもどういふ筋の錢だか分からないがそりや使つちやいかないんだらうさね」
勘次「そんぢやお内儀さん他人（ひと）の錢（ぜに）なくしたのなんぞ発見（めつ）けても知らねえ容子（ふり）なんぞして、後で遣（や）んな盗つた見てえで変（をか）した時や、何（なん）でかで落（おつ）ことした丈の物でもやればそれでも違（ちげ）えあんすべえね」
勘次「黙つて居ればそれつ切なんだが」
内儀「そりやそんなことしないで発見（みつ）けた物なら其俣（そつくり）返（かえ）すのが本当だよ」
勘次「そんぢやお内儀さんそれ返（けえ）して又其の外にも何かしたら冥利の悪いやうなことも有りあんすめえな」
内儀「そんなこた仕なくつたつて何もよかりさうなものだね」

p. 416

内儀「そりやさうと、お前も家族（うち）の極りをつける積だつていふんだが、まあどうする積なんだね」
勘次「さうでござんすね」
勘次「わしも此れ……」
内儀「それぢやお前、まあ此錢（ぜに）を蔵（しま）つたらどうだね」
勘次「誠にどうもお内儀さん」

内儀「やけどしたなんて聞いたけど、それでもうちへ連れてきたのかね」
勘次「へえ」
勘次「おかみさん、あの、少しでもよくない錢が入ったら、結局はどうしてもいいことはないでしょうね」
内儀「そうさねえ」
勘次「だけどおかみさん、そういう錢は自分のために役に立てさえしなければ話は別でしょうねえ」

p. 415

内儀「だけども、それもどういふ筋の錢だか分からないが、それは使つちやいけいかないだらうね」
勘次「それじゃおかみさん、他人の錢をなくしたのなどを見つけても、知らないふりなぞして、後でとつたのとらないのと、変なことになった時には、どうかして、落としただけの物でもやれば、それでも違（ちげ）うでしょうねえ」

勘次「黙っていれば、それつきりなんだが」
内儀「そりや、そんなことしないで、見つけた物ならそっくり返すのが本当よ」

勘次「それじゃおかみさん、それを返して、またその外にも何かしたら、罰があたるやうなこともないでしょうねえ」
内儀「そんなことをしなくつたつて、何もよきさうなものだけだね」

p. 416

内儀「そりやさうと、お前も家族のきまりをつけるつもりだつて言うんだが、まあどうするつもり？」
勘次「さうでござんすね」
勘次「わしもこれ」
内儀「それじゃお前、まあこの錢をしまつたらどう？」
勘次「まことにどうも、おかみさん」

あとがき — 朗読についての解説

朗読者・宮島の経歴は、つぎのとおりである。

茨城県水海道[みつかいどう]市中妻[なかつま]町十家[じっけ]，1931年生まれ。

16歳まで同地。以後の居住歴は、水戸1年・東京周辺43年・大阪京都11年。

したがって、以下の点では朗読者としての適格性にかける。

節より50年、「土」発表に比べても20年おそく生まれた。

十家は国生から8キロほど離れており、完全な地元とはいえない。

成人以後の他地方居住歴がながすぎる。

しかし、地元でも本来の発音が急速にうしなわれつつある現在、できる時には録音をとるべきである。将来、もっと適任の方が別の録音をされれば、それは、さらにけっこうなことである。源氏物語の現代語訳が何種類もあるように、朗読や標準語訳も、いくつもあっていい。さらには、これが刺激になって、ほかの地方の方言についても、ほかの作品の朗読がのこされることを期待する。

「土」には、新聞にのったもの以外、その後の単行本・全集・文庫本など、いくつかの版があり、会話部分の方言にも多少の差がある。ここでは、春陽堂版全集第一巻[1971年刊]を底本とした。これは、節が新聞切り抜きに修訂を加えたものをもとに、河合透氏が校訂したものである。録音は2002年7月に国立国語研究所録音スタジオで行った。

「土」の会話は忠実に方言をうつしているが、発音については標準語風の表記にしてある。それで、ここでは、たとえば「い」と「え」の書きわけを無視してそれらの中間音にし、語中・語尾の力行音・タ行音を濁音にする（「畑」→ハダゲ）など、現在の地元の、そしておそらくは90年前の地元でもそうだったとおもわれるような発音で朗読した。「ものだ～もんだ」「べ～べえ」など、実際の発音でもゆるるような、こまかい点は、朗読のときの気分・勢いにまかせた。

この録音と標準語訳をつくるにあたって、大勢の方のお世話になったが、とくに以下の点で協力をあおいだ方々に、あつくお礼をもうしあげる。

原文の入力：佐々木冠氏

録音・編集：前川喜久雄氏・兵藤銀河氏

方言の解釈：河合宏氏・川村安宏氏・猪瀬かね氏ほか，長塚節研究会・
石下町歴史を語る会のみなさん

2003年7月

宮島達夫

Summary

A sample of conversations of the Ibaraki dialect as reflected in a work of Takashi Nagatsuka

MIYAJIMA Tatsuo

"Tsuchi" (Earth) is a novel written by Takashi Nagatsuka (1879-1915) in 1910. Though it is written in standard Japanese, conversations in it closely represent the Ibaraki dialect. The setting of the story lies in the Kanto district, not far (about 40 km) from Tokyo, but the dialect shares common peculiarities with the Tohoku dialect. For example, the syllables 'i' and 'e' merge together; intervocalic 'k' and 't' change into 'g' and 'd'; particles like '-sa' and '-bee' are used instead of '-ni' and '-yoo'. Unlike most other Japanese dialects, no expressions characteristic just of women are observed.

The dialect is quickly disappearing due to the urbanization and industrialization of the district, so the conversations in the novel are read and recorded here as a sample of the dialect.

Reference:

Takashi Nagatsuka "Earth" (translated by Yasuhiro Kawamura), 1986,
Liber Press, Tokyo

長塚節「土」会話部分の標準語訳と方言による朗読
(「環太平洋の言語」成果報告書A4-025)

**A Sample of Conversations of the Ibaraki Dialect as Reflected in a Work
of Takashi Nagatsuka
(ELPR Publications Series A4-025)**

発行日 平成15年 3 月 25 日
刊行責任者 大阪学院大学情報学部
文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究『環太平洋の
「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』」
領域代表 宮岡伯人
総括班代表 崎山 理・遠藤 史 (編集担当)
〒564-8511 大阪府吹田市岸部南 2 丁目36-1
TEL: 06-6381-8434 (代表) (内線5058)
編集 宮島 達夫 (京都橘女子大学)
印刷 中西印刷株式会社
〒602-8048 京都府京都市上京区下立売通小川東入
TEL: 075-441-3155 (代表)

Published: March, 2003

Project Director: MIYAOKA, Osahito

Editorial Board: SAKIYAMA, Osamu, and ENDO, Fubito (Assistant)

Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Areas
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology
Endangered Languages of the Pacific Rim
Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University,
2-36-1 Kishibe Minami, Suita, Osaka 564-8511, JAPAN
TEL: +81-6-6381-8434 (extension: 5058)
E-mail: elpr@utc.osaka-gu.ac.jp

Editor: MIYAJIMA, Tatsuo (Kyoto Tachibana Women's University)

Printed by Nakanishi Printing Co.,Ltd.

Shimotachiuri Ogawa Higashi, Kamikyoku, Kyoto 602-8048, JAPAN
TEL: +81-75-441-3155

ISSN 1346-082X

Copyright is jointly held by all the authors.